

追想

大城鎌吉





▲愛犬と散歩（70歳代のころ）



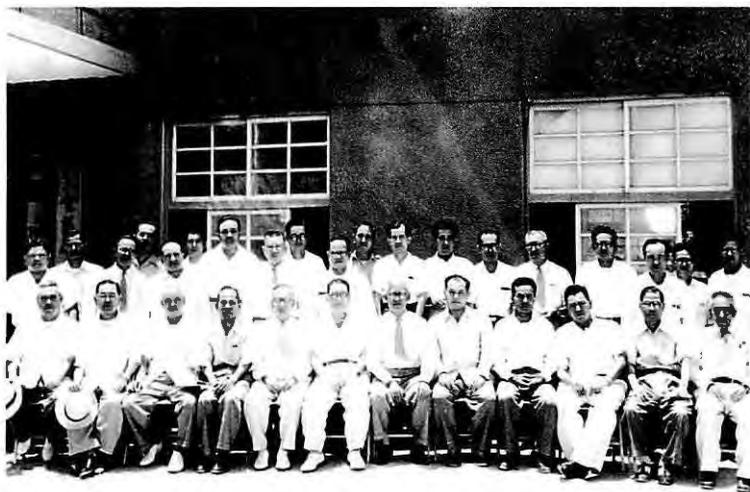
▲美栄橋の自宅にて子供達がそろって（1942年ごろ）
後列右より次男、3男
前列右よりめい、4男、6男、次女、長女、7男、5男



▲那覇市議員のころ前列左から2番目（1948年～1950年ごろ）



▲大扇会役員会（1961年）



▲琉球商工会議所の議員と共に（前列左から3番目が大城）





▲中琉協会、台湾訪問の際に



▲沖縄テレビ名士劇に出演（右から宮城和市、大城、吉濱照訓、中本正二）



▲控室にて（最前列が大城）



▲三越沖縄国際博覧会事務所開設披露パーティーにて



▲南米経済視察の際ペルーにて（1971年）

▶書齋にて書類を整理する



▲勲三等瑞宝章受賞式のパーティーにて（1968年11月3日）

琉球新報賞 贈呈式



▲琉球新報賞(産業経済功劳賞)受賞(1978年9月15日)写真琉球新報提供

▶ 沖縄タイムス賞(産業賞)受賞
写真沖縄タイムス提供(一九八八年七月一日)





▲長男・毅氏と談話



▲那覇大綱挽き道づねー



▲県の人材育成基金へ寄付（1986年5月15日）



▲ライオンズクラブのメンバーと共に



▲那覇空港ターミナルビル増設の直会の席にて



▲国映館と沖縄三越契約調印（國場幸太郎氏と）



▲左から具志堅宗精夫妻、竹野寛才夫妻と共に



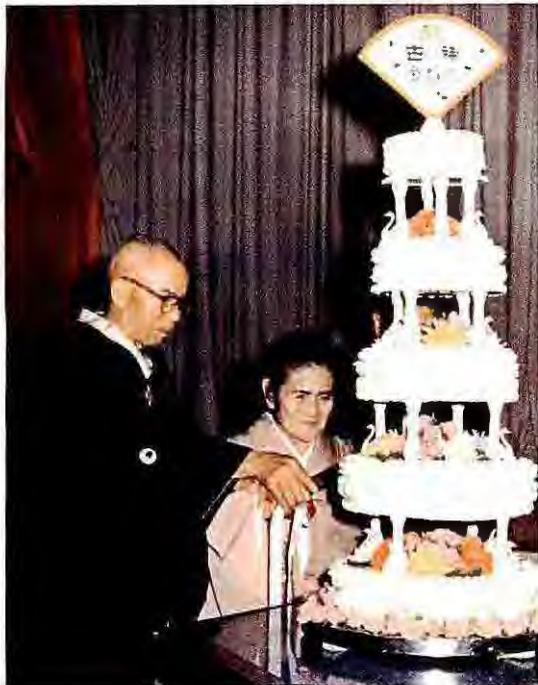
▲國場幸太郎氏主催の観桜会にて（國場夫妻と共に）



▲米寿の祝いで宮城仁四郎夫妻にかこまれてカチャーシーを踊る

▶ひ孫を抱いて

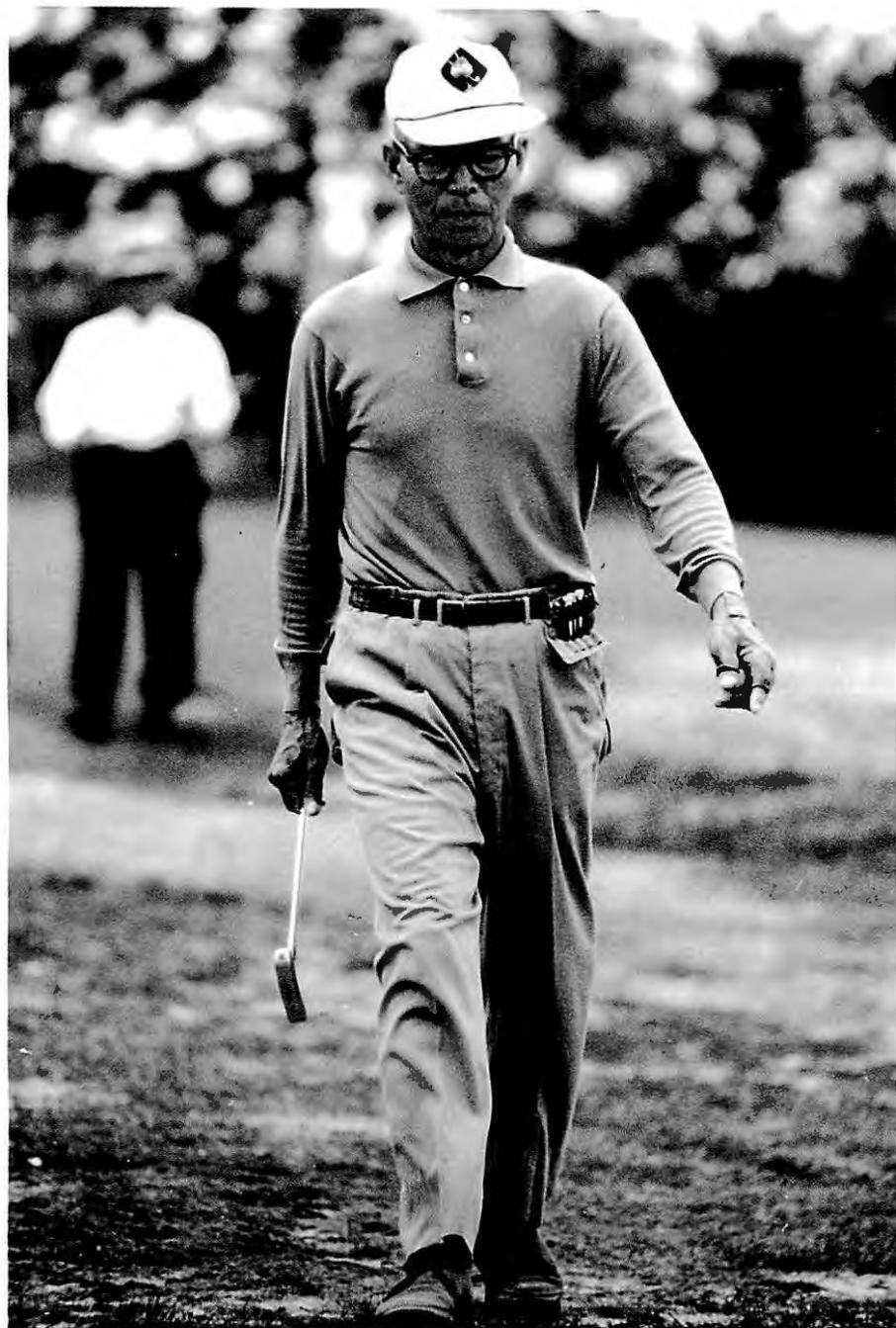




◀ 古稀に妻・清子さんと



▲米寿祝いに家族と



▲ゴルフコースにて

追想大城鎌吉

● 出版にあたって／もくじ

出版にあたって

親川光繁

このような大勢の皆さんの情愛あふれる故大城鎌吉氏を偲ぶ諸々の御寄稿をいただいてこの本を出版致すことが出来ましたこと、誠に有難く、何と御礼申し上げてよいかと、言葉を知らぬ心情でございます。

大城鎌吉氏の実業界での事業や、又、個人的日常生活、社会生活の中で、世のため、人のために歩んできたすべてのことが、皆様の筆となりました。故人もさぞかし、草葉のかけで、あのいつもの口調で「君達は僕を余りに大きく見過ぎているよ」と苦笑、遠慮しながらも、一面、感謝と共に喜んでおられることでしょう。

「序」の中には首途に送ることばという意もあるそうです。通常の著書なら書きやすいと思いますが、この種の本の場合ほどのような文にしたらよいかと迷いました。皆さんのお志が次の世の若い人々に、或は大城家御一同に必ずや何かとプラスすることだろうと信じております。

私は去年、鎌吉氏に叱られたり、笑ったりして仕えていましたが、特にご自分の子供さんたち

に対しては大変きびしかったことが脳裏を離れません。

余りきびしい場合には「何もそんなにきびしくされなくてもよいではありませんか」と苦言を申し上げると忽にわかに雷が落ちて私も叱りとばされていましたが、一応ことがおさまると「君の云う通りだよ」と笑いました。七十もかなり過ぎた頃から、私は「大城鎌吉氏に仏性が出来た」と申し上げていましたが、本当に老境に入ることは好好爺でした。

御家庭は立派な家風を築き上げてこられました。これは戦前さらに、明治青年の心意気の代表的なものでもあったと思います。世の中は著しく変わってしまいました。現代つ子に受け入れられるだろうかとも思いますが、鎌吉氏の家中心、社会連帯の東洋的、日本的沖繩的な生き方は、時代は変わっても大事にすべきことではと思います。

たまたま沖繩三越の社長を失い、社会問題となった東京地下鉄サリン事件など騒々しい近況の中で本書の発刊が有意義でありますようにと念じております。

多くの皆さんの本として発刊致しますが、多くの方がお読みくださいましたら幸甚の至りに存じます。

有難うございました。

(元那覇港運会長)

もくじ

出版にあたって 親川 光繁

第一章 私にとっての大城さん

沖繩発展のため貢献を誓い合う	宮城仁四郎	30
すぐれた近代的経営者	伊江 朝雄	34
県民の心に刻まれた偉大な業績	親泊 康晴	38
百パーセント信頼していた先輩	兼次 佐一	40
人材養成へ物心のご援助	高良 鉄夫	44
みんなのおやし	砂川 恵勝	48
ダンスに映えた枯淡と誠実	亀川 正東	52
ただよう翁の風格	喜久川 宏	56
年齢をこえたおつきあい	平田 忠義	60
見事な出处進退に感服	仲田 陸男	64

積み上げた社会修養 松川久仁男 68

諮詢会からの思い出 安里 有三 70

信頼集めた人間的魅力 赤嶺保三郎 74

沖縄成田山創立の熱意 野村 健 80

“白い狐”のこと 田辺 寿 88

第二章 大先輩を憶う

沖縄における夫婦の鑑 西銘 順治 92

戦災復興の道筋をつくる 仲村 正治 94

忘れられないお言葉 宮里 松正 98

「私の大学」を地で行く 大浜 方栄 102

“にぬふあ星”のような方 大城 真順 106

偉大な起業家の言葉に感銘 儀間 光男 110

“井戸を掘った人”を忘れず 稲嶺 恵一 114

琉球新報賞の贈呈 親泊 一郎 118

正にライオンと呼ばれる人	122
生き続ける教訓	126
オールド・パーをこよなく愛す	132
周りを心服させたお人柄	136
鎌吉さんへの思慕	140
明治人の気骨を守り抜いた人	146
思い出つれづれに	152
果たせなかつたお約束	158
おやじのような存在	162
高邁なる仁徳を思んで	164
かみしめた「鎌吉翁哲学」	168
“巨星墜つ”を実感	172
当山 堅次	122
宜保 好彦	126
古堅 哲	132
金城 幸信	136
宮城 実	140
山川 岩美	146
福地 曠昭	152
中島紀久雄	158
宮平久米男	162
比嘉 壽政	164
大城 正大	168
嘉数 栄吉	172

第三章 企業人として学んだもの

企業経営に確固たる信念	180
田場 典正	180

中琉協会で見たお人柄	有村 喬	182
深い友情と責任感	呉屋 秀信	186
御遺徳を偲ぶ	知花 成昇	190
部下に対する見事な御薫陶	石黒 茂松	196
点から線へ、線から面へ	板井 裕	200
沖繩の「松下幸之助翁」	金城 秀徹	206
大宝証券創業のご苦労	金城 弘征	210
常に県民全体のために心を砕く	川田 潤	214
大城鎌吉さんへ	波平 仁吉	218
J T A (南西航空)の生みの親	大城 判	222
「城は人だよ」の垂訓	宮城 和市	230
企業精神の先見性を学ぶ	小嶋 平馬	234
思いやりのある大きな器	宮島 健次	238
教えられた経営の基本	真喜志 一朗太	244
感銘うけた公平無私	宜保 俊夫	250
私の人生の師	佐久本尚哉	254

『沖繩の宝』を失う 中本 正二 260
感銘深い人生談 上原 和雄 266

大城鎌吉年表 271

編集後記 292

題字・宮城 和市
装丁・山川 健二

第一章 私にとっての大城さん

沖繩発展のため貢献を誓い合う

大城鎌吉

大城鎌吉さんが、入社前に自宅で倒れたとかで入院された。私は三度ほどお見舞いに病室を訪ね「まだお若いですよ」と声をかけたり、手を握って「たいへんお元気だ」と勇気づけたりしたが、残念なことに倒れたときからお声が出なくなっており、私の励ましに涙ぐんだりされた。

それからしばらくして退院されたことを知り、さっそくお宅を訪ねたが、あれから再度入院された後に亡くなられた。まだそんなお年でもないのに、心から大城さんの死を悲しんだ。

私と大城さんとの出会いは、戦後である。同郷の大宜味村出身であったが、知り合う機会はなく、戦前、大城さんは那覇で建築の仕事をしておられ、私は西原の製糖工場に勤務の後、ジャワで仕事をしていた。名前は存じていたが、お会いすることはなかった。

私はジャワで製糖工場の亜硫酸白糖製糖法などの指導に当たっていた。その頃、ジャワは日本の占領地（植民地）であった。ジャワの人達は琉球のことをよく知っていたが、琉球が日本の一部だとは思っていなかった。台湾を含めて南西諸島を「グレート琉球」と呼んでいたのには驚い

たものだ。

終戦をジャワで迎えた。戦争で日本は台湾を無くし、これからは沖縄が日本の必須甘味資源地になるであろうと私は思っていた。戦後は、これらの基幹産業（甘蔗）を中心に農業を振興して、昔の蘇鉄地獄を無くするんだーという強い思いにかられて帰郷したのが、終戦一年後であった。

郷土沖縄は船から見ても緑は無く、赤土が露出し荒廃していた。私は沖縄に戻って間もなく沖縄民政府の工業部に入り、副部長のポストをもらった。当時の大城さん達、建築業者は、新しい沖縄の住宅づくりに懸命だった。

私はあちこちの農家や住宅を見てまわり、沖縄は昔から台風が多く、その度に被害が一―二割あったので、今後の沖縄の建築は瓦造りだ。それが恒久的で安上がりだ、と米軍政府に進言すると、割りと簡単に納得してくれた。まず、瓦を安く出来るようにするため、私は米軍政府を口説き、最初に「オフマン式」の瓦工場建設費として当時のガリオア資金で五十万ドルをもらうことに成功した。各瓦工場を営んでいる業者に共同オフマン工場建設計画を提案したのであるが、私が初めて鎌吉さんにお会いしたのはその時である。

鎌吉さんや幸太郎さんは、お二人とも仕事に積極的だった。何か新しい仕事が出ると、鎌吉さんと幸太郎さんが飛び出した。

その新規事業の一つとして、大城さんは那覇飛行場の株主を引き受けられた。当初、那覇飛

行場は本土業者がやるということだった。大城さんは「琉球の仕事は琉球人が主体になってやるべきだ」と主張された。その頃から私は鎌吉さんと仲良くなったと思う。大城さんが国頭の福地ダムの建設をアメリカ側から引き受け、かなりの赤字だったのをがんばっておられた時、私の仕事は黒字だったのでお助けした覚えがある。

戦後の沖縄で何が発展したかといえば、建設業の発展はすばらしく、そのことを建設業者は誇っていると思う。とくに大城さんは、いろんな意味で正義感があり、また、大宜味大工であり、大工としての誠意ある建設業者であった。

私は民政府勤めを辞めてから、名護の屋部にセメント工場を造った。北部では瓦よりセメントの材料の方が供給しやすかったし、今後の需要もセメントが大幅に増えると見込まれたからであった。私は建築資材を提供し、大城さんはその材料を使って家を建てるという立場になった。私は大城さんの熱意が気に入り、仕事があると大城さんに依頼したり、私の会社の株主になっていただいたりした。事業者として積極的に沖縄経済へ貢献しよう、また、しているんだという意気込みと自負があった。私たちは「沖縄のためにどう貢献するか」ということについて多くを語り、共鳴した。

大城さんは、戦後の沖縄の電子事業にも大変な熱意を注いでいた。県と県民の発展のために懸命だった。彼も私も貧乏農家の出身である。共に沖縄の発展を望んだ。そんなことで大城さんと

私は、知らず知らずに仲良しになったとも思う。二人とも「もっと仕事で沢山あれば県民は榮える。沢山の仕事を作ってやろう」というのが、同じ経済人としての合言葉であった。

大城さんは大城組をはじめ琉球海運、琉映貿、沖繩配電、沖繩製瓦工業、那覇港運、国際物産、琉球放送、那覇空港ターミナル、沖繩繊維、ゴールデンウイスキー、大宝証券、ブリヂストンタイヤ、沖繩三越など多くの事業を起こされ、そのほか沖繩の時代の要請に應えた業種に参画された。

また、大城さんは「農業をしない人が土地を持っていることはよくない」とも言っていた。生来、土地は農民の物であると考えていたようだ。公共的な使命感、義務感の強い人だった。

大城鎌吉さんのゴルフにも懐かしい思い出がある。大城さんのグループ会社と私のグループ会社の両方が、大宮会と稱して琉球ゴルフ場で年に四回、手合せをした。鎌吉さんは案外ゴルフがお上手で調子もよく、鎌吉さんのためにゴルフ大会を催したようなものだった。お年の割りに元気で、私どもよりはるか遠くへ飛ばしたりして、みんなをびっくりさせたものである。

國場幸太郎さん、具志堅宗精さん、大城鎌吉さんと私の四人は、いずれも経済問題に情熱を燃やしていたため、かつては「四人男」と呼ばれていた。鎌吉さんは、とくに私欲が少なく、私はそういう鎌吉さんが好きで、すぐになにかと彼を誘ったのであった。いまは鎌吉さんのご冥福を祈るばかりである。

(琉展会会長)

すぐれた近代的経営者

伊 沼 雄

明治、大正、昭和、平成と四代にわたる激動の九十余年を生き抜き、沖縄の戦後史に、特記すべき数々の事業を仕上げるという金字塔を樹てた、この先輩は先頃、この世を去った。この偉大な先輩こそ、大城謙吉……謙吉翁その人なのだ。

在りし日の、人間像を通じて翁を偲びたいという願いが追想集の発刊となったことは、蓋し、宜なる哉である。私までも、追想集に、拙文を捧げる栄光に浴したのは、謙吉翁の、今は亡きご令息の毅君と私が同年で、且つ小学校（戦前の、那覇市立甲辰小学校）の同窓であり、唇知の友であったというご縁につながるものであらうと思われてならない。因縁を感じる。

しかし、私が翁にお目にかかったのは、そんなに古くはない。私が、参議院議員になって後のことだから昭和五十二年以後のことだ。その頃の翁は、既に、八十歳を過ぎておられたと思う。沖縄土建業界の大手、大城組の創始者であり、数多くの企業を、傘下に擁する大翁会の総師として君臨する大物のこと……正直云って、さぞ、眼光炯々、氣むずかしい、頑固親爺を思わせる風

貌だろう……とのイメージを私はもっていた。だが、そのイメージは、すぐに崩れた。確かに、
謹厳実直^{きんげんじつちく}、真面目一筋のタイプではあったが、その目差^{まざし}には温和な輝きがあり、何よりも、その
の気品に富む顔立ちには、親近感を覚えるものを感じた。若き日の翁は、さぞ、チュラニーサー
であつたらう……そう思わせる面影があつた。

琉歌に、

他所（ユス）からど、人の年や寄りしむる

肝（チム）や今（ナマ）、二十歳内（ハタチウチ）どやすが

というのがある。その心は、人間の年齢は、他人が年寄り扱いするから、年寄りに見られるの
であつて、ご本人の気持ちは、いつでも二十歳前の青春の積りであるのだ……と云うものだ。ま
こと鎌吉翁には、歌の心を見せるように、健康に恵まれて若さの氣力に満ち、齢を感じさせない
雰囲気があつた。

そのことを裏付ける一駒が、私の記憶に蘇^{よみがえ}る。七年ほど前の、たしか三月頃であつたかと思
う。首里の拙宅で、根気付けのフィージャーパーティー（やぎ汁パーティー）をやることになつて、
比較的、齢を召された方々をお誘いした。九十歳に近い鎌吉翁もお誘いに応じられたお一人であつ
た。私は、そこに、鎌吉翁の、若者をしのぐ健啖家^{けんたんか}ぶりをこの目で見た。大き日の井^{いんぶり}一杯に、
注がれたフィージャー汁を翁は、いともたやすく平らげられ、更に、引き続き再饌^{さいしん}（お替わり）

を所望しよぼうされるではないか……。九十翁、まことにお見事である。だが……

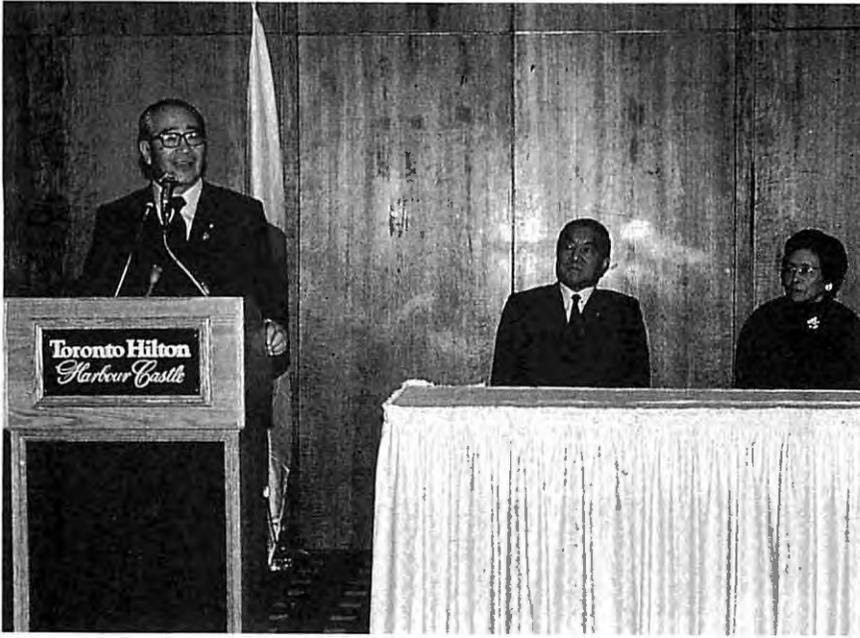
「大丈夫かナ。後で、脂酔や、脂トルバイがなければいいが……」

これは、全くの杞憂であった。人世、成功を支える鍵は、一つには、矢張り健康だナ。その見本を、目の前で見た思いであった。

九十歳になられても翁は、那覇市内の数多くある傘下企業の本社や営業所を巡回、視察されるのが日課であったという。毎朝である。自らの目で確かめ、従業員と、マンツーマンで接するという意図が秘められていたと思う。その率先垂範ぶりに、経営者の根性を教えられる思いがして頭が下がる。

しかも、その巡回の車中では、その日の朝刊のトピックニュースや、社会の動き、人の動きなど、同乗の秘書を通じてヒヤリングされていたという。身体をつかい、頭をつかって、情報を把握し、それを即日的に或いは、明日に反映させる行動となる。その感覚というか、チャレンジ精神というべきか、……まさに近代的経営の大事なノウハウを習慣的にこなしておられたわけである。翁は、矢張り、優れた経営者であったと思う。恐らく、翁は、長年の経験を通じて、それぞれの系列企業に、多くの尊い社訓を残しておられると思う。社訓：「翁の遺された経営の指針」に従い、社業の益々の発展を遂げられることこそ、鎌吉翁への何よりの手向けたむけとなるう。

ここに、ご生前賜わったご交誼を謝すとともに、心から哀悼の誠を捧たくひつげて擱筆する。(元参議院議員)



伊江氏カナダ・トロントの在留邦人会にてあいさつ

県民の心に刻まれた偉大な業績

親泊康晴

大城鎌吉さんが逝ってからはや三年の月日が経とうとしています。私は今もって沖縄の産業界の第一人者としてかけがえのない方を失った思いが深く、ご存命中に県民へもっと多くのものを伝授していただきたかったものだと、残念でなりません。

鎌吉さんには「沖縄復興の祖」「企業人の鑑」「人材育成のお手本」といった様々な表現によって、その偉業が讃えられています。それだけに鎌吉さんが沖縄県民に与えた影響は大なるものがあり、かつ多方面にわたるご活躍の証だと、あらためて大先輩の偉業に感服する次第です。

特に戦前、二十三歳の若さで艱難辛苦かんだんしんくの末に大城組を創設、戦後の混乱期には那覇市復興建設隊として瓦礫となった那覇の再建に尽くし、沖縄復興に敏腕をふるわれた業績は、今も関係者の語り草となっています。

建設業から身を起こされた大城鎌吉さんは、常に沖縄の復興と発展に思いを馳せておりました。その行動力と不屈の精神は、自ら興おこした建設業、航空会社、百貨店等の企業活動を軌道に乗せる

とともに、沖縄の産業界へ体験を踏まえた幾多の提言をされ、難渋きわめた沖縄の戦後復興に「大城鎌吉あり」と、県内外の注目を浴びていたのです。

このような鎌吉さんの輝かしい活躍に、復帰前早くも勲三等瑞宝章の叙勲が授けられ、激動する当時の社会経済情勢の中で、県経済人ばかりでなく県民に大きな希望を与えたことは強く印象に残っています。その後も県功労賞はじめその功績を讃える賞が相次いでいたのは当然のことですが、わが那覇市でも鎌吉さんの功績を讃え、平成二年には那覇市政功労者として顕彰をし、永遠の記録にとどめおいたところです。沖縄の産業界にあつて押しも押されぬ第一人者であつた鎌吉さんに対する社会的評価は、このような数々の顕彰によつても明らかですが、「信用こそ財産」と口癖のように言われた鎌吉さんの人生哲学こそ、今日において最も評価されるべき哲学ではないかと思います。その人生哲学はまた、苦勞人鎌吉さんならではの名言であり、自らの口から出た言葉だからこそ、その重みが増し私たちの心を打つのであります。

「実れる稲穂ほど頭（こぶ）を垂れる」という諺もありますが、沖縄を背負つて活躍を続けられた大城鎌吉さんにして、常に誠実で謙虚さを失われることなくふるまい、後進を指導されたことは、わたくし自身も多くを教えられたような気が致します。

その業績と教えが後進の糧となり、また市民、県民の心に刻みこまれ、沖縄の発展に生かされることを確信しつつ、私の鎌吉さんへの追想と致します。

（那覇市長）

百パーセント信頼していた先輩

兼次 佐一

年配者の集まりなどで、沖繩の戦後の話や人物論になると、必ずといっていいほどに大城鎌吉先輩の話が出てくる。この場合、大城先輩について「誠実な実業家だったそうですね」という人は多いが、大城鎌吉先輩と直接交際があった人は少ない。

このように、あの有名な大城鎌吉先輩が伝え話になろうとしているとき、大扇会の方々によって『大城鎌吉追想集』発刊準備会がつくられ、実業家としての大城鎌吉、人間としての大城鎌吉を世に伝えるべく準備が進められていることを知り、私はわがことのように喜んでいる一人である。

大扇会の方々のこのご計画は、大城鎌吉先輩と直接おつき合いのあった人々にとっては勿論、たとえ直接のおつき合いはなくても、先輩を信頼し、尊敬してきた人々にとって、まことに嬉しい朗報である。私は、本書への原稿依頼を受けたことを光榮に思い、ここに、かつての先輩の姿を浮かべながら思い出の一端を書かせてもらう。

大城先輩と私が同席して語り合ったのは、昭和二十一年か二十二年であった。当時、私はうるま新報北部支局長の名で、全島自由通行の許可証を所持していた。同じく、うるま新報那覇支局長であった高良一氏と二人で用もないのに、住民立ち入り禁止区域をまわったり、夜間通行禁止区域をまわったりしていた。当時の那覇は、壺屋の極く一部と、開南一帯を除き、全地域が立ち入り禁止区域であったと思う。ところが高良一氏は、いかような手段で許可を得ていたかは知らないが牧志の道路筋に大きなテントを張って一人で住んでいた。軍払い下げの廃棄物資も集めていたから多分闇商売の準備ではなかったらうかと思う。

ある日のことだ。当時石川に本社があったうるま新報社（社長・島清）での打ち合せ会が終わったあと、高良氏に誘われ、彼が一人で住んでいた那覇市牧志のテント小屋で一夜を明かしたことがある。

その夜、この近くで大々的に瓦の製造業を営んでいた大城鎌吉先輩と出会うことができた。テントの下で一本のローソクをともし、先輩が持参してきた密造酒を飲みながら、敗戦の悲哀、敗戦民族の将来、そしてまた県民の心構えなどについて三人で深夜まで語り合った。がこれが先輩と私との交際の始まりであった。

その後、昭和二十三年（一九四八年）に軍政府指令第二十六号による「市町村制」が公布され、戦後初の市町村長並びに市町村会議員の選挙が行なわれた。このとき大城先輩は周田から勧めら

れて那覇市議会議員選挙に立候補して当選し、私も本部町長選挙で本部町長に当選したため、その後は語り合う機会も少なくなった。しかし、それでも上覇の際には立ち寄り、仲原理髪店の板の間で基盤を囲みながら、各々の立場から復興の在り方について意見を交わし合っていた。

大城鎌吉先輩と私は昭和十年ごろから面識はあったが、当時、先輩はすでに一流の実業家であり、私は実業界から毛嫌いされていた日刊沖縄新聞社（社長・小田栄）に籍をおいていたので直接の交際はあり得なかった。こういう間柄でありながら、戦後はただ一夜の交わりから親しくなり、選挙のときには別々の道を歩きながらも二人の間には何等の変わりもなく、嬉しいときには喜び合い、悲しいときにはお互いに慰めあってきた。

以上は大城先輩と私のおつき合いの一端であるが、先輩と私は年齢も丁度一回り違い、先輩は戦前戦後を通じて沖縄の実業界で一、二を争う有名人であり、それに比べ私は戦前戦後を通じて実業界から後向きにされていたにもかかわらず、この二人が、どうしてこのように親しくなったかについては自分でもよく分からない。

終戦直後、テント小屋で、二人が同じく貧しい時代に貧しい家庭に生まれ、幼年期、少年期に苦痛を味わい、小学校さえ満足に卒業できなかったことを語り合い、実社会では学歴よりも学力、学力よりも努力、理想論よりも実行だということまで一致したが、これが二人を結んだ絆ではなかったかとも思う。

それはともかくとして、私がこれまで交際のあった財界人の中で、無条件に百パーセント信頼できる人は大城鎌吉先輩だけであった。

一九五四年から五六年まで、私が琉球政府立法院・経済工務委員長のところ、大城先輩は沖縄建設業協会の会長であられたが、私は党派を越えて大城先輩の指導を受けた。当時、終戦から十年が過ぎていたにもかかわらず、沖縄では何等基礎的な復興計画のめどもつかない時代に先輩はすでに各方面に事業を広げ、その先端で範を示しておられた。これはすべて、先輩の真正直な人間性と、論よりも実行という信念の然らしめるものであった。

（元那覇市長）



本部の福木並木

人材養成へ物心のご援助

高良 鉄夫

建設会社大城組創設者大城鎌吉会長が、この世を去られて早や三年を迎える。顧みると数々の思い出が走馬燈のように脳裏にきらめき、限らない慕わしさと懐かしさがよみがえ甦よみがえってくる。

鎌吉会長と私の出合いは私が琉球大学農家政工学部部長時代である。国頭村御出身の大事業家であることは聴き知っていたが、事業家と学者という旧態依然の壁に面談の機会がなかった。しかしある会合でおたがいにご自己紹介におよんだが、そのおりすでに心の中は相通ずるものがあり、十年來の知友のような暖かい感觸を受けたのである。その後は肝胆相照らしているうちに、鎌吉会長のひととなりや人情深い誠実な企業家としての御人格が、私の胸に深く残るものがあった。単に国頭山原御出身の事業家先輩というより、沖繩が産んだ偉大なる事業家であることを銘記したのである。

私が琉球大学学長に就任後も各種集会において、誰からともなく我先に「鎌吉社長」「高良学長」と近づき、よもやま話に談笑することを常としたが、交流を重ねる毎に親密さが増し、一段と偉

大な人士であることを知得しつつ尊敬と信頼の念を深くしたのである。

鎌吉会長の人を引き寄せる魅力は、謹厳さと誠実性、そして抱容力にあったと考えられる。多くの各界知名士、あるいは社員部下から尊敬された由縁である。

鎌吉会長は、沖縄の高等教育に深い理念を持っておられ、私との会談中にも、沖縄の人材育成、教育研究に関心を示しておられた。

私は琉大在職中に研究教材の分野で大城鎌吉会長にお世話になった。ここに事例を述べて感謝の意を表したい。

私が琉大農家政工学部長時代は、郷土復興、教育再興で戦後立ち直りの時期であり、予算も乏しく、教材不足をかこっていた。当時、琉大所有の乗用車は、一、二台だったと記憶している。そのような折、大城社長がドイツ製の高級乗用車が故障で部品が得られないまま、倉庫に仕舞ってあるが、琉大農家政工学部で部品をそろえ、修理して役立ててはとのことであった。私は、その貴重な有難い申し出に感謝し、後に直接、学部の機械工学科の研究材並びに学生の実習教材用に無償で譲渡下さるよう申し入れた。当時の琉大予算ではとても購入できる額ではなかったからである。鎌吉会長は快く受けて下さり、無償で寄贈されたのである。機械工学科では、関係教官一同感激、感謝の念をもって、学生の教材、研究に役立てつつ部品を製作、苦心の成果が実り、ついに寄贈のドイツ製外車は走れるようになった。主任の真喜志康二教授（現名誉教授）は、満

面微笑を浮かべながら感謝感激のほか言いようがないと語った。

大城社長に前述の状況と感謝の報告を申しあげたところ、社長は機械工学科教官の熱意と技術を称賛されたのである。

また戦後の就職難時代、学部卒業生採用について御伝えすると、高良学部長が推せんする卒業生なら評価できる人物であるから、面接だけで採用できるとして、本社及び関連会社に採用された。

会長の私に対する信頼と友情に重責を感じ、健康、人物、才能、技術など評価できる卒業生を選考し就職させたのも、つい昨今のような感じだが、三十数年の歳月が経ち、今は亡き大城鎌吉会長と私の忘れ得ぬ物語りとなってしまった。沖繩の教育、人材養成に深い関心、理念を持っておられたことを明記し、沖繩実業界の重鎮・大城鎌吉氏の御功績を偲ぶ一人である。

大城鎌吉会長が入院されたとの情報に接し入院先の赤十字病院を訪ねたが、面会謝絶で御顔に接する事はできなかった。全快を祈りつつ多忙を過ごしているうちに、私は突然脳内出血で卒倒し病床の身となり、鎌吉会長と面談できないままに、この世の別れとなったことは、返す返すも残念なことである。御葬儀に参列し御霊前にまみえ、御在生中、大学教育にも関心を持たれ、物心両面の御援助を頂いたことに感謝の意を表し、御功績を讃え申し上げた。

戦後沖繩の復興に多大の功績を残された大城組創設者大城鎌吉会長の御名声は県民の心に深く



琉大へ贈ったベンツ

残ることであろう。今はただ御冥福を祈るほかにない。
十分に意を尽し得ないまま稿を終る。

(琉球大学名誉教授・元琉球大学長)

みんなのおやし

砂川恵勝

戦後沖縄の産業復興について語る場合、偉大な先覚者の名を忘れてはならないでしょう。すなわち、今は故人になられた國場幸太郎氏、具志堅宗精氏、大城鎌吉氏の三氏と、今尚お元気で活躍の宮城仁四郎氏の各氏で、まさに産業界の四天王と呼ぶにふさわしい優れた功績をのこされた方々です。そして、それぞれに独特の個性を持ち、夢を持った方々で、大衆から愛され、慕われたスケールの大きいリーダーだったのです。

私が大城鎌吉先生と深い関係をとり結ぶきっかけは、一九六八年十二月に発足した屋良琉球政府に通産局長として赴任したことに始まります。当時、いろいろな事情で止むなくの政府入りだっただけに、おびただしい祝電にも別に感動もおぼえなかったものでした。そんな時、一本の電話をいただきました。大城先生からでした。「・・・一番大事なことは正直です・・・肩の力をぬいて、自然体でやることです・・・応援していますので頑張ってください・・・」というものでした。これは、タクシー汚職の後にできた屋良政府だっただけに、清潔さや正直さが求められていたこと、

また、初めて住民から選ばれた革新政府だったので政府内にかんりの気負いがあつたこと等に対する、大城先生の率直な心あたたまる御助言だつたと思います。それにしても、初めての電話であるにもかかわらず何のてらいもなく真情を吐露されているのが分かりました。私はびつくりすると同時に、その人間性に心をうたれました。そして、役人生活の三カ年は言うに及ばず、その後これが私の生き方の重要な基本になっているのです。

このようにして始められたおつき合いは、その後ずっと続きます。もちろんそれは、琉球政府をやめた後もです。政府をやめたたん、ばったりとつき合いの途絶えることが多いなか、大城さんはいろいろな局面で声をかけて下さいました。私と考え方の波長が合うかもしれないというぬぼれてもみましたが、そうではなく、包容力の大きい大城さんならでのことであつたと思わずにはいられません。ご厚意まことに有難く、その義理堅さにはまったく敬服いたしました。しかもそのおつき合いは、私にとつても有意義なものでした。ご承知のように、当時の琉球政府通産局は、守備範囲が非常に広く、本来の通商産業行政の外に、運輸、金融、郵政の分野をも含む大きな局でした。日本政府でいえば、通産省、運輸省、大蔵省（銀行局）、郵政省が一つになつた様なものです。総合経済局と呼ぶ人もおれば、雑多局と呼ぶ人もいました。したがって、問題も多く、その処理に頭を痛めねばなりませんでした。特に本土復帰を間近に控え、解決を迫られる問題の何と多かつたことか。この様な時に、いつでも適切なアドバイスと激励をして下さつたの

が大城さんでした。これは、当時の難局を乗り切るのに大きな力になりました。ほんとうに助かりました。

でも、ここで強調しておかなければならないことがあります。すでに述べたように、通産局は広い分野をカバーする行政機関ですが、注目すべきもう一つの側面は、それが多くの許認可権をもっていた事です。事実、タクシー汚職はこの局で起こったのであり、この職員はそのモラルを試されていたことになります。ところで、大城系企業にも許認可を要する企業がかなりあったのは事実です。この点については、かりそめにも誤解を招かないよう、細心の注意を怠りませんでした。大城さんの方がむしろ気を遣っておられて、ついぞ一度もご自分の企業の話はしませんでした。話題はいつもマクロの話ばかりで、「沖縄の経済はどこに問題があるのか」、「その望ましい未来像は」など、きわめて次元の高い話がほとんどでした。でも時にはあの謹厳なお顔で冗談をいうのを忘れませんでした。とにかく安心して、しかも楽しくおつき合いの出来る方でした。そうしたことが長くおつき合いできた要因ではなかったかと思われまます。

しかし、ここで大城さんのもう一つの顔について語らねばなりません。私が琉球政府にいた頃は、復帰前夜だっただけに、いろいろな分野で本土側と意見交換する機会が多くありました。経済界では「日琉経済懇話会」が出来、双方の経済人で、復帰後の沖縄経済について熱っぽい議論が行なわれたものでした。ここで大城さんの発言は少しの遠慮もなく堂々たるものでした。それ

が私情をはさまないものだけに説得力があり、本土側もただうなずくばかりでした。「この人はほんとうに沖繩が好きなんだなあ」と思ったものでした。こういう強い面も持っていたのです。

「沖繩のためなら何おこるべき」という気概が感じられました。

慈父のような暖かさと人を大きく包むスケールの大きさ。そんな大城鎌吉さんが大好きでした。ほんとに好きでした。鎌吉さんは大城家にとって大事なお父さん、やさしいおじいさんだったに違いありません。でも私には「みんなのおやじ」というにふさわしい「愛された鎌吉さん」だったという感じがします。

長い間ほんとうにご苦労さんでした。どうぞゆっくりお休みなさい。心をこめて「さようなら」を申します。

(琉大名誉教授)

ダンスに映えた枯淡と誠実

亀川正東

いつの頃から大城さんを知るようになり、遠くからおしたい申し上げたかはさだかではない。なにしろ、私は大学の人間で、大城さんは経済界の大物、直接、身近に交際の間はなかった。それに年令の差もまた大きかった。

たしか、最初の出会いは、終戦後間もない廢墟の那覇で、今の料亭那覇は沖映の近くにあったころ、ある晩その料亭で初めてお会いしたのは・・・と記憶している。広い二階の座敷に沖繩の経済界の大物たちが七、八名そろって宴会をやっていた。大城さんを始め、高良一、具志頭得助、竹内和三郎氏らの面々で、いまでもはつきりその事だけは記憶にのこっており、その宴会の場に呼ばれて御挨拶をした。

又、大城さんの今は亡き長男で弁護士だった毅さんは、私と同じ早稲田大学の同窓で、おまけにアメリカ留学も一緒だった。そうしたあれやこれやで間接的に大城会長をおしたい申し上げたのである。

生前は大変、几帳面な折り目正しい方で毎年のように年賀状もいただき、また、私の出版祝賀会などにもご出席なされ、御欠席の時は代わって秘書の方をよこされた。情に厚く、正直で明治型の誠実な方であった。

事業も多方面にわたって手広く経営なされ、その多くが堅実で順調に成功していたようだが、畑違いの私にはさんぜんと輝くだけで詳しくは分からない。功なり名をとげられた大城さんは戦前、戦中、戦後を生きぬき、長命を全うされ大往生をとげられた。

ところで、人間は食べて体を動かすことが健康の基本である。健康維持のためには自分の体に合った最もよい適当な運動を持続しなければならぬ。なんでもそうだが一夜漬けではダメで、あの人は毎朝、規則的に散歩をしていたので長生きをした。また、あの人はゴルフをつづけていたので八十歳迄生きて元気だったと、いろいろな話をわれわれは聞く。

当り前の事だが、運動をすれば体内の血液の流れが良くなり、もし、糖尿病の人なら糖の代謝が改善され、それが改善に通ずるといわれる。

そのため、ゴルフもゲートボールも、また、歩くことやラジオ体操やダンスだって健康維持に最高だ。

生前、大城さんのエピソードや話題として新聞やグラフなどでダンスをやっているフォートをたびたび拝見したことがある。年をとられても元気でダンスに興じられたようで、背すじをピン

と伸ばしている姿勢が妙につよく印象に残っている。

おそらく、そんな方は、財界はもちろん政界、教育界でも大城さんお一人ではなかったかと思う。

ふざけたヤングのダンスと違い、大城さんの場合、なんともいえない枯淡な感じがした。老いは一般に醜いのに大城さんはすがすがしい風味の人だった。

しかし、生あるものは滅し、形あるものは壊れ、歴史は永遠につづくのに人の命には限りがある。

生老病死は生ある万象にとって早晩必ず訪れる鉄則であり、貧乏人にも大金持ちにも死は平等である。

たった一度しかない命なら美しく生きたいと願うのは人情であろう。

人のため、世のために尽くすということは、自分の救いをイミシ、また、自分の心を大切にすることは、他人の心をも大切にすることにつながる。

人と人の出会いは不思議なもので、生まれた所も、生まれた年も違うのに偶然のことから男女がお互いを知り夫婦となる。やがて生まれた子どもはモノ心ついてパパ、ママと呼ぶ。

夫婦、親と子、師と生徒、友と友、先輩と後輩の出会いは一期一会の所産であって、なんとも不思議な摂理であろう。あれやこれやを想うとき、私が大城さんと出会い、陰に陽に人生の生き



健康のためゴルフを楽しむ

方を学ばせていただいたのも、深い因縁の所産であろうか。

井戸の水を飲むときは、その井戸を掘った人の顔を忘れるな・・・という。琉映本館やデパート三越の偉容を見上げるとき今は亡き大城さんのあの温顔がちらつくのである。(琉球大学名誉教授・

日本ペンクラブ会員)

ただよう翁おきなの風格

吉久川 宏

大城鎌吉氏と親しく話し合う機会を得たのは、氏の晩年の頃からであろうか。

それ以前、最初にお会いしたのは、復帰直前、大越デパートが三越と提携をされるということ
で、東京三越重役の漸長良直氏を案内されて、当時の琉球政府を訪ねてこられたときであった。

勿論それ以前に沖繩実業界の有力者としてのお名前はよくお伺いはしていたのであるが、話し合
う機会が残念ならなかった。

印象は風貌に似合わない、やさしい声の持主であられたということであった。やさしさという
と女性的なものを連想させるのであるが、氏のやさしさは当然そうしたものではない。百戦錬磨
の士が揃う実業界の雄であられた氏であるからには、性格の基礎に闘志で固められた或るものが
あったに違いない。氏の口調にやさしい響きがあったのはどうしたことだろうか、とふと考えた
こともあった。私なりの納得はこういうものであった。つまり氏は年齢を重ねることによって或
る境地に達しられていたのではないかと。

晩年の氏には、能に出てくる翁おきなの風格があった。能には、シテの場合、或いはワキの場合でも、老人が配されるときが多い。

それらの老人には、言うに言われぬ独特の風格が感じられる。それは主役であろうと、傍観者であろうと、人間としての経験を深く重ね、この世の乱れ、騒ぎを鎮め、平衡させようとする達観の境地のもたらす風格とでもいおうか。

氏の青年時代、壮年時代は、大正、昭和の時代であり、戦前、戦中、戦後の時代であった。各々の時代において沖繩が置かれた環境は、厳しく、激しく、苦難に充ちたものであった。そのなかでもっとも波乱に富み、起伏の激しい実業界に在って、有力な担い手として最終的に沖繩を代表する企業を作り上げるに至ったことには筆舌に尽くし難い経緯があったと想像される。

競争が旨とされる実業界において、然もこの狭い沖繩において凄まじい程の葛藤かつとうがあったことではあろう。氏はそれらを想起してどうするという、ウシロ向きの姿勢よりは、過去の想いを鎮め、衆生人間の幸せを願わんとする、マエ向きの姿勢に徹しようと志されたことが、あのやさしさとなって現われたのではなからうか。

氏には業界の先頭に立って他をリードするというより、多のなかにあって衆をしつかり支えようとする控えめな姿勢が感じられた。そうした控えめな姿勢が、氏をしてイブシ銀にも似た輝きを放し出す背景となったことだろう。氏の実行パターンは、飽くまでも実務的なものに徹してい

た。未来に向かつての壮大なビジョンよりは、当面する実務的な課題を着実にこなしていくのだという姿勢が随所に伺えた。未来ビジョンは若い人が作ってくれ、私どもはそれを実現することに可能な限りの支持を差し出しましょうとするのが氏の意向であった。

氏にどのような趣味があったのかは、ついお聞きすることができなかつた。然し次のことは耳に残っている。矮少性^{わいしょうせい}のマンガウを植栽し、やがて着実結果するだろうと喜ばしげに語つた。書画骨董の類でなく、盆栽でもないというところが氏らしいなあと想つたものである。

或る時、早朝の日課の模様を一部目にした。体操に始まり前記のマンガウに目をやり、朝のテレビ番組を丹念に見る。早朝のニュース番組は、政治・経済・国際状況のホットな情報源であり、その日の活動に備えられていたようである。

次におもむろに仏壇の前に正座される。お聞きすると、みまかれた奥様に祈りを捧げるとのことであった。祈りを捧げる氏の後姿にやさしさに溢れ、悟りの境地に至られた翁の風格を印象づけられたのであった。

(沖縄国際大学教授)



たわわに実をつけたマンゴー



マンゴ賞味会で女性陣にかこまれて

年齢をこえたおつきあい

平田忠義

親愛し、そして敬愛してやまない沖縄経済界の重鎮、大城鎌吉さんが他界されて、はや三年近く。仕事の上でも、また個人的にも親身なご指導と、お付き合いをいただいた鎌吉さんの思い出は、どのように綴^{つづ}っても足りることがないように思う。しかし、このたび鎌吉さんの追想集を刊行される旨ご連絡をいただいたので、初めて出会った時分のことなどを思い出し、拙文ながら記してみたい。

私が東京から沖縄に引き揚げてきたのは終戦直後のことだった。見るも無残に破壊しつくされた故郷の街並みに愕然としたのを覚えている。台湾台南州より引き揚げてきた仲田睦男君ともども、何か沖縄のためにできることはと思い巡らす日々だった。しかし、我々とてやはり戦争に打ち据えられ、すべてを失った身であり、すぐにはどうすることもできなかった。幸い、当時泡瀬工作隊の隊長をされていた仲地喜曾さんの知己を得ることができたので、私たちは取り敢えずそこに身を置き、米軍の兵舎を建てる仕事などをして糊口^{ここう}をしのぐこととなった。

そこで、私は大城鎌吉さんのご長男・毅君と懇意になった。そしてそれがきっかけで、父君鎌吉さんとも知り合うことができたのである。毅君は実直、素直な人柄で、私の冗談なども真に受けてのことか「工作隊には政府の幹部より偉い人がいる」などと私のことを鎌吉さんに話していたようで、鎌吉さんとは今思い出しても冷汗ものの初対面であった。しかし鎌吉さんもまた、毅君同様に誠実で人情の厚い人柄であったので、私のような者にも最初から別け隔てなく旧い友人のように接してくださった。全く、私が後に事業家として身を興していったのも、ひとえに大城鎌吉さん並びにご長男・毅君と知り合えたおかげといえる。

瓦や瓶、レンガの製造業を興したのは終戦より二年後の、昭和二十二年五月のことだった。豊見城村字長堂において仲地喜會さんが会長、仲田睦男君が専務、そして不肖私が社長となって沖繩興業(株)を設立した。戦後の復興を達成するにはまず人々の暮らす家を建てることだと考えてのことであった。その際、大城鎌吉さんはすでに御自ら瓦製造業を営んでおられたにもかかわらず、鷹揚にも物心両面で我々に多大な援助、ご指導をしてくださった。特に占領地域統治救済のために米軍より援助されるガリオア資金の借入れがすなりとできたのは、大城鎌吉さんのお力添えが大きくものを言ったことだった。そのおかげで、我々は本土から瓦製造機材や運送トラックなどを購入できたのである。

しかし、私が真に大城鎌吉さんの人間の大きさを目のあたりにする出来事が起きたのはその後

のことだった。瓦製造業者が急増、生産過剰となり、各工場の経営状態が悪化した時のことだ。鎌吉さんは最も大きな工場を持っている自らが廃業することによって瓦製造業者の共倒れを避けようと、あつさりとご自分の工場を閉鎖されたのである。その決断力と鮮やかな引き際に感服したのを今でも覚えている。氏はまさしく、沖縄の発展を第一義に考えて常に行動されていたのである。

それより後の氏の偉業についてはここで私が申すまでもないことであろう。事業を通して、また個人的にも、大城鎌吉さんには親しくお付き合いいただいた。氏は若輩の私の意見にも、いつも注意深く耳を傾けてくれた。仕事のことから人生のことまで、あらゆることをお話しした。戦後の第一歩から氏とともに歩めたのはまことに光栄で、また幸運なことであったが、果たして私の方が氏の力になれたことがどれだけあったかと思いつている。私事ながら、大城祐章氏と三人で本土へ事業視察に出掛けた折りに、東京の街を案内して歩いたことなどが今では懐かしい思い出である。先輩後輩としてではなく、友人としてこだわりなく接していただいた氏のことを、しみじみと思い出している。

（元琉球海運社長）

※平田氏はこの文章寄稿後急逝されました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。



沖縄経済懇談会にて 右が平田氏

見事な出処進退に感服

仲田陸男

私の最も尊敬する経済界の先輩、大城鎌吉さんが他界されてはや二年余になりました。先日、『大城鎌吉追想集』刊行準備会から、追想集を作成するにつき一筆協力願いたいとのことなので、思いつくまま記してみたい。

近年、仕事上でのつながりは余りなかったが、中琉文化経済協会の方治先生がご健在の頃は、毎年四月五日の蒋介石総統の追悼式表敬訪問団として、大城鎌吉さん、国場幸太郎さん、宮城仁四郎さん、竹内和二郎さん等と一緒させていただいた。台湾では我々は国賓待遇を受けたが、それだけに諸行事や歓迎会等で日程はぎっしりつまっていた。

大城鎌吉さんは、ご高齢にもかかわらずゴルフで鍛えた健脚、そして歓迎晩餐会における健啖ぶりに感嘆した。しかし、大城、国場、竹内さんのご三方とも相次いで幽明の境を越えられ、寂しい思いのする今日この頃である。

思いおこせば、私が事業家として、今日あるのは大城鎌吉さんのお陰と言っても過言ではあり

ません。昭和二十年の終戦と同時に、私は台湾台南州の引揚げ責任者として、引き揚げ業務に従事して、翌二十一年十一月任務を終え、最後の引き揚げ者として久場崎に上陸し、一面焼け野が原となった郷土沖繩に愕然^{がくぜん}とした。戦争ですべてを破壊された沖繩では、当時、生活のてだてがなく、とりあえず妻子をつれて、郷里の伊是名にたどりついた。その頃、先輩の平田忠義さんも本土から引き揚げて来られたので、二人して何か適当な仕事はないものか思案していた。二人ともまだ若かったので、焦土と化した沖繩の復興に役立ちたい；そのために自給産業を興したいという思いにかられていた。

その時、泡瀬の工作隊の隊長をされていた仲地喜曾さんの知己を得て、とりあえず泡瀬工作隊に身をおいた。その後、戦後の復興には瓦やレンガ製造が一番いいのではないかということ、昭和二十二年五月、豊見城村字長堂で仲地会長、平田社長、そして私が専務となり沖繩興業（株）を設立した。

それより以前に大城鎌吉さんは、既^すに瓦製造業を始めておられ、大城さんから物心両面のご指導をいただいた。特にガリオア資金の借入れでは、大城さんの助言がきいてスムーズにいき、本土から瓦製造機や輸送用トラックを導入できた。ところが、大城鎌吉さんの出所進退の見事さに感服した。どういふことかと言うと、瓦やレンガが儲^{もち}かるということがわかると、雨後のタケノコのようにあちらこちらに瓦製造業者が急増し、ある時期、工場数が八十ちかくなつたため、

逆に生産過剰となり、各工場とも経営が苦しくなった。そんな中で、大城鎌吉さんの沖繩製瓦が一番大きな工場だったにもかかわらず、自分の工場を閉鎖すれば共倒れはさけられるだろうということで、あっさり廃業を決意された。

戦前から沖繩の基幹産業であった糖業を主とする農業の復興も、この頃から社会的気運が盛り上がった。農業復興の基盤づくりに肥料と農機具は欠かせぬものとの認識により、時の平良知事、當間那霸市長、池畑琉銀総裁、護得久朝章、大城鎌吉、国場幸太郎氏ほか外官界、経済界のそろうそろう錚々たる方々が設立発起人となり、琉球肥料を誕生させた。創業から四～五年は生産計画の挫折や資金繰り等で危機的状况にあつたが、大城会長―私（社長）―森根専務体制で、昼夜をわかつた悲壮な決意で努力したことと、折から主力製品であるハイホスカ配合肥料の需要が日増に増大し、前途に曙光がさしてきた。

また、肥料を安定的に生産するために農業関連事業を興す必要があるとの思いで、製糖工場の設立を計画した。当時、中南部には既に琉球製糖が稼動しており、第一製糖、農連工場が設立の準備をしていたので、北部に大型分蜜糖工場を設立した。これが現在の北部製糖である。しかし、北部製糖が誕生するまでいろいろと紆余曲折があつた。すなわち、北部製糖と国頭糖業がそれぞれ設立準備を進めていたのでその一本化に難渋したが、その時も、調停委員をされていた大城鎌吉さんに積極的に北部製糖を支持していただき、最終的に琉球政府から設立の認可がおりた。そ

れ以来、西表製糖を含め、糖業の振興発展にも大城鎌吉さんに大変お世話になった。

晩年には、いろいろな会合でお会いし、よく昔の苦勞話をしたが、大城鎌吉さんの記憶力の確かさに舌をまいた。私が忘れかけていたことや、細かい数字までよく覚えておられた。とまれ、はじめに述べた通り、私はこれまで多くの事業を興してきたが、困難に直面した時に大城鎌吉さんから適切なアドバイスをいただき、今でも感謝の念で一杯である。

(北部製糖株式会社 会長)



さとうきび畑

積み上げた社会修養

木川 久 啓

沖縄の代表的実業家といえば故国場幸太郎、同じく大城鎌吉、具志堅宗精氏に現存の宮城仁四郎氏をあげたい。那覇出身の具志堅氏を除いては三氏とも北部国頭郡出身で、国場氏と大城氏は尋常小学校卒で直ちに土建業に入り、土建業のみでなく数多くの各種会社を経営し、沖縄経済に多大の功績をあげた。

日本は学歴を重んずる国である。沖縄は特にそのようである。戦前、子供を中学、大学に入れるため父親は夜、人力車をひき、母親は市場で物売りをしたりしたものだという。

戦後の今日でもそのような考えはあるかもしれないが、学歴の話がでるたびに私は大城鎌吉、国場幸太郎両氏とやはり小学校卒で文教局長、沖縄大学長だった真栄田義見さんらの話しをするのである。しかし、学歴も大切であるがそれに頼ってはいけない。問題は一生の勝負である。学歴はなくとも努力、社会修業の積みあがりで成功した人も多い。

大城さんは明治三十年大宜味村に生まれ、戦後大城組を基盤に琉球映画貿易、那覇港湾運送、

国際物産、那覇空港ターミナル、沖縄オーシャン、大豊不動産、沖縄プリヂストーンタイヤ、沖縄繊維、大宝証券、沖縄三越と数多くの会社社長となり大城鎌吉グループ大扇会会長となった。立志伝中の人といえよう。歳老いては後継者として専務の人々に社長職をゆずり、会長になっていたが八十歳を過ぎても時間を定めて毎日会社廻りをしていたとのことだ。几帳面な人である。

また、沖縄の狭い地域で多方面に仕事をすると誰かと仕事面でかち合う場合が多い。例えば土建業、港湾荷役、酒類販売、映画関係などでは国場社長と競争相手になるようである。従って経済人間に時にふれ、感情問題もあったと思うが、大城さんはたえず譲歩というか、人間問題にはふれないようにつとめているようであった。

短くかった髪、高齡だが色つやのよい顔、きちんとした服装でいつも静かな笑みを浮かべていたが、その中にながい年月鍛えあげた強い魂がみられた。そして常に若さをと美しい娘らを相手に社交ダンスをしたり、健康のためとゴルフをやり、百歳までは大丈夫だろうと言われていたが、急逝され、沖縄のために残念なことであった。

また、大城さんについてひとつの話題がある。旅行や起工式などには必ず大安吉日を選び、その日以外は飛行機などにも乗らなかったとのこと、信心深いということであろう。

前記の職歴の外に戦前に沖縄土木建築工業社長、戦後は那覇市復興建設隊長、那覇市会議員など歴任している。謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りする。(元琉球商工会議所専務理事)

諮詢会からの思い出

山女 里 有 三

大城先輩と私の初めて出会いは、いつ頃だったかは、はっきり覚えていない。多分戦前からの付き合いだったような気がする。先輩の出身地は私の隣部落の謝名城テンナメの一名代と聞いている。

何しろ私との年齢差は二十歳もあるし、当時の山原の田舎では年齢差が絶対的な価値をもっていた。そういう意味で郷里に居たころには先輩の聲咳けいがいに接する機会はなかった。というよりも、なにしろ大城先輩は私の生まれた頃にはすでに那覇に出ておられたのである。

漸よやく、先輩とのおつき合いは戦後のことになる。その始まりは安谷屋さんやすや（当時の沖縄諮詢しじょ会商工部長）から託された手紙の受け渡しに始まる。当時私は南部戦でようやくにして生き延びて辿たどりついたばかりであったが大城先輩を通じて商工部長からの呼び出しであった。大城先輩はいち早く石川市へ出ておられ（当時沖縄の中心地は諮詢会のあった石川市であった）大城先輩が帰郷の折りにこの手紙を託されていたのであった。

私わががぐずっていたので二度も大城先輩に託されていたし、その都度、大城先輩はわざわざ現在

の国道58号から一軒も奥まった私の家へ手紙を届けてくださったのだ。

その後、私は安谷屋さんの下で石川市にあった諮詢会の商工部に勤めることになり、後々、大城先輩とお付き合いする機会が多々訪れる。何故ならば商工部の『工』の部分には大城先輩が目論んでおられた瓦工業が含まれていたからである。後になって知念政府（俗称そういわれていた）に移って商工部が分離して工業部が独立することになるが、いよいよ大城先輩との関係が密になることとなる。

戦後まず那覇は、陶器をつくる壺屋の開放が行なわれ、次は大城先輩の瓦工場敷地（現三越の敷地）の開放に取り組む訳だがこれは安谷屋部長の大手柄と言って良いと思う。当時は那覇市一帯は勿論、この牧志町も軍の囲いの中にあつたからである。

それから無から有を創り出すには色々工夫が要るもので、資金の問題で財政部との交渉では担保をどう取り扱うべきかという問題があつた。結局は工業部の保証書でという結論に達してこの問題はクリアしたのである。当時は未だ所有権が未確認の状況であつた。

当時、私は工業部の企画係の仕事をする立場にあつて工業部の保証書はこの係の担当で、たまたま大城組から三万円の保証願ひがあつた。勿論その他の諸々の工場からの保証願ひもあつた。当時の通貨はB円といって米軍の発券する軍票でその価値は日本円の三倍、即ちB円百円が日本円の三百円に相当する。

さて大城組の三万円保証は難なくクリアしたが一方、國場組からは三十万円の保証願いがあつて係の間ではむずかしい問題も持ち上がったのである。結局この件も何とか保証することになつたのである。

一方、大城組の方は、自己資金の用意も相当額あつたのではないかと思う。

さて、大城組の方では瓦工場建設も無事済ませて、次は瓦を焼く薪は山原の山奥から運ぶが、たまたま米軍から船のチャーターの話があり、大城先輩に話したら、これはよい話だとの返事があり、しかも船の借料は無償とのことと正に渡りに船という諺そのものであつた。兎角私達工業部は沖繩復興が一日も早からんことを精一杯努めていたような気がする。

それから最後の話になるが國頭のパイ工場について一言加えたい。

一九五〇年代後半は沖繩パイ産業のブーム時代であつた。大城先輩が地域の大先輩として、又、産業界の代表として國頭村の農民のためと思つて意欲を示したのは当然と思推される。隣村の大宜味村では宮城仁四郎氏が郷里の発展のためにとの自覚からすでに工場を手懸けておられた。

こうした状況の中で山地に恵まれた國頭村でパイ工場を建設することは時代の情勢が然らしめるものがあつた。

然し時は移り、時勢は変わり貿易の自由化の時代に入ってくると漸く各工場の併合が行なわ

れていくのである。その一環を担って大東工場との合併の話が進んでいった。

大城先輩の自伝の中で私のことが述べられているのは、そういった事情からである。

以上大城先輩とおつき合い、エピソードとして述べてきましたが、偉大なる大城先輩の結末を飾る記録の中に私の一筆を加えていただいたことにつき、有志の皆様^{みなさま}に感謝を申し上げて擱筆^{カキマ}とする。

(元琉球殖産専務)



パイナップル畑

信頼集めた人間的魅力

赤 嶺 保三郎

故大城鎌吉氏は私にとって、父親のような存在であった。いや、実の父親以上だったかもしれない。

故大城鎌吉氏を私は「オヤジ」と呼んでいた。以下、オヤジと書かせていただく。オヤジとの出会いは、実の伯父の家を建てている大正の末期の頃だった。オヤジがその建築に関わっており、出入りしていたので「あの人が大城鎌吉さんのだな」という認識はあった。そのうち、昭和二年、中学を卒業した私は「技術を身につけなさい」という身内のことばに従い、大城鎌吉氏のところへ住み込みで六年間の丁稚奉公に出された。

当時、オヤジの家は旭橋にあり、奥さんの清子さんはそば屋をしていた。大家さんは嶺井吉常さんという米屋であった。

大城組の仕事は叩き大工が主で旭橋からさほど遠くない辻近辺には貸家が多く、貸家の修理が主だった。私の仕事といえば、最初の一年は、家の中の雑用で水を遠くまで汲みにいたり、薪

を割ったり、子守をするのが日課であった。

旭橋の角にいたからおしめは海に洗いにいったりもした。オヤジの妹のウシさんがいたから彼女がそんなことは男がやらなくてもいいよ、といっってはかわってくれた。飲み水は小祿のウティンダの水を買って使っていた。その頃、こどもたちともよく遊んだ。

その頃、那覇は波上祭り、二十日正月、五月四日（ユッカヌヒー）に各地から人々が集まり、たいへんな賑わいを見せた。そうしたとき、そばは人気があつてよく売れたので、オヤジは、前の晩から手打ちでそばをうって奥さんと翌日の準備をした。祭りの日には、大城組の仕事を休んでもそばの方がだんぜん儲かった。

丁稚奉公に入ったとき、四人丁稚がいたが大城鎌吉オヤジを恐がつて最後は二人になった。久松組の大城松次郎氏がそれで、彼とはずっとつきあつてきた。親よりもオヤジとの生活が長いので本当の親のようにやつてきた。短気な気性のところもあつたが人情もある人であつた。人に使われるのは人間に入らないと、つまり、自分でよく考えて積極的にやることだと教えられ、また、人間の見方がたいへんためになった。

あるとき、仕事の最中に怪我をしてしまい、メインの仕事ができなくなった。するとオヤジは私に「お前はダメだから下において木材の番号のつけをしなさい」といわれ、あまりのくやしさと情けなさに涙して仕事をしたことがあつた。だいぶたつてからそのときのことを他の人に「あ

いつは泣きながらも仕事をちゃんとするやつだ。見込みがある、将来が楽しみだ」と褒めていたと聞かされた。本人の前では褒めないが他の人のところで褒める、そういう人であった。男の人情としてはオヤジほど最高の人はいない。また、オヤジの熟考し、話すという真似はしたいが、いまだにできない。

昭和四、五年ごろから家を建てる人が増えて、大城組も大きな仕事が入り落ち着いてきた。しかし、入札には入札保証金と、資材等を買うための元手のお金も必要だった。そんな時に大家さんである嶺井さんが「心配するな、鎌吉！」といっってはお金を貸してくれたり、保証人のようなことにもつきあってくれた。嶺井さんはいろんなことをオヤジに教えていたようだ。また、新里康正さんはお金持ちの人で、この方もオヤジに金銭面で助けてくれたように聞いた。工事のためには上里稲造さんに材料をただで提供してもらった。このように三方の先輩方から見込まれて助けてもらい、仕事が無事済んだときには、すべてお返ししたと思う。こうした援助があったのも大城鎌吉という人物の肉人的な魅力があったからであった。

オヤジはこうした陰の助けを忘れる事無く、自分をささえてくれた人たちに今後も信用されるように一生懸命やらなければならぬと常に考えていた。

あれほど仕事をたくさんやってきていろいろと問題をのちに残すようなことは私の知るかぎりなかった人である。

私のなかでとくに印象にのこっていることといえば、昭和六年の嵐山事件である。今帰仁村の嵐山に施設を建てるということで私にとって大城組での最後の仕事になったからでもある。県の意向もあり、大城は資材準備をはじめ、井戸も掘っていた。にもかかわらず、建築現場が水源地である山のうえにあつたので、「汚水がたんぽに流れるからダメだ」と地元の猛反対にあつた。

新城徳助さん、上地一史さんらが反対の陣頭指揮をとっていた。かなりもめたが結局、県の担当が異動になったことと地元の反対には勝てず、せつかく、資材やらいろいろ準備をしたのにもかかわらず建築は中止になった。大損害をこうむつたのは大城組である。オヤジは、まわりの人達が損害請求を県にしろ、という忠告を聞き入れず、請求しなかつた。済んでしまったことを取り戻すために労力を働かせるより、今後にもかかって新しいものを作り出すために気持ちも労力もかたむけたいと思っていたようである。何年か後に施設は別の土地に建設が決まり、大城組が工事をとりおこなつた。そして反対運動の陣頭指揮をとっていた方々とも親しくなつたようであつた。

私はそれから大城組をはなれ、砂糖の仲買いの商売をし、まあまあ儲かつた。

オヤジは、私にこんなことを言つたのをよく覚えていいる。「人間は努力して伸びてゆくのも大切だ。しかし、ひとりで伸びてゆけるものではない。多くの支えがあつてこそだ。私は多くの人に、この人には協力しようと思わせる人、多くの支えをもっている人こそ、本当の成功者だと思ふ。協力した人を踏み台にしてはもつてのほかである」。そのことは自らにも言い聞かせていた

に違いない。

私は二十二歳まで大城組にいて二年後の二十四歳で結婚した。結婚式の時の羽織袴は、オヤジの奥さんの清子さんが準備するからといって着物を仕立ててくれた。内弟子には入ったが大工にはならなかった私であったが、オヤジ夫婦の気持ちはいたくうれしかったものだ。

戦後、オヤジが那覇空港ターミナルをつくるときの株主になり、その後、空港ターミナルの社長に抜擢してくれたのである。また、私がお家をつくる時にもオヤジは、わざわざ足を運んで見に来てくれた。公私ともに私を思いやってくれた。

建築業という筋肉隆々としたワイルドな感じを想像しがちだが、オヤジは黒縁眼鏡をかけ、物静かで学者風であった。しかも、かなりの綺麗好きのハイカラであった。ホテルの部屋に入るとかならず靴下を自分で洗ってほしていたし、自宅でもそうしていたのではないかと思う。

また、白のスーツを着こなすのに、竹で編まれたものを手にして、白いスーツを着ていたのは驚き、本物のハイカラだと恐れ入った。

「家に帰って来てまた、出掛けるときは服を着替えなさい。靴下でも何でも着替えなさい。そうすることで心があらたまるから」。そんなことも教えてくれた。

私はオヤジに対しては親同様に最後までつきあったので、少しは恩返しにもなったのではないかと自分自身で思っている。七十年にわたる長い付き合いだった。実の両親は早く亡くなったの

で、本当にオヤジは実父以上だったとつくづく思う。

オヤジが入院してから、病院にしょっちゅう通った。一度、アイスクリームをお土産に買っていったらひとりでたいらげた。結構、アイスクリームが好きだったな。

名護親方ウチカの像を見るたび、オヤジを思い出す。それだけの人格者であった。

(元那覇空港ターミナル社長)



名護親方（程順則）

沖繩成田山創立の熱意

野村 健

(一) 大城鎌吉さんと沖繩成田山

大城鎌吉さんが沖繩成田山奉賛会長並びに責任役員として沖繩成田山の創立と運営に携わったのは一九七一年（昭和四十六年）から一九九二年（平成四年）逝去されるまでの二十年間であった。

「堂宇を建立するに勝る功德はない」と言われるが、大城さんの呼びかけならばと信仰を度外視して、財界からかねひでグループ会長・呉屋秀信氏、琉球石油(株)社長・佐辺良夫氏（故人）、沖タイム(株)会長・比嘉杉栄氏、沖繩松下し・E・C(株)会長・又吉康栄氏、光電気工事(株)社長・金城栄秀氏等、経済界トップクラスの実力者が理事に就任したことや、県内外から物心両面のご志納が寄せられたことでもわかるとおり沖繩成田山の創立は実に大城先生（以下大城会長、又は単に会長）の名声徳望によるものである。沖繩成田山福泉寺（以下福泉寺と略す）創立の主唱者で

ある沖縄タイムス元社長・上地一史氏（故人）が進んで副会長の任についたのも大城会長の人柄にひかれたからである。

（二）大城会長御志納集めに熱心

大城会長は福泉寺建立のため数千万円ごの御志納の外一九七三年（昭和四十八年）上地一史氏、小生・野村健を伴って東京・名古屋・大阪を歴訪し御志納集めに努力された。（経済不況で成果は二千万円）

（三）上地一史氏の事故死で工事ストップ

好事魔多しというが一九七四年（昭和四十九年）九月八日、副会長・上地一史氏が沖縄財界人（山形屋社長・當真嗣徳氏等十二人）と共にイタリアのイオニア海上で飛行機が墜落、事故死するという大惨事が起きて、地元沖縄は、あまりの驚愕あまうがくに騒然そうぜんとなり奉賛会のショックも深刻であった。案の定、航空機安全は勿論もちろん、諸々の安全祈願を本領とする成田山の寺への御志納は途絶え、百万円内外の大聖御志納予約も次々とキャンセルされ、折角棟上げまで済んだのに建立工事はストップ状態となった。

不動明王の加護靈験かごれいげんを信じていた大城会長は、複雑な気持ちを抑え理事会にはかり五千万円を

分担志納すると共に、各自担保を入れて銀行から一億円を借り受け、工事を続行し、三年の歳月と二億円余の費用をかけて一九七五年（昭和五十年）十一月二十三日、日出度く落慶式をあげた。式典に福泉寺建立の主唱者・上地一史氏の姿が見えなかったのは残念であった。しかし、つつがなく落慶式典にこぎつけ得たことは、大城会長の不動心と多くの善男善女のおかげであったが、一面忘れてならないことは、大城会長の心底にあった靈魂を信ずる強い信仰心が建立貫徹の支えになっていたことである。

（四）信心深かった大城会長

戦死した次男・幸雄、三男・安夫、四男・善幸のおもかけ 弟を胸中深く秘めていた大城鎌吉会長は、折ある毎に、乃木大将が二〇三高地の激戦露営中、戦死した息子・勝典中尉の霊に語りかける逸話を感慨深く語っておられたが、これは大城会長自身の信仰心を投影したものであったと思う。

その昔、非僧非俗と自らを懺悔？した親鸞の風貌にも似て、身は俗界にありながらお経は読まざとも朝夕の不動真言や般若心経は欠かさず、規則正しい日常生活を営みつつ、福泉寺を創立した大城会長は正に非僧非僧の境涯ではあるまいか、金と色と権力に血道をあげ、世俗的幸福追求にあけくれている職業坊主やありもしない超能力とやらをひけらかす祈祷坊主に比べれば大城会長は遙かに宗教的で菩薩であったのだ。

(五) 大城会長の、最後までのがかり

ついでに福泉寺の発展、沖繩の発展の為に大城会長が気にかけておられたことを若干、記しておきたい。

一、責任役員を現在の三名から八名以内に増員する。

* 寺の公正、民主化の上から必要である。千葉成田山から三名までにせよとの通達はあったが法的に疑義があり納得がゆかない。

二、監査役を是非設置したい。

* 経理は公明正大にせねばならぬ。

三、住職の世襲制を禁止する。

* 沖繩の為、沖繩の浄財で創立した寺である、教義、宣揚、儀式、行事の施行、信徒の育成は勿論大事ではあるが、創立者の意図を尊重すべきである。勿論成田山福泉寺を開山された金子妙福師の功績大いに多とすべきである。

四、福泉寺規則を変更する

* 現在の福泉寺の規則は久留米明王寺の規則を踏襲したものである。責任役員は福泉寺の規則を地域に根ざした規則に変更すべきである。

五、住職の兼任制を早急に廃止する。

*専任の住職をおいて、開山された金子妙福大僧正の偉業をつぐ。兼任は普通経営困難寺に多いと思われるが、沖繩成田山はすでに金子妙福師夫妻の力で日本でも屈指の優秀寺となっているのに、未だに兼任制は沖繩の恥辱である。明王寺には金子寺務長以下、寺務長適格の人材が多い。妙福師の専任は如何に？

右の諸条件は現在福泉寺ではどうなっているか知らない。手がけた事業は凡て軌道に乗り、満足した会長は福泉寺の発展にも執念を燃やしていた。たしか昭和六十二年、福泉寺創立十周年事業に来島された千葉成田山大本山の鶴見照碩貫首と福泉寺発展策について忌憚ない意見をかわし再会を約束して別れたが遂にその機会を得なかった。奉賛会理事会でも度々右の案件を強調したが遂に実現を見ず会長は他界された。残念でたまらない。しかし、寛容、和合の仏教精神を体得しておられた会長は、今や極楽浄土で「功成り名を遂げて身を退くは天の道」―老子―の境涯を楽しんでおられると思う。

(六) 小事を侮らない大城会長

話は前後するが七十一年(昭和四十六年)の末頃、すべり出した奉賛会事務局は、大城会長から小額の事務費を立て替えて貰ったことがある。事は、大城会長直属の奉賛会事務局なので、わるびれず怪い気持ちで立て替えをお願いした。しかし財布から如何にも惜しそうに慎重に小額の

お金を出すのを見てユーモアを感じたが小生はすぐハツとした。替^たえはよいか知らぬが、小事を悔らず大事をおそれない大城会長の偉大さを垣間見たような気がした。

(七) 金銭取り扱いは几帳面に！

七十三年（昭和四十八年）の夏だった。寺の請負業者に請われて二百万円を会長から四日間の約束で証文なしで小生が借用したことがある。会長への返済当日、入金を約束していた先方から入金は三日おけると連絡があった。会長も信用している大会社だし、三日の延期だからといって会長に連絡しなかった。返済日の翌日、会長から「きのう一日中、返済を待っていた。何の連絡もしないでは困る」と不機嫌であった。金銭取り扱いは特に几帳面に期口を守るようにと教えられたが、悲しいかな「縁なき衆生」で未だに金銭感覚にうとく救いようもないらしい。

(八) 同僚をいたわる会長

奉賛会理事会の集まりがあると大城会長は機嫌がよかった。会は大城会長、佐辺良夫氏、比嘉松栄氏、又吉康栄氏、金城栄秀氏、呉屋秀信氏、小生・野村健の七名の出席でおこなわれたが琉球石油(株)社長・佐辺さんは永年、腰痛持ちで少しばかりの無理を押し出席すると、会長は手を取らんばかりにしてソファーに招き入れる。腰痛の話が出ると、腰痛との付き合い方を教えると

いって理事の皆さんの前で自家考案か知らぬが古い型の柔軟体操を御披露なさった。健康で謹厳な会長のユーモア溢れる一幕である。

又、光電気工事(株)社長・金城さんとは同じ国頭出身の心安さからと思うが、打ちとけた山原(やんばる)方言で二言三言語り合う睦まじさは美しい光景で、同席のみなさんも羨ましうらやそうに微笑むのである。

同僚をいたわる会長のスナップを見る気がした。

(九)おソバ好きの会長の思い出

一九七三年(昭和四十八年)上地氏、小生が随行して御志納集めに上京。八日間の旅であったがその間の昼食は決まってソバであった。「急いでいる時はソバに限る。栄養がよい、うまい、安い」とソバを前に会長は相好をくずしてソバ談義を始める。上地氏も小生も拝聴しながら三名ともソバをススル。その枯淡の味もよし、濃厚の味もよしである。会長とソバを賞味した無数の思い出を胸に秘めている人は多いと思う。成田山境内地主組合の幹部連が地代引き上げの陳情で会長を訪問するとよくソバを振舞われ舌鼓をうったと、思い出話をするのもその一つである。

それほど会長はソバがお好きであった。

(元沖繩成田山福泉寺寺務長)



沖縄成田山落慶入魂式

“白い狐”のこと

大城鎌吉さんのことを想うと、もう二十年以上も昔の沖縄三越開店時のことが昨日の様に懐かしく鮮烈に思い出されます。

あれはまだ開店前で沖縄三越を建築中のことでした。当時、日本橋三越の宣伝部にいた私はある日、突然呼び出され、沖縄三越を作る応援をする様に云われ、初めて沖縄に着任し、直ちに大城康秀さん以下の当時の大越の仲間と仕事に入りました。そして数日後、朝早く、建築現場に出て、うろうろしていると、リンカーンに乗った大城社長（当時）が半長靴を履いてさっそうと建築現場に現われました。何やら社長は仕事の指示をされたい様子でしたので私が「おはようございます」とあいさつをすると、厳しい眼光で地下から各階へと歩き乍ら次々と仕事の指示をされました。私も夢中になって鎌吉社長のお供をして建築現場を歩き乍ら社長の指示を書きとめて歩きました。——そんな数日が過ぎて或る日、鎌吉社長は私が三越から来た応援の人間というのに気づかれていたく恐縮されました。その後もお供をする日が続き、三越の完成にいたりしました。

田辺昇

当時の鎌吉社長は朝から晩まで仕事仕事の連続でしたが、沖縄でお世話になって暫くして「白い狐」の話をされたのが物凄く印象に残っています。

その時鎌吉さんは物凄く真面目な顔で話されたのですがー。

「田辺さん、辻あたりには悪い白い狐が一杯いるから気をつけなさい・・」と本当に真面目な顔でおっしゃるので一瞬何のことか判らなかつたのですが、すぐに鎌吉さんの「白い狐」とは何かに気がつきました。しかし、余り鎌吉さんが真面目な顔でいわれるので笑いも出来ず、「充分、白い狐には気をつけます」とお答えしました。

お若い頃には辻の界限で鳴らした鎌吉さんのことも伝説の様に聞いておりましたので鎌吉さんの白い狐談は余計面白く、またこんなことまで真面目に気を遣って頂けることが嬉しく、今でもあの時の鎌吉さんの口調を忘れることが出来ません。

若い頃から裸一貫で大成された鎌吉さんでしたが、お年をとられても頭は物凄く柔軟な方で、私のような若造も非常に楽しく一緒に仕事をさせて頂きました。

——思い出一杯の鎌吉さんも今はもういらっしやらない。

私の一生の中に心に深く残る沖縄三越の仕事をさせて頂いたことは、あれから以後、沖縄の方々との交友も含めて、私は鎌吉さんから大変なものを頂いたと感謝しております。鎌吉さん有難うございました。

(元沖縄三越店長)

第二章 大先輩を憶う

沖繩における夫婦の鑑

西銘順治

大城鎌吉さんは、赤貧あらうがごときどん底から身を起こし、計画した数々の事業を遣り遂げ盤石の体制をとり、経営基盤を築き上げ、國場幸太郎さんと並んで沖繩財界の指導者として、その手腕と力量は高く評価されました。その業績は衆人の等しく認めるところであります。

私は、長男の故・大城毅君とは中学が一緒で、県立二中の頃から戦後のヘラルド新聞創立までの長い間、相協力し、苦勞した仲間の一人でありました、その頃から、ご尊父の鎌吉さんの營咳けいがいに接し、戦後も一貫してご指導頂いた大先輩であります。

琉球政府経済局長、那覇市長、衆議院議員、沖繩県知事の長い政治生活の中で後輩としてご指導、ご協力を賜りました、忘れることのできない大先輩でありました。

チャリティーゴルフでは、いつも一緒にスタートをした仲間で、齢八十歳とは思えないくらい遠くへ飛ばし、正確なパットで、いつも先輩に一点か二点ぐらい負けたものです。プレーが終わって、十九番で寛くわんく時の満面に笑みを浮かべた、あの人なつつこい、子供っぽい顔が、今で



西銘氏の知事選の勝利を祈って

も蘇よみがえってまいります。

天真爛漫てんしんらんまんというか、あの子供っぽい無邪気なお姿が
偲おもばれてなりません。

また、奥様も素晴らしいお方で、若い時代から鎌吉
さんを助け、たくさんの子供たちを育てあげ、立派に
成功させました。

人なつつこい笑みを湛たなえ、決して、表に出ること
なく、影の協力者に徹し、鎌吉さんを表にたてて若い
頃から一心同体の苦労を積み重ね、鎌吉さんを成功さ
せた典型的な人でした。

ご夫人の地味なお姿が、鎌吉さんの人柄をつくりあ
げた大きな力だったと思います。沖縄における夫婦の
鑑ともいべき人であります。

お二人のご冥福をお祈りし、大城家の益々ますますのご発展
を祈念致します。

(衆議院議員)

戦災復興の道筋をつくる

仲村正治

多くの県民から敬慕、敬愛の念を寄せられた大城鎌吉さんが九十四歳の天寿を全うされてから早や三年余が過ぎました。

この度『大城鎌吉追想集』を発刊されるに当り、故人についてのご追慕の言葉を申し上げる機会に接し、光栄至極に存じます。

大城鎌吉さんの生い立ちについては世間でもよく『立志伝の人』として語られています。特に私の親戚の赤嶺保三郎さんが少年時代から大城さんに仕えて、戦前から、ずっと主従の子弟関係で、まるで親子みたいな親密なおつき合いを続けておられたので、私もいつもお会いして、お話しをお聞きしたり、ご指導を受けたりする機会が多くありました。また、大城さんの七男で現在の大城組社長の武男さんとは那覇高校の同期生と言う事もあって大城鎌吉さんにはいつも気軽に、身近かな気持ちでお会いする事ができましたので、大城さんご自身からも赤嶺さんからも大城鎌吉さんが歩んで来られた苦労話についてはよくお聞きする機会がありました。

私の記憶に基いての話でありますので少々正確さを欠くところもあるかも知れませんが、大城さんは大宜味村の貧困な家庭に生れ育ち、幼少の頃から家計を助けるために筆舌に尽し難い苦勞の道歩みながらもいささかも挫ける事なく強靱な精神力と忍耐力で丁稚奉公から始つた人生を一步一步人生の地歩を積み上げ前進する努力を続けられ、村役場の給仕、大工見習いを経た後、遂に大正九年には弱冠二十三歳にして建設業『大城組』を創立されたと言う事を聞きました。これはまさに大城さんの勤勉実直な人柄と誰からも信頼される人間性に合わせて実業人に求められる優れた企画力、決断力、実行力がメキメキと事業の実績を打ち立てて行く力となったものだと思います。戦時中、政府は経済統制に加えて軍事基地建設に対応できる主要な土建業の統合をしたようですが、沖縄県内の大手の土建業を一社に統合し『沖縄土木建築工業株式会社』を設立した時に大城鎌吉さんが社長に推されて就任したと言う事があります。

更に戦後の大城鎌吉さんの実績やご功績について申し上げるとなれば、それこそ枚挙にいとまがないと言うところでありますので、限られた紙面ではとても説明ができるものではありません。戦後は誰もが命からがら着のみ着のまままで廃墟の瓦礫の中に茫然自失の状態で立たされたのであります。やはり大城鎌吉さんは、いま沖縄の復興の為に何が必要かを思い立たれ、沖縄製瓦工場を設立され、自ら本業の建設業『大城組』を再開され、県内の建設業全体を組織化されたのであります。当時米軍占領下で本土との人や物の交流に厳しい制約があつた時代でしたが、大城さ

人は復興に必要な木材を始め建築資材の一括輸入をして業界に分配する等して戦争で焼き払われた住宅建設等、戦災復興の道筋をつくられたのであります。

沖縄がサンフランシスコ条約によって本土からの行政分離が決定的になり、米国統治下で政治、経済、教育等々独立国家形態をとるようになり、陸海空の運送業、金融業、製造業、流通等々一國並みの形態をつくらねばならなくなったのであります。大城さんはそのすべての分野に自ら設立者となって経営されるかまたは経営参加をされて、沖縄の経済発展の基盤を築き、経済人として多大な貢献をされた大功労者であります。

大城鎌吉さんは企業を成功に導く神通力みたいな能力をもっておられた方でありましたが、氏のもとにはそれにふさわしい人が集まり、全体をよく統率する力と経営者を育てる抜群の能力の持主であったからこそ、これだけの沖縄を代表するあらゆる分野の企業を成功に導き育てる事ができたと思います。

大城鎌吉さんには沢山の御子息やお孫さんに恵まれ、皆それぞれお父上の築かれた企業を引き継いで健全な経営を続けていますが、同時に先述のように大城さんが育てた後継の経営陣が企業発展の原動力となっていて、大城鎌吉さんの精神は今後共、末永く生き続けるものと確信するものであります。

限りなく尊敬の念を抱きつつお近づきできた今は、亡き大先輩大城鎌吉さんの思い出を限られ



前方右が仲村氏

た紙面で語る事ができました事を幸せに思いつつ筆を収めます。

(衆議院議員)

忘れられないお言葉

宮 里 松 正

大扇会の大城鎌吉前会長は、国和会の国場幸太郎前会長、琉展会の宮城仁四郎会長とともに沖縄の戦後の復興期から長年にわたって沖縄の経済発展に心魂を傾けてこられた偉大な先達でした。沖縄の戦後の経済発展の歴史は、この三人の先達の活躍を抜きにしては、語る事ができません。

大扇会の大城鎌吉前会長は、建設業の大城組を中心に大城物産、国際物産、三越デパート、那覇空港ターミナル、ホテル・グランドキャッスルなど大扇会に参加している多くの多種多様な企業をつぎつぎに創設され、しかも、これらの企業をいずれも一代で県内のトップ企業に育て上げられました。時代の流れがある程度味方したとはいえ、誠に驚嘆すべきことであります。大城鎌吉前会長のそのような活動の軌跡は、国場組を中心に国和会傘下のさまざまな企業を創設された故国場幸太郎国和会前会長や沖縄の伝統産業である製糖業を中心に数多くの企業を展開してこられた宮城仁四郎琉展会会長の軌跡とよく似ています。しかも、この三人は、ともに山原の出身で

あり、彼らが生まれ育った山原の地域は、彼らの幼年時代から青年時代までは、けっして経済的に豊かな所ではありませんでした。彼らの企業家としての資質や情熱は、案外そんなところから培われたのかもわかりません。いずれにしても、そのことは、大変に興味のあるところであります。

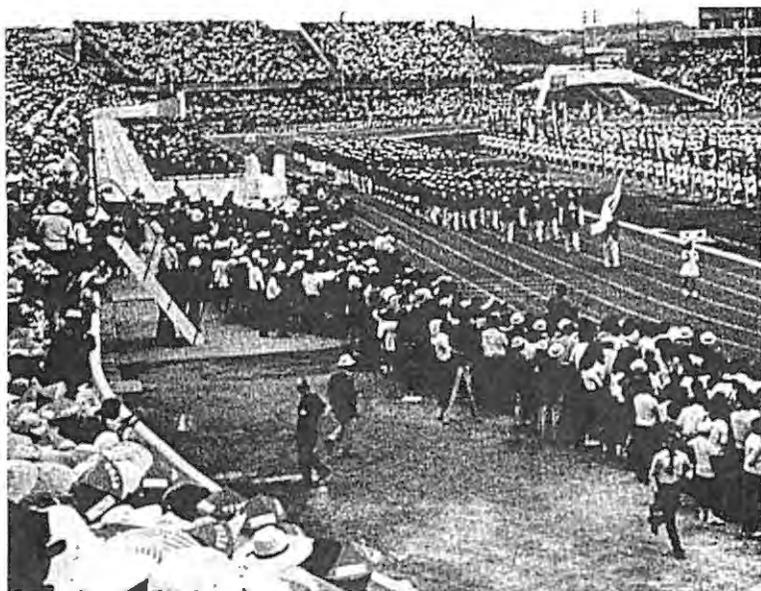
大城鎌吉前会長は、私の父と同じ年で、私とは年令が随分離れていましたので、例えば酒食を共にしながら親しく語り合うなどということは、あまりありませんでした。しかし、山原の大先輩であり、またご子息の毅さんとは、同窓、同業の誼よしみもあつて、長年親交を重ねて参りましたので、何かにつけて可愛いがっていただきました。

私が大城鎌吉前会長とのそのような親子のようなおつきあいの中で今でも忘れることができないのは、復帰の直後に開催された「若夏国体」のときのことです。そのとき、コザの市営球場では、軟式野球を実施することになりましたが、それに佐賀県から白衛隊チームが出場することになったために、その受け入れをめぐる革新陣営の内部がかなり混乱しました。白衛隊の国体参加に反対していた一部の労働組合などは、この佐賀県チームの競技場への入場を実力で阻止するという運動方針を決定しました。これに対して本土から来ていた文部省の担当局長や団体協の責任者たちは、「そんなことをするなら、若夏国体の全日程を中止し、直ちにすべての選手役員を引き揚げる」などと凄い見幕でした。そこで私は、コザ市営球場の競技運営責任者であつ

た大山朝常コザ市長に連絡し、同市長に念のため警察機動隊を導入してもらって、同球場での軟式野球の全日程を何とか無事に実施していただきました。

このように軟式野球の日程は、何とか無事に終了したのでありますが、警察機動隊の導入に反発した高教組の人たちが琉球政府の私の執務室に押し掛けてきて、「革新県政を支えている民主体の行動に警察機動隊を導入するとは何事か。あなたは、その責任をどう取るつもりか」などと抗議してきました。私は、「責任を取れというなら、いつでも取る用意がある」と答えました。そのことは、当然のことながら、翌日の新聞で報道されました。大城鎌吉前会長は、それをご覧になって早速電話で「宮里さん、あなたが昨日コザの野球場に警察機動隊を導入したのは、当然の措置だ。私は、よくやってくれたと考えている。あなたは、高教組の連中に責任を取れというならいつでも取る用意があるといったそうだが、そんなことで短気をおこしてはいけませんよ。この国体の次には、海洋博という大きな仕事控えているではないか」と激励してくれました。高教組の人たちの言動にいささか情ない想いをしていただけに、大城鎌吉前会長のそのようなお言葉は、私の胸に深く浸み込み、今でも忘れることのできない懐かしい想い出になりました。

大城鎌吉前会長の遺志は、今では直系の大城浩氏によってしっかり承継がれ、また大城鎌吉前会長が創設された各企業は、それぞれ立派な後継者たちに引き継がれていよいよ発展していることを知り、誠に頼もしい限りであります。大城鎌吉前会長のありし日の面影を偲びつつ、謹ん



若夏国体の開会式

で御霊のご冥福をお祈り申し上げます。

(衆議院議員)

「私の大学」を地で行く

大 浜 方 栄

私が故大城鎌吉社長に初めてお会いしたのは、たしか昭和四十年頃で、私は三十八歳、大城社長はすでに還暦を過ぎておられた。お会いしたのは、沖繩タイムスの故上地一史社長の肝入りの会合である。上地社長が、親分肌で多趣味な方だったので、各界の方々が毎月集まって、上地学校とも呼ばれていた。当時の大城鎌吉社長は、国場組の国場幸太郎社長と共に、沖繩を二分する財閥、大城組の総師である。若輩の私にとって、話しかけてもらえるだけでも光栄だった。

私が大城鎌吉社長と親しくお付き合いをさせて戴くようになったのは、昭和四十七年、現、大浜第一病院の新築工事を大城組にお願いしてからである。ところが、工事費支払いに関して、小生と大城組との間にトラブルがおこった。大城組は、復帰に伴うドル為替差損を理由に、小生に工事費の割増を訴えてこられた。一開業医の小生にとって、大借金をしての乗るかそるかこの病院建築だったので、契約書を盾にとって要求をお断りした。運の悪いことに、その後、更に新たな問題がおこった。落成後、台風で、小生自慢の十一階のペントハウスが水浸しになった。専門

家に見せると、少々の手直しではダメとのことである。小生は、失望と怒りで、新築の喜びも吹きとんだ。大城社長は、小生の前に工事責任者を呼んで、「大城組の全責任で改修しますから、ご心配ないように」と、こちらが恐縮するほど、辞を低くして詫びられた。改修事中も、大城組は、私のしつこい苦情をいやな顔ひとつせず、我慢強く聞き入れてくれた。雨漏りは全くなくなつた。当時の私は、四十代の働き盛りで向う意気が強かつた。そういう私を大城社長は、あくまでも大城組の顧客として丁寧に接して頂いた。当時の大城鎌吉社長の誠実なお人柄と、逆上していた自分のいたらなさを比べ、冷汗三斗の思いである。しかし、今では、鎌吉社長の余徳で、ご子息の武男社長や安謝医院の大城英紀先生ともご厚誼を頂き、一昨年の大浜第一病院の改造工事も大城組にお願いした。おかげで病院は面目を一新し、ホテルのようだと、多くの患者様から喜ばれている。「終わり良ければ全て良し」である。

又、大城鎌吉社長に幾度か、お褒めの言葉を頂いた事も忘れがたい思い出になっている。私は、昭和四十年、三十八歳で神里原に鉄筋五階建ての大浜病院を作った。当時は、沖繩一の民間病院と言われていた。その工事は、善太郎組が請け負ったにもかかわらず、大城鎌吉社長は、私に「大浜先生、あなたは若いのに大したもんだね」と心から褒めて下さった。お褒めの第一例である。

昭和四十七年、大城組施行の大浜第一病院の落成式の日、最上階十三階の院長室にご案内した。十一階は、三面総ガラス張りで、那覇が一望の下に見渡された。インテリアは、本土の著名

な方をお願いした。当時、本土の政財界の来客も、その眺望とインテリアを絶賛しておられた。大城社長は、ソファーに腰をおろし眼下の市街を見渡すと、「大浜先生、人間は金ではない、知恵だね」と一言もらされた。今までのどなたのお言葉よりも心がこもっているように思われた。それが褒めの第二例である。

また、私は、昭和五十一年の高額所得番付で、沖縄の第一位、九州で第二位、全国で五十五位になったことがある。その時も、「大浜先生、あなたは全国で五十五位になるとは、立派ですね。」と褒めてくれた。褒めの第三例である。男は、外に出たら七人の敵を持って、或いは、毀誉褒貶きよほうへん相半ばすとも言われる。私は、昭和三十四年、裸一環で熊本から沖縄に帰って、開業以来、毀誉褒貶の中にあつた。尊敬する大城鎌吉社長に誉められたことで、私はどれほど励まされ、感激し、自らを誇りに思つた事だろう。

大城鎌吉社長は、よく、「私は幼少の頃、丁稚奉公に身売りされ、無学ですよ」と云われた。ロシアの文豪ゴリキイーの作品に、「私の大学」という自叙伝的小説がある。ゴリキイーにとつて、すべての人びとが師であり、世の中は大学であつた。大城鎌吉社長から長い間、高誼を頂き、また、『回想八十五年』（大城鎌吉著）を読んで、私は、大城鎌吉社長は、ゴリキイーの「私の大学」を地で行かれた方であると、思っている。歌舞伎役者を思わせる端正な風貌、五分刈の銀髪に柔らかなまなざし、きりつと締まった口許、物静かな語り口は、常にジェントルマンの気品を



大浜第一病院

たたえておられた。学歴社会の今の時代、こういう人物には滅多にお目にかかれない。それは、長い間、風雪に耐えて、偉業を成しとげた者だけが会得する人生への諦観ていかんに由るものだろう。

大城鎌吉社長から、ご高誼いたなを戴いた自分は幸せであった。

(参議院議員)

“にぬふあ星”のような方

大城 眞 順

大城鎌吉さんのご逝去で文字通り「巨星墜つ」という表現をすぐ念頭に浮かべるわけですが、氏は一つの灯台、人間としての道標、輝く星と呼んでいい方でした。大城氏に接する度に「前後左右どこから見ても一点非のうちどころのない完璧人間は、やはりいるものだ」という感動を覚えたものです。誠実そのもの、真実そのもの、質実そのもの、忍耐そのもの、汗とか涙とか努力とか、人間を磨く要素をいくら並べても足りない程、すべてを総括、網羅したような方でしたね。それと、もう一つの譬^{たと}えを申し上げますと、鳥唄の『てんさぐの花』と『汗水節』を足したような方じゃないかという感じですね。「夜走らす舟や子ぬふあ星目当て、わん生ちえる親や我ど日当て」(夜、航海する船は北斗七星を目印にする、私に生を与えてくれた親は私^がたより)という道徳観念に「一日にぐんじゅ 百日に五貫 貯みてい損(すん)なゆみ 昔言葉・・働かな」という人生哲学を織りこんだ大城鎌吉さんという方は、やはりみんなの指導者としての、あるいは求める人間像としての日標である星であった、そんな気がします。長い間のお付き合いで

特に強烈に印象に残るエピソードを二、三ご紹介します。

まず、大城鎌吉さんほど時間に厳格な人はなかった。普通の時計よりこの人の生活のリズムの方がずっと正確に時を刻んでいました。おそらく一生涯、大城鎌吉さんが時間を間違えたことはないんじゃないかと想像するわけです。私のアメリカ政府のサラリーマンの時代、通訳を任せられたり、立法院や県議会の議員時代、面会の時「どこへ〇時にきなさい」と言われ、定刻にお会い出来なかったことは一度もなかった。まだお若く盛んに活躍されていた頃で、例えば琉映貿とか大城組とか、或いは国際物産とか空港ターミナルとか沢山の系列会社があり、それを毎日廻られるわけだが、各社とも予定した時間に一秒も狂わない。ぴしゃり時間通り約束の場所で会えた。時間厳守自体が一つの信念だったようで、確か米寿のお祝いの際の大城鎌吉さんらしい引出物の懐中時計は今でも大事にしています。

二番目に、単に精神的な面だけではなく非常に身体を大事にする、他人の健康にも非常に気を付けておられましたね。お会いするとき、まず目につくのは、どの会社のほうにも、足の裏をつよくし血行をよくするためのイボイボのついた健康スリッパ。

そして話は開口一番「人間は健康だよ」という話から始まって「あまり酒は飲むな」と、これはよくが酒を好きだから、そうおっしゃったというわけではなく、やはり、政治家というものは酒はほどほどに、ということだったと思います。それが、あのような長寿で、大往生をなさった

秘訣ではなかったか、と想像するわけです。

もう一つ、健康の面で言うと、八十代後半までよくゴルフをなさっていましたね。一度だって私が勝ったことがないんですよ。とにかくすごいんです。正直一点張りの方ですから、球も正直でまっすぐいきますからね。こちらはなかなかそうはいかない。年齢からすると、本当にびつくりする位のゴルフアーでしたね。そういう点ではやはり大城鎌吉さんらしい健康管理の一コマ、二コマというものを見せつけられたような感じがしたわけです。

以上話したような方だから、会社の経営も人を大事にするということからお始めになった。義理堅くて昔、青年時代、一緒に苦労した人はいつまでも面倒をみ、人間の和を大事にするというところがありましたね。

若い頃、大工で非常に苦労され、慶留間島でしたか、私も立法院議員か県会議員のころ見せていただいたが多分、大正時代に大城鎌吉さんが大工であちこち廻っていた頃に造った「チャーギ・ヤー（犬槇の木で造った家）」は今も残っている。素晴らしいな、と思いますよ。やはり、大城鎌吉さんの昔の苦労の時代、こういう風にして離島まで、よく働きに出ておられたなー、と思うわけです。

ひと言で言えば完璧人間、ほかの言葉で言えば、昔われわれが学校で習った修身の本を読んでいるような気がするんですね。大城鎌吉さんという人を見る場合に、形を変えた二宮金次郎みた



沖縄の夜空

いな、汗を流して働く喜びを積み重ねてきたような人間像ではなかったかと思っています。

いま、不透明で物事の価値観が乱高下する時代だからこそ、そういう人間像が欲しい。大城鎌吉さんは、我々凡人が七回生まれかわっても到底、到達することの出来ない素晴らしい人間像そのもの、永遠に教訓の人、目標の人、師事する人と言うことができます。

政治家としての私を終生、力づくよく支えてくださったことも忘れ得ません。

(前参議院議員)

偉大な起業家の言葉に感銘

鎌吉 勇

「過目、故大城鎌吉氏のエピソードを書いてくれ、と依頼された。身に余る光栄と感じ、引き受けたものの、戦後沖繩経済界を故國場幸太郎氏と二分した巨星であり、鮮明に記憶している数多くの話の中から何を書けばよいのか、大いに迷った。改めてふり返ってみると、大城組本社三階の会長室にたびたびお邪魔し、多くの示唆を得たものだ。時には世相について辛口の論評を聞き、たまにはおだてられ、一瞬とはいえ、ついその気になったことを思い出す。

私が鎌吉翁から薫陶を受けるようになったのは、昭和五十五年（三十六歳）県議会議員に初当選以来のことで、当選御礼を申し上げに、大城組会長室を訪ねたことがそのきっかけであった。

会長室で「選挙支援」の御礼を申し上げ、会長は「おめでとう」と、やさしい声で祝福してくださった。会話の流れとして、選挙の苦労話になるのかと思いきや「儀間君。沖繩には資源らしい資源は皆無に等しい。したがって物的生産業を興すのは、むづかしい。ついてはそれに代わるものとして、人材を育み、人的資源を確保する必要がある。それには君達若い者が人的資源

となり、懸命に精進しなければならない。そうしなさいよ!!」と、静かな口調で言われた。戦後の産業経済の復興に卓越した手腕を発揮された起業家のこの言葉に新米県議は感銘を受けた。

県議初当選のこの一年、鎌吉翁と私は、無縁でないことがわかった。『回想八十五年』が同年十二月に刊行されたが、その中で少年期を回想して「心に期するところがあって、大宜味村喜如嘉のモトブヤーという家を訪ねた。地元では名家に属し、そこに弟子入りをして、大工見習いで身を立てようと決心したからである」と語っている。このモトブヤーは、実は私の妻のオバの嫁ぎ先であり、鎌吉翁が世話になったのは、オバの夫・金城通一氏の父であった。この縁を知って以来、私の妻はモトブヤーの屋敷でたわわに実るシークワサーを、鎌吉翁へ毎年とどけることになった。

ある日会長室を訪ねた。入室してみると緊張した顔の会社幹部が数名いた。重要な会議だと察して退室しようとする中、「儀間君、君も同席して、話を聞きなさい」という張りのある会長の声が、私の背中を突いた。

翁曰く「君達はいったいいつまで、僕の大工仕事（大城組）だけで飯を食うつもりだ。時代を先取りして事業を興さなければならぬのに、その気配が感じられない。」と幹部を叱咤し、そして鎌先は私に向けられた。「儀間君とて別とはしないぞ。政治家として県政をどうしようとしているのだ。聞くと君は、酒をよく飲むそうではないか。飲むなとは言わないが、深酒はするな。

体は健康なうちに大切にするものだ。このことは西銘君（当時県知事）にも言っている」との厳しい注意である。酒と健康については、鎌吉翁ご自身が御尊父から得た教訓として、回想録に記している。あの時、まるで父親に説教される子供のように神妙に聞いたことを、はっきりと記憶している。鎌吉翁は、寡黙な人であったと思う。言葉少なく実直であったがゆえに、エピソードも多様にある。またの機会に紹介したい。

（元県議会議長）



たわわに実るシークワサー



鮮やかな塩屋大橋

“井戸を掘った人”を忘れず

桐嶺 恵一

亡父一郎は、生前よく私に次のような話を聞かせてくれた。「恵一、個人もそうだが、企業も長い間には、ずいぶん多くの人のお世話になっているんだよ。琉石にとっても多くの恩人がいるが、何としても忘れられないのは大城謙吉さんだよ。琉石設立当時、民政府が決めた資本金を調達出来なくて困っていた時期があった。当時は貧しい時代で、食うや食わずで余分のお金などなかった。可能性のある所は全てお願いし出資して貰った。一ドル株主も数多くいた。それでもどうしても予定額が集まらず、その対応に苦慮していた時に、大城謙吉さんが中心となって宇良宗樽さん、金城賢勇さんといっしょに個人資産を提供、それを担保に銀行からお金を借り、見せ金を作ったなんとか設立までこぎつけた事があった。中国の諺に“水を飲むときは、井戸を掘った人のことを忘れるな”とあるが、この話は忘れないでくれよ」。

父の遺言通り、りゅうせき四十周年に、大城謙吉さんをお招きし、創立時の功労者として表彰し、全員で謝意を表すことにした。残念ながら、大城さんは体調を崩しておられ、代りに大城浩

氏が出席されたが、感謝の気持ちが通じたことで父への約束を果たしたような気がした。

父の話を通して私の頭の中には大城鎌吉さんのイメージが、はっきり出来上がっていたが、実際に、親しくお話をさせていただくようになったのは一九七三年、故長嶺彦昌さんに勧められ、沖繩ライオンズクラブに入会してからのことである。

私にとって雲の上の人に思っていた大城鎌吉さんが、実際にお会いして見ると、誰に対しても穏和で、しかもわけへだてなく、私のような若造にも対等な立場で接していただいたのには感激であった。

一口でいえば、生仏様というのが、私のいつわらざる感想であった。

最も印象に残る思い出も、ライオンズクラブでの一コマである。

あるクリスマスパーティーの席上、大城鎌吉さんは、傍らの大城浩夫人のれい子さんを見やりながら次のような話をされた。

「稲嶺君。私は毎朝早起きし、軽い体操をし、六時には仏前に手を合わせることにしている。ところがこの孫嫁は出来た子で、もうその時には暖かいお茶が供えられているんだよ。それも私の亡き妻（清子夫人）が、生前きちんと教育してくれたお陰だよ」。

長年連れ添った清子夫人に対する暖かい思いやりには、胸にジーンと来るものがあつたが、同時にれい子夫人を通じての、次世代に対する感謝と期待を感じることが出来た。大城鎌吉さん



稲嶺一郎氏次官就任激励会

は他人にはやさしかったが、子女の教育には厳しかったと聞くが、その中で立派に育てられた御家族の皆さんの活躍ぶりを、今頃は天国から清子夫人ともども目を細めながら暖かく見守っているのではなからうか。

(りゅうせき会長)



琉球商工会議所にて

琉球新報賞の贈呈

親 泊 一 郎

大きな業績を残す人というのはどこか違ったところがあるように思います。梅檀せんたんは二葉より芳かんばし、といわれますが、大城鎌吉さんはまさしく梅檀であったと思います。天与てんよの才能に恵まれ、人生ずっと順風満帆の人もおれば、艱難辛苦を強いられながら、その苦勞を自らの肥やしとして、努力に努力を重ねて大物になる人もいます。凡人と違うところは、むしろ苦勞を楽しむといえますか、苦にするところがなく、試練を次々に乗り越えていることです。これもまた天与のものといえるでしょうが、大城鎌吉さんはそういう、類まれな才能をもたれた大きな人でした。大城鎌吉さんをご自分でも語っておられるように、幼少時、苦勞の中で育った方でした。回想録に「私が数え年十歳のとき・・・そのときから私にとっては丁稚奉公生活という「いばら」の道が始まっていたのである。その最初の身売り先が辺土名の宇良家であった・・・当時の二十円で引き取られ、農作業や六頭いた山羊のクサカヤー（草刈り）などをすることになった・・・」など、苦勞した当時のことが次々に出てきますが、あの「おしん」を連想させるようで、普通の人には

耐えられない経験ばかりです。ところが、カラッとしていて、重苦しい、暗い感じはとてもしない、そこが大城鎌吉さんらしいところだと思います。やはり大成する人は小さい時からどこか違うとしか言いようがありません。

大城鎌吉さんのことは、父（政博）から聞いていたのでよく覚えていますが。新しい瓦を考案されて、大儲けしたり、思いもかけぬことに出あったりして苦勞された話などは何度も聞かされたので、いまも懐かしく思い出します。

弱冠二十三歳で大城組を興され、数々の輝かしい業績を挙げられて今日の大城組を築かれ、大扇会を率いて、戦後沖繩の産業・経済復興に大きな功績を残されたことは県民の知るところです。大城鎌吉さんの足跡・業績は即、沖繩の『企業史』と云って過言ではないと思います。

私共、琉球新報社は、戦後の沖繩の復興に尽くされた大城鎌吉さんの業績を讃え、後世に伝えようと、昭和五十三年（一九七八年）、琉球新報賞を贈呈いたしました。私が広告局長をしている時で、日頃から、大城組や大扇会グループの皆様、新聞の事情をよく理解していただき、協力もしていただいた頃だっただけに、大変うれしく思ったものでした。

あの時、琉球新報賞の贈呈をお伝えすると、うれしそうに瓦の普話を持ち出され、「あれはだいが金を捨てたよ。・・納得のいく瓦がなかなか出来なくてね。技師も金を捨てるようなものといつて、あきらめるように言うのだが、意地だったんだね、ワシも若かったから」と笑ってお

れました。受賞を心から喜んでおられました。

琉球新報社としても、立派な方に賞を贈呈出来てよかったといまでも誇りに思っています。

会合などで時々お会いすると、いつも「大切なのは信用です。信用に勝るものはない」と話されてきました。幼少時から人の恩を肌で感じてきた人だけに、大きな企業をいくつも率いるような立場に立つても、信用とか、人の恩というものを忘れない人でした。お会いするたびに、教えられることが多く、頭が下がる思いでした。

頭が下がるといえば「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉もよく使われていました。大成されてからも、そういうそぶりは少しも見せず、いつも気さくに私共若いものによく目をかけて下さり、ご自分の経験談などを聞かせていただきました。立派な方から教示を受けることが出来た幸運を、いま改めて喜び、感謝しております。

沖縄は今までこそ、リゾートホテルの林立に象徴されるように、見違えるような復興を遂げていますが、戦争ですべてが灰燼に帰し、何もない時代から立ち上がり、戦後の混乱期を経て今日のような豊かな時代を迎えるようになったのも、大城鎌吉さんのような偉大な人が沖縄の復興、発展に生涯を通じて尽くされた功績があったからだと思えます。大城鎌吉さんのお気持ちやお考えは、大城組、そして大扇会の多くの人達に引き継がれているだけでなく、私共多くの県民の心の中にもいつまでも残ることでしょう。



1978年9月15日産業経済功労賞受賞

偉大な方に接することができたというのは
そのことだけで素晴らしい財産といわれます
が、私にとって大城鎌吉さんにお近づき出来、
薫陶を受けたことがそれです。いまも、大城
鎌吉さんの柔らかな笑顔が目に浮かびます。

(琉球新報社代表取締役社長)

正にライオンと呼ばれる人

當山堅次

「事業を成功に導き、善良なる生活を楽しみ常に微笑をたたえ、人類を愛した知識人の尊敬を集め、幼児たちに親しまれる人。彼こそライオンと呼ばれる人」

これはライオンズ必携に掲げられた名言であります。大城鎌吉さんこそこの言葉にふさわしいライオンでありましょう。

沖繩にライオンズクラブが出来ましたのが一九五九年四月でしたので丁度今年で三十六年になります。当時、沖繩は米軍の統治下にあり、軍の工事で大阪から来た錢高組の所長の山本義樹氏が大阪南ライオンズクラブの会員であった関係で沖繩の財界知識人に呼びかけ、沖繩に初めてライオンズの灯が点されたのであります。

大城鎌吉さんはチャーターメンバーとして進んで入会なされ、七代目の会長を勤められ一二〇名の会員の親睦団結を計ると共に先頭に立って地域社会の奉仕活動につくされたのであります。そのライオンズ精神はお亡くなりになるまで変わることなく生涯ライオンを完うされ全員の尊敬

を集められたのであります。私は御一緒にチャーターメンバーとして沖繩ライオンズクラブに入会させて頂きましたが、初代会長の稲嶺一郎さんと大城鎌吉さんには先輩としてライオンズは勿論ですが社会全般の事に就いても色々とお教示を頂き、本当に有難く、お二人は誠にライオンズの鑑の様なお方であり、今もって最も尊敬申し上げてゐるライオンでございます。

大城さんは健康には常に留意なされておられライオンズのゴルフコンペにもよく参加なされました。一九六四年九月の京都におけるライオンズの東洋東南アジア大会の親善ゴルフの試合で、三百人余の参加者の中で、スコアは忘れましたが七十三歳の高齢で見事優勝なされ、京都市内の料亭を借り切つて盛大な祝勝会を催され、長く語り草となつたのも楽しい思い出であります。

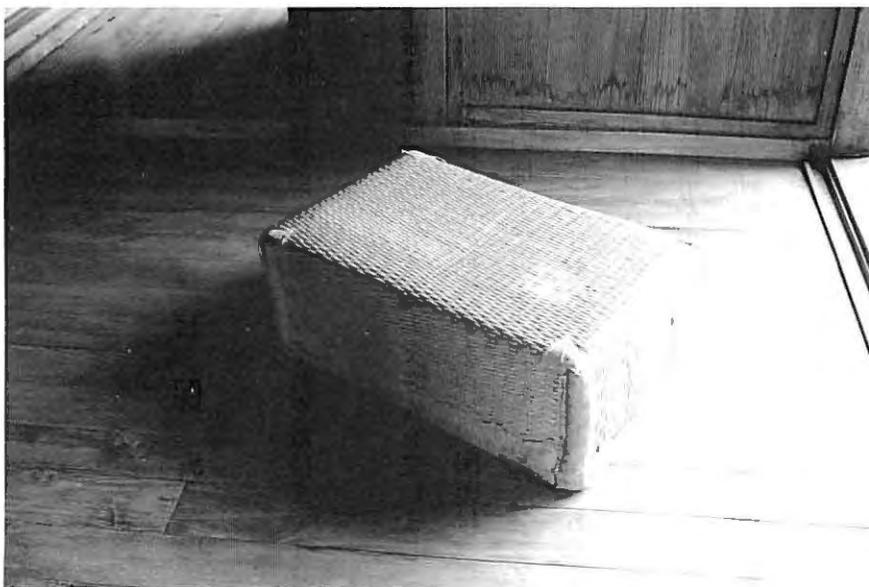
私は度々空港ターミナルの会長室を訪ねて大城さんの御高説を楽しく拝聴致しました。その時よく今は亡き私の母の若い教員時代の話しをなさつて下さいました。国頭の学校の先生であつた私の母が大変美しく轉任の時には母の大きな荷物をかついで轉任先まで送つて下さつた様でその時、大城さんはバサージン（芭蕉布の着物）に赤禪あかぜんじで長い国頭街道を歩いて行つた事を面白おかしく話して下さいましたが、振袖袴姿の若い女先生と尻端折り赤禪で大きな柳行李やなぎこぶしをかついで二人の姿は想像するだにおかしく一幅の画の様です。

大城さんは成長され一家の長として多くの部下職人を引き連れて戦前の那覇辻遊郭で大いに遊んだお話しをよくされましたが、それがちつとも野卑な感じを受けなかつたのは、きちんとした

お洋服で端正なお顔に常に微笑をうかべながら話す大城さんの英国紳士を思わす品格と素晴らしい人間性によるものでありましょう。

天寿を完^まうされ御高齢で亡くなれましたが、何としても沖縄のためにもっともっと長生きしてもらいたかったお方でした。

当山形成外科医院院長（沖縄ライオンズクラブ）



沖縄で使用されていた柳行季

生き続ける教訓

宜保好彦

大城鎌吉氏の人柄を一言で表現すれば、義理人情と経営理念を尊び、それを最後まで守りぬいた偉大な人だと思っています。

氏は十二歳の時、三十七歳のお母さんを、十五歳の時、三十九歳のお父さんを失いました。それ以来、氏の苦しい生活が続いたようであります。お祖母さんの勧めもあつて、国頭村役場の小使いになり、その後、「土地や財産のない自分には大工の棟梁に弟子入りするしかないと考えた」(回想八十五年より)この時、鎌吉少年はすでに将来の人生設計を定めていたようであります。

大工で独立を夢みて、昼は大工の仕事で働き、夜は図面引きや積算の勉強に励み、二十三歳で大望の大城組を設立、貸家や一般住宅の建築から次第に信用を頂き、公共事業の受注を受け、発展したようであります。その後、第二次世界大戦となり、沖繩は我が国で唯一の地上戦の地となりました。戦後は焦土と化した無の状態から新生沖繩が再出発しました。現在は経済発展を遂げ、物は豊かになり、国民生活は安定するようになりました。その大きな原因は国民の勤勉と英知の

賜物ではありますが、経済界の努力も大とするものがあります。

大城鎌吉氏は沖縄経済界の双壁（氏と国場幸太郎氏）と言われるまでに大成し、氏の系列会社（十一社）で組織する大扇会の会長としてまた、沖縄経済界の発展に君臨しました。そして一九九二年（平成四年）十月十八日午前一時三十五分、脳卒中で他界されました。享年満九十四歳の秋でした。

現在は双壁といわれた二人が故人となりました。人の定めとはいえ、沖縄経済界にとっては残念であります。

私の父（為貞）と鎌吉氏は、沖縄海邦銀行の前身であった第一相互銀行の同じ役員であったため、交友がありました。父は鎌吉氏を尊敬していました。父の話によると、氏は石橋を叩いて渡る人で経営者としての素養が高く、しかも正直で努力家で誠実な人柄、人を信用したらその人を徹頭徹尾、信用する方であり、何れ氏は沖縄経済界の大御所になれる人だと言っていました。このような関係で私は子供ながらによく鎌吉氏の人柄を存じていました。

私が直接に鎌吉氏を知るようになったのは、私の拙著『無病息災』（健康管理と生きがい）を一九八二（昭和五十七）年一月に発刊したときのことです。本の中で壯者を凌ぐ人々の項目の高齢者であり、しかも現役で活躍している著名な方々をインタビューした時に鎌吉氏の自宅を訪問したのが最初でありました。

広々とした屋敷に威風堂々とした大きな家屋で、応接間に案内され、いろいろな事をインタビューすることができました。その時氏は満八十三歳でしたが色艶といい、対応といい、実にエネルギーギッシュでした。健康法については、次のように話されました。

「若い頃は大食家であったが、近頃は体のために美食をとらないように気をつけている。朝と昼はめん類を主体に、たえず消化の良い物をしかも腹八部とるように心がけている。運動は朝の散歩や裸になって体操をしたり、ゴルフを六十歳から正式に始め、現在は二カ月に一回やって体を鍛えている。精神的苦勞は健康によくないので、できるだけ考えこまないように努力し、悩みが生じると人との対話や仕事でまぎらわすように努めてストレス解消している」。

また、成功法については

「なんとといっても、健康が第一で、次に勤勉と努力と信用が大事。仕事をするにはよく計画をたて実行することが大切である」。

とのことでした。

『無病息災』の拙著ができ、鎌吉氏に贈呈しましたら、その後、丁重な手紙を頂きました。

鎌吉氏より頂いた氏の著書「回想八十五年」によりますと、氏は役場の給仕になりたくて、直接、村長に会い小使いに使ってもらいたいと交渉したことで「人間は誠意を尽くせば何事も通ずるものだということ。また、人の好意にはどうしても報いなければならないということも学び取っ

た」と回想しています。

大正六年六月、国頭村役場では村の産業振興を図るため、村長をはじめ、村会議員、学校長、その他の関係者二十人ほどで構成する沖繩本島全域を回る農事視察団を結成し、視察を行ないました。その時、鎌吉少年は庶務・会計担当者として随員に加えられました。全員は首里方面で野菜の作り方や酒屋などを視察しました。しかし、鎌吉少年は思うところがあつて、一行とは別行動をとり、那覇市内をあちこち見て回つたとのこと。夜、会場に帰ってから村長に怒られたようでありませぬ。

「お前は立派な少年だと思つて連れてきたのに、勝手な行動をするとは何事か、いまからでもいいから、どうしても首里を見てこい」と、言われました。

それに対し鎌吉少年は「どうも悪うございました。でも私としては自分自身の目的があつての行動で、その理由については村に帰ってから説明申し上げますから、今日のところはお許しくください」。それには村長も納得したようです。

辺土名に帰着して、視察団全員が集まつて感想会が行なわれました。鎌吉少年は自分の考えを率直にしかもはっきりと説明しました。その内容を要約しますと

「那覇での私の行動をお詫びします。皆様は農業を見てもそれに値する方々ですが私は農業で食べていける土地ありませんし、農業の様子を見ても参考になりませぬ。私は将来商業で身を

立てようと考えています。そのため那覇の家具屋や建築・土木現場を見て歩きました。私の念願を果たすためにできることは、大工の棟梁に弟子入りをして見習いから建築の道を研究する以外にないと思い、自分だけで行動したのです、お許しを願います。皆さんにはいろいろとお世話になりましたが、すでに負債も返却し、建築の見習いに入りたいと思いますので小使いをやめさせていただきます」と挨拶しました。

会場からは喝采が起こり、そばにいた同僚の小使いまでが「大城君、自分も一緒に連れていってくれ」と申し入れたとのこと。その晩は送別会を開いてくれ、饞別まで頂いたようです。この件について鎌吉氏は「私には大変ありがたい好意だった」と回想しています。

鎌吉氏にはその他、いろいろとエピソードがありますが鎌吉氏がよき経営者として大成したのは、少年の頃から目的意識を持ち、人々の善意に対する報いの気持ち、即ち感謝すなわの気持ちが強かったからでしょう。こうした貴重な体験を通して鎌吉氏の人間形成ができたと思います。大城鎌吉氏は他界されましたが氏の教訓はこれからの人々に大きな教訓として生き続けることだと思えます。大城鎌吉氏のご冥福を祈ります。

(沖縄県医師会顧問)



左から宮島氏・宜保氏

オールド・パーをこよなく愛す

古 堅 哲

社会人になって私が帰郷したのが昭和三十年だった。仕事の面では松岡配電で松岡政保氏の配下になり、交遊の面での親分が上地一史さんでした。

ご両人ともすでに故人になられたが、個性のある人生観を貫き話題も豊かで、いろいろと人生学を勉強させてもらった。このご両人の話題にはよく鎌吉さんが登場して、お互いに信頼しきっている友愛の情がお話の隅々にまで滲みでていた。

その頃、私は帰郷したばかりで沖繩の事情もわからず、まだ鎌吉さんにはお会いしていなかったが、頻繁に出てくる話題の主だけに、大城鎌吉とは一体どんな人物だろうかと特に興味を持つようになっていた。そこで私は、ご両人の話題の中身を軸にして私なりに大城鎌吉像を創るべく骨組みを組むことにした。

まず浮かんだのが、義理人情に厚い人である。それを基に次々に加えたのが、正直である、苦勞人だから人も物も大切に、感が鋭い、縁起をかつぐ…等々を芯にして鎌吉像は描きあがっ

た。次は自分の想像力の採点でも確かめるように、実物との対面を楽しみに待つことにした。

その後、半年ほど経った頃、鎌吉さんが松岡社長を訪ねて来社されたが、その日は遠くから顔だけを拝見した。私の想像では顔は大きくてごつい、体はがっちり、肩肘ひじを張っている姿であったが、それは的外れて、全くやさしい紳士のお顔であった。

以後、たびたびお見えになられ、昼飯時には社員食堂で沖繩そばを召し上がられたが、私もその席に加えてもらって親しくお話を拝聴しているうちに、私が描いた人物像は間違っていないかったと自信を持つようになった。だが、面談の機会が多くなるにつれて人物像を描く骨組みの中に「謙虚な人」という大事な項目を入れるのを忘れたのに気づいた。「ミーのいれーくび折れー」の見本を見せつけられている思いでした。

さて、話題をゴルフに移す。その頃、私は上地親分に強要されてゴルフを始めていた。ちょうど砂辺のショートコースを回っていた時、私の打ったボールが越境して隣のコースのプレーヤーの足に当たってしまったらしい……という情報が入ったが（こちらからは見えないから）、私は気にもせずプレーを続けてそのまま帰った。

後日、被害者に同伴していた知人に「あんな場面ではその人を捜し求めて、ちゃんと謝るのがゴルフの最も大事なルールだよ」とたしなめられたのが、ルールを教えられた第一号であった。

早速、被害者を調べて電話でそのことを丁重に謝まり許しを求めたら、何事も無かったようにあっさり了解してもらった。その人が今の大成組社長の武勇さんだった。それも重なって、お父さんの鎌吉さんにはより親しみを感じたのを今でも覚えている。

次は、絵の話になるが、私は安谷屋正義さんの山原船の絵が好きで大事に所蔵している。

この絵は終戦直後に描かれたもので、まさにその時代の苦難な沖縄の未来を表現しているかのように、荒海に向かって船出して行く情景である。この絵は私の部屋の一番良い場所に掛けてあった。後年、私の妻が亡くなって、その一周忌に再度、鎌吉さんが私の自宅へおいでになった時だった。「古堅君！あの絵は大変良い絵だと思うが、荒海に出て行くあの情景は好きではないなあ」と言われた。やはり、今までに人生の荒波を幾度も幾度も乗り越えて来られただけに、あの言葉は心情のこもった響きがあった。

また、苦勞人だけに常に安全を願ってよく縁起をかつがれたという。特に、ご出張の時の出発や行事の日取りなどは必ず大安吉日を選ばれた。その訳は、大安吉日は長い支那の歴史の中で統計的に事故の少ない日であるということを感じきっておられたからである。

さらに健康のために嗜たぐまれたお酒はオールド・バーであった。このウイスキーのレットルにあるトーマス・パー爺さんはスコットランドに生まれ、百五十二歳まで生きた史上最年長者である。彼の初婚が八十歳で二児をもうけているが、さらに百二十二歳で再婚したと言われるほどの

精力家だったと伝わっている。

鎌吉さんは恐らく、トーマス・パアの長命にあやかってオールド・パーをこよなく愛したのでしょう。しかし、パア爺さんの長寿には及ばなかったが、鎌吉さんの美しい生涯は永く後世に語り継がれ、さらに鎌吉さんの優しかった人徳は、我ら後輩どもにとっては良き人生の道しるべの糧になるものと確信する昨今です。安らかにお休みください！

(沖電企業(株)会長)



オールド・パー

周りを心服させたお人柄

金城 幸信

私が大城鎌吉さんと血縁関係を知らされたのは戦後のことで、安謝にあった鎌吉さんのご兄弟の平太郎さんのお宅で祝いか法事が催された時の席上であった。鎌吉さんと私の父は従兄弟になるということだった。平太郎さんがおっしゃるには、鎌吉さんご兄弟の叔母が謝名城の仲家に養女にもられ、その仲家から私の本家に嫁に來られたということであった。そこで私は幼少のとき、その叔母によく謝名城に連れていかれた日のことを思い出し、血筋の関係も納得した次第であった。その日以来四十年余、私は鎌吉さんに近い親戚の後輩として薫陶を受けることになった。私が鎌吉さんに初めてお目にかかったのは終戦直後で、牧志に瓦工場を見学に行ったときのことである。

鎌吉さんのお人柄を一言でいうと“律儀の人”に尽きるところ。人をいったん信用すると、とことんまで面倒をみてくださる方であった。その思い出の一端を述べてみたい。

私も戦後はいろいろな事業にかかわり、資金繰りに困ると鎌吉さんのところへかけ込んで用立

てをお願いしたが、一度も断られたことはなかった。

ある日、借用していた四百ドル返上におじゃましたら、ご本人は出張で不在であった。仕方なく住宅へ伺って奥様にお渡ししたら、丁度そこへご長男の毅さんがゴルフから帰宅され、社員が突然行方不明になったことを知らされた。

まもなく、そこへ鎌吉さんが出張から帰宅された。そのときの表情とお言葉が忘れられない。「つまらんことをしたな」とひとこと置いてから、「でも改心して帰ってきたらまた働いてもらうよ。お金は大事ではあるが、汗で稼いだお金でなければ実にならない。だからお金というものは焼け石に水をかけるような使い方をしてはいかん。実になるように使いなさい」。

その席で私は大切なことを教わったのであった。

私が栄町で料亭を経営しているとき、親戚のよしみで大城組とその系列会社の方にはよくご利用いただき、感謝の念を新たにした。鎌吉さんはお見えになるたびに主の私を座敷に呼び出されては、「どうだ、頑張っているか?」と親しく声をかけてくださったものである。

鎌吉さんは沖繩そばと生姜しょうがセンベイが火の好物であった。

ある日、今は亡き金城賢勇さんに伴われて、沖繩復興木材株式会社の件で勢理客にあった大城組本社に鎌吉さんを訪ねたときのことである。用を済ませて辞去しようとしたところ、「ちょうど時間だし、一緒に昼飯でも食べよう」と言われ、ご相伴することになった。大社長のおっしゃ

ることだからご馳走がでるにちがいない、と期待していたら、社長室へ運び込まれたのは沖縄そばであった。そのとき鎌吉さんが、「そばは消化もいいし、私は一番のごちそうだと思う」とおっしゃっていたが、秘書からは「ウチの社長は沖縄そばが大好きなんです」と弁解ともとれる言葉を聞かされた。その後、那覇空港ターミナルにお伺いしたときも、お昼時間にさしかかると沖縄そばをご馳走になった。

また、鎌吉さんは生姜センベイも大好物で、人にもすすめておられた。復興木材の毎月一回の役員定例会議でも卓上に出されるお菓子はいつも生姜センベイと決まっていた。

鎌吉さんの「健康の一端」だったのかもしれない。

鎌吉さんには、次郎長の大政・小政を思わせるような二人の子分がいた。

大政は那覇空港ターミナル社長を努めた赤嶺保三郎氏、小政は大松組社長大城松次郎氏（故人）である。このお二人は鎌吉さんに心服し、車の両輪のごとく仕えていた。

どんな秘密事項でも鎌吉さんとは腹藏なく話し合い、また忌憚のない建言をしていた。胸襟を開きあったその会話を、離れたところからではあるが拝聴したことのある私は、まるで親子のようだ、とうらやましく思ったことである。

小政格の松次郎氏から「オヤジがいるから私の会社もあり、請負工事も順調に果たすことができるんだ。請負金が下りるまではと数千万円の大金をも融通していただいたことがある」と打ち

明けられたこともある。

鎌吉さんの晩年、危篤の報を受け、入院先の赤十字病院へ馳せ参じた。すでに病室には「面会謝絶」の札がかかげられていたが、私は婦長の立合いで特別にその病床に額かぶずくことができた。

そのとき鎌吉さんは私の手を握ったまま離そうとしない。心なしか涙ぐんでおられるとお見受けしたが、言葉をかわすことはかなわなかった。そのときが最後になろうとは・・・。

私は鎌吉さんの八十八歳の誕生日に懐中時計を頂戴したが、今でも肌身離さず持ち歩いている。その時計を見るたびに、最後に病室でお目にかかったときのことを思い浮かべている。

(沖縄海友会会長)



誕生祝いの懐中時計

鎌吉さんへの思慕

山崎 実

表題を「鎌吉さんへの思慕」とした。プライベートな思い出が多く、書きにくい主題ではあるが、鎌吉さんの人間像について、若干の見聞を述べてみたい。わがままをお許し願いたい。

(一) 鎌吉さんと父の死

私の父は、昭和六年一月下旬、今帰仁村旅行中、急逝した。脳卒中であった。

昭和四年ごろ、鎌吉さんは、高血圧の薬といって「漢方薬」を、大きな紙袋に包んで、これに父にあげてくれと行って西武門の祖父宅に持参してきた。鎌吉さんは、父の病名をそれとなく知っていたのである。

父は、この薬を煎じて飲んでいたと後日、母から聞いた。父が忽然と逝った日は、「ムーチャービィサ」の寒い日で、私が県立二中四年次の冬であった。知らせを聞いて私たちは、急ぎ辺土名に向かった。当時、自動車は大宜味の白浜が終点で、塩屋湾の渡しは、発動機を載せたオンボロの伝

馬船が往来していた。また、塩屋から辺土名間は、リヤカーと言っていた、自動車の後方に二輪の箱形をつないだ三輪車が旅行者を運んでいた。

通夜の席が、冷え冷えと更け、やや静かになった午前二時すぎ、二人の者が、あわただしく駆け込んできた。鎌吉さんと連れの方であった。仕事を終え、取るものも取りあえず風呂敷包みを抱えた姿が、あわただしさをあらわしていた。死者と対面するや、鎌吉さんは「なぜ死んだのですか」「なぜこんなに早く死んだのですか」と、号泣、大粒の涙をぬぐおうともせず泣き崩れた。冷え切った通夜の席は、鎌吉さんのこの姿につられて泣き出し、一種、異様な通夜の席となった。しばらくして、風呂敷包みの中から古びた少年の頃の着物を取り出し、これはアナタからもらった着物です、これは帯ですと、死者に取りすがり泣きじゃくるのであった。

死者と生者の別れのシーンが、これほど真に迫った情景であったことはなく、私の心に焼きついて、いまも生々しく甦よみがえる。

鎌吉さんと亡父との人間関係は、時代相の背景があつたとはいえ、鎌吉さんの誠実あふれる行動は、郷党の語り草となり、折りにふれて話題となる。「明治は遠くなりけり」という有名な言葉があるが、単なる詠嘆の言葉として片づけてはなるまい。この言葉には、明治生まれの人間の深奥に触れる思いがこもっている。その鎌吉さんも、黄泉よみの旅の人となった。時代が反転したような淋しさがある。

(二) 鎌吉さんの夢

鎌吉さんは、自分自身で船（やんばる船）をつくり、交易して一旗あげたいという願望をもっていたらしい。当時、通商、交易（ちょっと大げさな表現だが）の主役は、山原船であった。やんばるの集落の沖合いには、二、三隻の山原船が常時、停泊していた。私の祖父も、二隻の船を持っていたという。祖母の実家である辺野喜の（仲門小）の山城家も三隻の山原船を持ち、那覇大島方面と取引していた。「やんばる」からは、建築用材、竹材、薪炭類を運んでいた。

鎌吉さんは、この状況を日夜、見聞し、自分で山原船を持てば、儲かるのだという少年らしい夢が浮かぶのも、想像に難くない。

或る日、鎌吉さんが、苦しんで画いた山原船の図面を亡父に見された。事情を聞いた父は、「それは、いい考えだ。しかし鎌吉よ、船をつくるということは、おいそれとできるものではない。君はまだ若い・・」と説明し納得させたという。

後年、亡父からしばしば、鎌吉少年の日常生活の行動が、私たち兄弟の指針として示された。ひとつの実物教育であった。生きた「二宮金次郎」像として、私たちにはだぶっていたのである。逆境の中の鎌吉少年の姿が、珠玉のように、私の臉に浮かぶのである。

(三) 鎌吉さんの温情

私が、シベリアから引き揚げ帰郷したのは、一九五二年、琉球政府庁舎が工事中のころであった。那覇市役所がグラランドオリオン通りにあった頃である。沖繩戦のことは、シベリアのニュースで承知していた。引き揚げ当時の那覇の街は、あちこちに、カマボコ形の米軍兵舎や倉庫が点在し、米軍車輛の往来は、まだ戦塵の匂いを引きずっていた。

某日、在京からの又吉市長宛の書状を持って、市役所を訪ねた。そこに、ちょうど鎌吉さんが居合わせていた。アイサツもそこそこに、自宅に案内されて、昼食のご馳走になった。数日後、「君の歓迎会をするから出席するように」との招待を受けた。案内を受けた料亭に行ってみると花咲亭であった。そういえば、私が現役兵として入営の際も、花咲亭で北斗会の歓送会を受けたことがあった。当時の紅灯の花咲亭に対し、いま見るトタン屋根の花咲亭の看板が「国破れた」センチメンタルを語っているかのような風情であった。鎌吉さんの誘いで、集った同郷の面々は、新城俊英、知花親明、宮里盛助、山城松榮、平良孝八の先輩方から、仲井真常賢外数名の知友たちであった。むし暑い真夏の一夜であった。

鎌吉さんは、昔の辺土名を語り、亡父との交流を活し、折々の交情を綿々と語る so った。そして、私に言った。「実君、沖繩の人は、よく酒をのむ。酒はほどほどに、体に注意してくれ」と、子供にも諭するように、くり返し話してくれたのであった。

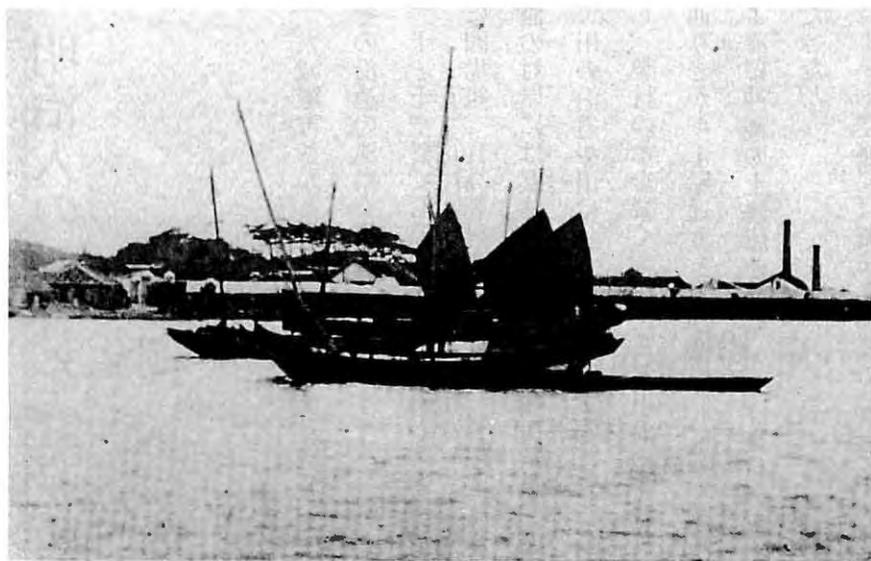
当時、アメリカカウイスキーが酒席の主流で、日本酒、ビールは少なかった。私はカウイスキーに

馴染めず、チビチビやっていたが、生来のブレイキの効かない酒徒の一人で、いつの間にか酔いつぶれてしまった。「やんぬるかな」の思いで、翌日、早速、鎌吉さん宅に出向いて、前夜の非礼を詫びたが、鎌吉さんは、うす笑いを浮かべてうなずくばかりであった。

花咲亭に同席した当夜の先輩、知友のほとんどが鬼籍の人となった。歳々年々人同じからずの淋しさが胸にしみる。自分の年令を思い、記憶をたどり、折りにふれて、真実一路を歩んだ、鎌吉さんの姿が思い出される。

“胸の奥に木枯遠く聴く夜かな”

(フリーライター)



那覇港に入る山原船

明治人の気骨を守り抜いた人

山川 岩 美

大城鎌吉さんといえば、私はすぐ自分の生い立ちとともに、戦前の大城組のあった久茂地川とその沿道の風景を重ねて思い出す。

十・十空襲で沿道の建物は地上から姿を消すが、それまでは御成橋から泊方面に向けて、右側に國場組、日高製材所、大城組、喜屋武材木店、沖縄電気会社、久高材木店、前田組、そして左側の対岸には友井醬油、わが家の山川組、金田組、大城酒屋といった事業所が軒を連ねていた。

川の沿道や川にせり出して組まれたサンの上には積み上げられた材木や薪炭が川面に影を映し、製材の木を裂く音がたえず川面に流れていた。周りの住民は、そんな両川岸一帯をセーク屋通りとかキー屋通りと呼び慣わしていた。泡盛の首里三箇（烏堀・赤田・崎山）、陶器の壺屋のように沖縄の土建屋が勢揃いし、東京で言えば深川の木場のような独特な風情に彩られた界隈だった。

十・十空襲にはじまる沖縄の戦世を生き抜いて、戦後の混乱に満ちた復興期を泳ぎ渡り、復帰

後から現在に至るまで五十年も存続発展を遂げてきた事業所といえは、国場組、大城組、久高材木店の三社を数えるだけになってしまった。今では川幅も半分以下に狭められ、周囲もリトル東京さながら、人も街もすっかり変わってしまった。

大城鎌吉さんに私をはじめでお目にかかったのは昭和十三年か十四年ごろだった。わが家が上之蔵から久茂地に移ってきてからで、同業の誼みで急速に親しさを増していった。まだ小学生だった私の目には、“色の白い品のいい優しいおじさん”との印象からはじまった。

大城家のご長男で今は亡き毅さんは、私の兄・岩助と二中で五年と一年の先輩後輩ということ、わが家に親しく出入りしておられた。まだ小学生の低学年だった私は毅さんに可愛がられ、その晩年にいたるまで長い親交をいただくことになった。

請負師だった私の父は明治二十年生まれで、大城鎌吉さんや国場幸太郎さんよりは一世代前の山原大工の出身である。那覇進出ではその先の前田朝一さん、金城平三さんに続く開拓者の一人に挙げられている（『国場組社史』）が、山原から出てきて那覇で一旗あげるようになるまでには幾多の“茨の道”を避けることはできなかったようだ。

父による大正初期の話で、金城賢勇さんの『山原大工一代記』にも出てくるが、山原大工に対する那覇や内地大工からの迫害もあって、棟梁だった父の身の危険を案じた警察が一時、朝夕の工事現場の行き帰りにサイドカーの護衛をつけてくれたこともあった。結果的には、国頭郡大工

組合を結成して集団防衛で対処することになった、という。戦後になってからも大城鎌吉さんからは父・岩次の同業仲間としての縁故で特別な愛顧を頂戴した。

戦後はじめてお目にかかったとき、「今、仕事は？」と訊かれ、「新聞記者です」と申し上げたら、「新聞記者の給料では家も造れないはずだが……？」と薄給の身を案じて下さり、「相談に乗るからいつでも来てくれ。うちの毅も一時西銘順治君と一緒に新聞記者をやったことがあるが給料もあるかないか、たいへんだったようだ」と温かい言葉をかけていただいた。

それからかなり経った復帰後、取材の目的で鎌吉さんに面会を申し込むと、「空港ターミナル社長室で会おう」というご返事を幸喜専務を通じていただいた。さっそく参上したときの第一声は、「いまでも鮮やかに耳朶じだに残っている。「やあ、よく来てくれた。君のトタン屋根の家を見てみると、お父さんに申しわけないような気もするし、幸太郎さん（当時国場組社長）や将信君（久高木材社長）とも相談して、なんとか皆で応援して家を造ってあげなければと考えていたところだったよ」。

鎌吉さんは私の訪問を、家造りの相談と感じが良かったですようで、当初は正直いってめんくらったが、「家は新しく建てました」と申し上げたら、「誰と相談した？」「すべて将信さんの段取りで」「ああよかった。いいチバイだ（よく頑張ったね）。これで後生のお父さんもご安心だな」と取材の用件は棚にあげて褒め言葉を頂戴したが、考えてみるとその日の話は新聞記者の境遇が、昔

から今にいたるまでいかに周りから不安と不信用を買っていたかを改めて思い知らされることになった。

後々その日のことを思い出しては鎌吉さんの温かい心づかいに感謝すると同時に、内心忸怩たる思いにもかられたものである。戦前の同業仲間ということだけで、その子弟にさえこのように気を配られる鎌吉さんの人情話には事欠かない。

復帰前にこの世を去った私の父はその晩年、戦後大きく事業を拡張発展させた大城鎌吉さんや国場幸太郎さんたちのことを、誇らしげによくこんな言葉で評していた。

「大城は几帳面と責任感の人で、国場は肚の人・度胸の人だ」

鎌吉さんを知る諸先輩の話に耳を傾けていると、「人の面倒見の良さは責任感の強さからだろうね」とか、「いや信仰心からだよ」といった言葉が聞かれる。

そういえば戦後、牧志の住宅のある敷地の一角に祠ほこのような御願所を設けて朝夕拜んでおられたという。そういうお人柄の回想については、私では若造に過ぎるので、然るべき先輩として久高木材社長の久高将信さんの話でしめくくることにしよう。

私の父・将正は、久茂地カーラバンタで大正初期に材木屋を開設していたので、大正末期から昭和初期にかけて大城組、国場組が近所で相次いで旗上げしたときから戦時中まで、両

社の社長とは近隣の誼よしで、ことあるごとに資金繰りのことも含めて相談に乘ったり親交を深めていた。いわば、父は先輩として大城組の旗揚げと揺籃期ようらんき、そして発展を辿たどる姿を身近なところで見守る一人となっていたのである。

戦後もまた、大城組と久高材木店は、牧志で隣組同士として、共に復興期を踏み出すという不思議な縁を重ねることになった。それも戦時中、父が購入した土地の一部（約六百坪、今の三越一帯）を鎌吉さんに、将来のために持っていた方がいいですよと薦すすめ、取得してもらったことに始まる。鎌吉さんは後に会社をいくつも設立、大扇会を組織され、その傘下会社を朝七時台には巡回に出かけておられたが、その途上わが店の前を通られるときは、誰も人影は見当たらないのに会釈のように頭を下げられる。不思議に思っつてその理由をうかがってみたら、「あんたのお父さんには恩義があつてね」と答えておられた。

また私が沖繩戦で宇土部隊に召集され、敗残の身となって山原山中を彷徨しているとき、鎌吉さんの消息を得て避難小屋に訪ねたことがある。そのとき折り目のついた和服を召されて対応して下さい、別れ際には米二升を袋につめて手渡されたうえ、道中の注意までして下さい。誰しも自分の身を守るのが精一杯だった戦乱のさなかに、なんと気くばりのいい几帳面な方だろう、という印象が私の胸中に深く刻まれることになった。

（若夏社 代表者）



現在の御成橋から見た久茂地川沿い

思い出つれづれに

福地 曠 昭

鎌吉ンケー（叔父）と私の母（ナエ）とはいとこで、お互い百二歳まで生きると口ぐせのよう
に言っていた。それが二人とも九十四歳で亡くなってしまった。

二人ともひとからうらやましがられる程、健康で、しかも九十歳過ぎても仕事を休むことがな
かった。同じ年のため、古希祝いをはじめ、八十五のお祝い、米寿のお祝いにはお互いに案内し
なかった。縁起が悪いということらしい。迷信のようだが気を使っていたのであろう。そのため
私は、親の代わりとして鎌吉さんのお祝いに呼ばれ、西銘元知事や饒波国頭村長らと上席に座ら
されたものだ。記念品としてサイン入り懐中時計は今でも大事にしている。

五年前、私の母の死を入院中のおじさんには知らせなかったようだ。ショックを与えてはと気
を使ったらしく、お見舞いも遠慮せざるを得なかった。

日本復帰のころ、父（曠一）が亡くなった時は、鎌吉さんと屋良主席が野辺送りにわざわざ喜
如嘉まで来られた。鎌吉さんに親戚を代表して会葬御礼のあいさつをして頂いた。「革新」の屋

良と「保守」の鎌吉の鉢合わせは、参列者にとってめずらしかったようである。

鎌吉さんは、謝名城のテナナスで生まれ、幼少のころから私の母とは親しかった。屋号「トー」という母の元祖と同じだったからである。

鎌吉さんは本人側の親戚が少ないせいも、よく「遊びに来ないと疎遠になるよ」と私を諭した。訪ねると昔の思い出を懐かしく語ってもらったものである。

十・十空襲後、辺土名に避難し、戦争がすんで自ら白旗をかかげて下山した。しばらく喜如嘉のイトコの屋号、前口に住んで居られた。この家で私は、親から聞かされた有名な大城組の社長をはじめ見た覚えがある。

一九四六年一月、辺土名高校男子部が辺土名に開設され、私は一年に入学した。部落入口の左側、県道に面した所に鎌吉さんの家族が住んでおられた。学校の帰りに立ち寄ってご飯をごちそうになった事もしばしばあった。奥さんの親切さに甘えたものだ。

鎌吉さんは終戦後、最初の工作隊としていち早く那覇に出た。私の父も加わっていた。牧志の瓦工場へひんぱんに父に会いに行った。まるで爆弾投下によるかのごとく、土が掘り起こされ、周囲には掘っ立て小屋が並んでいた。父は大工として長く大城組につとめていた。その頃、鎌吉さんが那覇の市議員に立候補しているポスターを見て、政治家でもあるんだなあーと思ったことがある。

近くに大宝館ができていた。私は通称「辺高」(辺土名高校)の教員の頃、球陽堂で本を買って、その足で映画館に向い無料で映画をみた。いとこの節姉が切符係だったので香川京子主演の「ひめゆり部隊」はじめいろいろな映画をみる事ができた。独立プロ、東映等、映画史に残る優秀作品はこのころできたものばかりである。

おじは政治的立場にこだわらず、親戚を大事にする人であった。山原から父や母が那覇に出てくると必ず繁多川の大城家へ遊びに行っていた。堀川おばさんらと共によく缶詰等のおみやげ品をもらって自慢していた。

貧乏で育った人だけに几帳面で有名であったが「アイムン、ナイムン」(物持ちの人であろうがなかるうがの意?)にかかわらず必ず何かをくださった。

私が親しくなったのは教職員会に入り、屋良主席が誕生した時からである。何かの会合で「自分のミークワ(甥)、福地君をよろしく」とくり返していた。屋良主席も「福地君をよろしく」と話を交わしていた。特に復帰後、私が参議院議員選挙に出馬したとき、相手が稲嶺一郎さんでありながら、激励の言葉を寄せてくださった。立場を越えた思いやりに感激したものである。本土に行くとき、空港ターミナルの会長室で出発直前まで世間話をしたことも度々あった。その席で、福地ダムの工事で十七億円の赤字を出した事や、琉海ビルの陥没で何千万円かの損害をした事を耳にした。五年がかりの沖縄最大ダム工事がおじさんの手で完成(総工事費五十億)した

ことを知り、改めておじの偉大さに頭がさがった。県民の七十%の水を供給している福地ダムの貯水量が私たちの生命をあずかっているだけに永久に残る業績である。

鎌吉さんが喜如嘉校創立百周年に多額の寄付をされたのも、おそらく生誕地というばかりでなく、喜如嘉のモトブヤーに大工見習いとして弟子入りしたことがあったからだと思う。インザ（丁稚奉公）としての身売り同然で大工技術を教わるどころか毎日が山稼ぎをさせられていたようである。

七年前、『インザ』（堀著）や「大宜味大工」の取材のために辺野喜に行った。かつて年少時代に鎌吉さんが喜如嘉から辺野喜川の側に移って住んでいた山城家を訪ねたのである。当時、鎌吉さんは実家の借金にしばられた身であり、こういった身売り同然と苦役にも屈せず、那覇に出て、沖縄の経済界を牛耳る重鎮となったのだ。私はよく教育現場で、先輩を「立志伝中の美談」として生徒に聞かせていたものだ。

復帰前、教育費折衝で上京ばかりしていたとき、有名なカマキチ瓦（セメント瓦）が東京の特許許可局に登録されているか確かめてくれとたのまれたことがある。総理府と大蔵省の中間にある同局で調べたら、名義は違うが登録されていることに間違いはなかった。

鎌吉さんのお父さんが大酒飲みで早死にされたせい、鎌吉さんは酒をあまり飲まないが、私が訪ねると酒をすすめられ、遅くまでお邪魔した。いい気になって酔うと「もう帰りなさい」と

いわれてしぶしぶ帰るのが常であった。

長男の毅さんとは私が教職員会時代よく飲んだ。六男・康秀さんの奥さんの綾子さんは辺高での教え子で、お父さんの新里善福先生は辺高の国漢の先生であった。国頭村長のころ、恩師に甘えて、辺土名にある村役場周辺で“天下太平”クビダッケーしたことが懐かしい。

私の誕生日や学位取得出版祝賀会等には必ず祝電を寄せられたり、秘書にお祝儀をたくされた。心憎い程の気くばりと、温情を身一杯受けた。誠に律儀に徹した人であった。

私の母の兄、堅次ンケーとは体つき、容貌が全く同じであるせいか親近感を覚えて甘えたのかもしれない。無駄のないおだやかな語り口がなんともわすれられない。

(助沖縄県精神保健協会会長)



米寿祝いの席 右端が福地氏

果たせなかつたお約束

中島紀久雄

大城会長——やはりこう稱よばせて戴いたきます。私如いきが、鎌吉さんとは言えませんし、大城鎌吉氏あるいは鎌吉翁では気分的に距離を感じます。多少の甘えも込めてお元気な頃に敬愛の念で稱よばせて戴いたっていた「大城会長」と申し上げることに致します。

私が大城鎌吉会長のお名前を知ったのは、RBCの前身である、アメリカ民政府管轄の琉球放送局に入社した、今から四十年前のことです。國場幸太郎國場組社長と共に、沖繩土建業界の大ビッグネームで、巷ちまたではライバルとしてお二人に注目していました。確かにライバルとして存在した時代もあったようですが、後年は共に手を取り合って沖繩復興のため汗を流されたことは衆知の通りです。両雄が心から仲良くなった、という噂うわさが巷ちまた間に流れたときは、周囲の人たちだけでなく、我々のような部外者も、なんとはなしに安堵感といますか、喜んだことを覚えています。それほどお二方はビッグな存在だった訳です。

大城会長は雲の上の方でしたので私などが直接言葉を交わすような機会は、極稀ごくまれにしかござい

ませんでした。それでもマスコミ人というだけで何度かお会いできましたし、お話をすることもでき、それは正に譬咳けいがいに接する・・・という感じで、その都度いたく感動したものです。

そんな中で大城会長との貴重な思い出を三つ披露することに致しましょう。

大城会長が八十四、五歳の頃でしたか、ゴルフの御相伴にあずかったことがあります。所は沖縄ロイヤルゴルフクラブで、国際物産主催の謝恩コンペ、私と共に国際物産の中本社長、沖縄ロイヤルの新崎理事長がお供したと記憶しています。大城会長は「トシだからカートに乗りますよ!」と、スタート前にわざわざことわりをおっしゃいました。さすがにお年のせいでティショットは、それほど飛びませんが球は真直ぐで、大城会長の実直さがそのまま出ているようにした。何番かのホールで八メートルくらいのロングパットが美事に決まったときの嬉しそうな顔は、今でも忘れられない思い出です。

もう一つの思い出はテレビの対談で、大城会長宅に伺ったときのことです。私と並んで顔にドーランを塗ってもらったら「若いお嬢さんに顔をさわって貰って、いいもんだねえ」とテレビ乍らなも嬉しそうにおっしゃいました。それから「庭を歩いてみよう」と誘ってください、お庭を拝見しました。歩きながら、当時、病床にあられた宮城仁四郎疏展会々長のことを「ボクは仁四郎さんが好きでねえ、とても心配しているんですよ」とおっしゃっていたのが印象に残っています。

また、朝は早く起きてラジオ体操をするので、出張してホテルに泊まるときには「体操のでき



米寿祝い司会をする中島氏

る部屋を」と、一寸広めの部屋を取って貰っているとのこと。「あれが唯一のぜいたくかな」ともおっしゃっていました。

お子様方は立派にリーダーとして大成され、随所で活躍しておられますが、特に会長はお孫さんの浩さんを身近に置いて直々の帝王学を教えていらっしやったようです。浩さんに伺ったお話によりますと、早く帰ると「同僚や部下はまだ会社に残っているんじゃないか？皆より先に帰っては駄目じゃないか！」そして遅く帰ると「家族を大切にしないさい。家族が家で待っていることを忘れては駄目だ！」という具合に一事が万事この調子だったようです。いかにも大城鎌吉会長らしいと微笑したものです。

大城会長には放送マンとして、どうか認めて戴いたようで晩年の八十五歳、そして米寿のお祝いの栄えある司会を仰せつかり、沖縄グランドキャッスルで大任を果たすことができました。米寿のお祝いのおときでしたか、自作の歌を披露なさいました。

なまからの我身ワタミや

肝も若々とナム ワカワカ

御万人の御恩ウマンナ ヌウシ

御返し拜ウケ ヲガま

会長の誠実さと生きる喜びが溢れていて今、口の中で呟いてみても、ほのほのとしたものが胸中に湧いて参ります。

また、当日の祝宴の前に「拍手は強要しないで欲しい」というご注文があり、わが意を得たり、という思いでした。

「カジマヤーのお祝いの時も司会をやらせて戴きます」と申し上げましたら「よろしくね！」とニコリなさいました。

大城鎌吉会長との、あの嬉しいお約束が果たせなくなったことが残念でたまりません。

(フリーアナウンサー)

おやじのような存在

宮平久米男

故会長大城鎌吉氏との出会いは、三十有余年前になります。その頃の会長は、精悍せいがんに満ち溢れて居りました。会長のお人柄は、小生が申しあげる迄もなく、実行力が特に強く、質実剛健、且かつつ温厚な方でした。

一九五七年、空港ターミナル設計の特命を受けて、身に余る光榮に浴し、数えきれない程の教訓を受けました。それ以来設計も順調に運んで参りました。幼い頃、父を亡くした小生にとって、おやじのような存在であり、親身に優る御厚情は、生涯忘れ得ぬものとなりました。又、八年前に動脈瘤で大手術をした時、御老体で御多忙の御身にも拘かからずNATCO役員の方々と共に中部病院迄、御見舞を戴き激励して下さいました。頭の下る思いで大変感激致しました。そして常に「深酒するなよ。」と注意して下さいました事等、未だいに心に残る思い出となつて居ります。最後に御冥福をお祈りし追想の辞と致します。

(宮平建築設計事務所所長)



送別会の席にてたばこをもっているのが宮平氏

高邁なる仁徳を偲んで

比嘉嘉壽改

謹んで故大城鎌吉大親分の生前の偉業をたたえ、在りし日の故人の高邁なる仁徳を偲びつつ小生の思い出を語りたいと思います。

昭和十五年の秋、大城毅君（故人で鎌吉様の御長男）が旧県立一中から旧県立三中へ轉校され、宮城久隆先生（故人で旧県立三中の国語の先生）の宅に下宿して居りました。当時三中の應援団長をして居た私とは大変奇妙な切掛けから仲の良い友達となりました。

或る日の夕暮れ、私が名護の大通りをぶらついて居りますと、アナタ橋の方から私に對面して近づいて来る二人の紳士に出会いました。一人の方は私の宮城久隆先生で他の一人の方は和服姿をされた見知らぬ紳士でした。私は立ち止まって先生に挨拶をして立ち去ろうとしましたら、久隆先生から呼び止められ、和服の紳士に紹介して下さいました。「この少年は比嘉と云う生徒で毅君とはとても仲の良い友達です」「こちらの方は毅君のお父さん」と紹介が終ると、和服の紳士は「毅の父です。二人とも仲良く一生懸命勉強しなさいよ」とやさしく励まされて立ち去りま

した。これが、私の大城鎌吉様との初めての出会いです。とても端然とした優しい親爺だとの印象を受けました。

私は昭和二十一年十月沖繩へ復員して参りました。山河変り果てた山原の故郷で雑然とした不安定な心境に居る時の或る日、大城毅君が遙々泡瀬から訪ねて来られました。二人とも抱き合つて生き永らえたことを喜び合いました。早速その日のうちに彼が隊長を勤める泡瀬工作隊の軍作業に就労するようになり、その日の晩、毅君の運轉する米軍用車に乗つて那覇で沖繩製瓦工場の社長をして居られた大城鎌吉様御一家を表敬訪問し、大城鎌吉様始め御家族の皆様方に歓待されて、しばらく大城鎌吉様の沖繩戦での体験苦勞談を拝聴させて戴きました。お話し最後に「私は三名の息子を沖繩戦で失いましたが、幸いにも生き永らえることの出来たお互はこれから沖繩の復興の為に力を合わせて頑張りましょう」と語られた姿が大変印象に残りました。

昭和二十四年、戦後初めて沖繩の建設業者に米軍工事請け負いの入札参加が認められるようになりました。当時の請け負い入札は材料は總て軍支給、輸送はGMCトラック無償貸与という條件で勞務提供型の入札でありました。工事入札物件は与儀燃料タンク地帯の安全柵の構築でした。入札に参加したのは当時米軍作業に関係して居た大城組、国場組、金田組、宮里安光さんの四業者でしたが開札の結果、大城組が落札し契約の運びとなりました。契約の当日、私は鎌吉様の鞆持ちをしてお供致しましたが当時は公的輸送機関は全く無く、拾い車をするには永い時間

の辛抱を要しました。幸い安里三差路で鎌吉さんの知人のGMC（軍用トラック）に便乗びんじようさせて戴いたき、ようやく契約時間に間に合わすことが出来ました。鎌吉さんの鞆の中にはいつも古い小さな算盤が入って居てそれを取り出してパチパチ計算されて居る様子を外人達は珍しそうに眺めて居りました。その小さな古い算盤も古い手提げ鞆も戦前から愛用されて居るものだと承うけたまわり、物を大事にされる心に私は深い感銘を覚えました。また、契約書の署名欄にはローマ字で「カマキチ、オーシロ」と筆記体で明瞭にサインされて居られたことも忘れ難い私の思い出です。交通事情が極めて不便だった当時だけに、長男の毅君が友人の二世の住宅を建築してその請け負いだ金の代りに乗用車を貰い、これを鎌吉さんに上げましたら大変喜んで居りました。

話しは前後しますが、泡瀬工作隊の軍作業を辞めてからは私は鎌吉さんの土地、現沖繩三越の所在地に掘立て小屋を造って移り住み、毅君が米国へ留学するようになりましたので私が大城組の支配人に任命されました。当時、仲座久雄先生（故人、仲座設計事務所所長）の設計による琉球銀行壺屋支店の工事を施工しましたが落成祝いの宴で当時の支店長が「こんな廣とくわい處で柱が一本もないが屋根のコンクリートが落ちて来るようなことはないでしょうね」と笑い乍ら尋ねて居られました。これに対し仲座先生は「若わし落ちて来たたら大城組の責任ですよ」と冗談で応えて居りましたが、すかさず鎌吉さんが言いました。「たとえ天が落ちて来るようなことがあってもこのコンクリートの屋根が落ちて来ることはありませんよ、仲座さんの設計だもの」と仲座さ

んを持ち上げておられました。

丁度その頃私の長女は肝臓病を煩^{わづら}い通院の毎日でしたが鎌吉さんは度々御見舞に來られ、亡くなった時、鎌吉さんは車で私達親娘三名を山原の久志迄送って戴^{いた}き手厚く葬^{いた}つて下さいました。本当にその時の有難さは私の脳裏に深く刻みこまれて居ります。

企業経営に対する鎌吉様の態度は非常に厳格なものでした。毎朝出勤時の八時迄には事務所にお見えになられて、仕事の執行ぶりを点検指導されて居られました。出勤時間に五分でも十分でも遅れようものなら、それこそその場でひどく叱られ注意をされたものです。私などは大酒飲みで度々呼びつけられて注意をされた事を良く覚えて居ります。鎌吉様はとても自制心の強い方で召し上がる御酒の量はいつも決まって居るとの定評でした。私達凡人にはとても真似の出来ない、すばらしい強い精神力の持ち主であり義理と人情に厚い偉大なる方でありました。その偉大なる業績と潔白にして高邁なる人徳は末永く後世に語り継がれることでしょう。茲^{こゝ}に三周忌を迎えるに当り謹んで小生の思い出を語り、大親分故大城鎌吉様の極楽浄土の御冥福をお祈り申し上げます。

(旭東建設社長)

かみしめた「鎌吉翁哲学」

大城 正 大

私が初めて鎌吉翁とお会いしたのは、今から十四年前の昭和五十五年の一月でした。

当時琉球銀行空港ターミナル支店勤務の国頭村奥間出身の玉城さんの紹介で、新年の年頭の挨拶を兼ねて那覇空港ターミナルの大扇会会長室でお会いしたのが鎌吉翁との最初の出会いでした。玉城さんから紹介されて、鎌吉翁は、即座に貴方はどこの部落出身かと聞かれ、謝敷部落ですと答えると、それでは大城平六郎さんを知っているかと尋ねられたので、即座に、私の祖父ですと答えると、鎌吉翁は表情を変えられ、私の祖父平六郎についてお話をされました。

鎌吉翁が、尋常小学校三年生まで出て、家が貧しかったために丁稚奉公に出され、その後、国頭村役場の給仕に臨時採用され、祖父には大変可愛がられた事など詳細にお話をして下さいました。鎌吉翁が、貴方の祖父は今でも一番尊敬している郷土の大先輩の一人として忘れていないと語った事が、つい先日のように思われます。

また、その時、謝敷部落の田子盛とは親戚に当たり、私とも親戚である事を知らされ、これま

で天上人と思っていた鎌吉翁に自分の祖父のような近親感を覚えました。それ以後は、自分の子や孫のように私を可愛がって下さり、機会のあるごとに会長室に呼ばれたり、私が訪問したりと家族ぐるみで鎌吉翁を訪れるようなお付き合いになりました。

鎌吉翁とは、自分の祖父同様ごく自然にお話しをすることができるようになり、私にとって、気楽な交際が始まりました。

鎌吉翁は、私の家族を大変大事にして下さり、毎月一度は必ず浦添市勢理客の大城組本社の会長室に呼ばれて、朝八時から九時までの一時間程度、子供達のこと、ありし日の私の祖父の話や鎌吉翁の体験談や人生論等について、いつも優しくお話をしてくださいました。子供達もごく自然に昔の鎌吉翁の話の聞いたり、いろいろ尋ねたりしていました。

また、鎌吉翁は、私にたいしても我が子同様に気遣い、私の将来を大層気になさり、週に一度は秘書の平敷さんを通じて、大城組の会長室に招いては、人生観を論じてくださいました。そうした鎌吉翁の人生哲学は、「鎌吉哲学」として私の脳裏に深く克明に記憶され、その教えを大事に守りながら職務に専念しております。

私は、鎌吉翁の「経営哲学」を大いなる成果として学校経営に活用する事により、日々実感としてかみしめています。

鎌吉翁は、私を常に心に留めて下さり、鎌吉翁主催の大扇会幹部だけの会で「十二月二十日の

誕生会」と八月中旬の「マンガ賞味会」に毎年招待されるなど、本当に忘れることのない一生の思い出として、人生に大きな礎となっています。

私の家族にとっても鎌吉翁との結びつきは大きく、たとえば、アメリカンホートサービス社、古雅堂印章工業、ヨナシロ家具等から鎌吉翁の親戚であるということ、で割り引き価格にしても良かったり、子供達がびっくりするような感動を経験するなど鎌吉翁の偉大さをひしひしと感じています。

鎌吉翁が、おそらく生前最後のゴルフに行かれるという時の朝八時頃、私の家族が大城組の会長室を訪問した際に家族と一緒に撮った写真があります。これは私の家宝として、パネル版に拡大し応接間に飾ってあります。その写真を他の人が見るとは、鎌吉翁の親族であることへの尊敬の念を寄せてくれるのです。

このようにして、私は、鎌吉翁との十二年間のご交誼を通じて、数知れない人生哲学の教えを授けられた一人として、大きな誇りと名譽心を持って職責を全うすることができていると確信しています。

これまで鎌吉翁から学んだ事柄と鎌吉翁の業績等記憶をたどり紹介します。

鎌吉翁は弱冠二十三歳で大城組を設立され、沖縄県庁からの最初の大きな公共工事であったと思いますが、それが地域四村から反対されたことに対しても、地域の人々が反対する趣旨を理解

され、工事を中止し、それに投入した資財等の損害賠償を求めなかったという寛大なる処置をとられたことは「嵐山事件」として歴史に残っています。

また、沖繩の建築にマッチした瓦を開発しましたが、その新案特許申請を他人が名義申請しても何の異義申し立てもされなかった事や、沖繩の木材建築の技術向上をと、常に先見の明での物事への対処の仕方、物事を決断する場合の「即座に対応」する決断の速さ、自分で決断した事柄に対して躊躇しない気質、工事等の失敗や人間関係では絶対に人を中傷しないなど、いろいろな「人間哲学」を訪問するたびに教え聞かされた事が、つい先日のような思いが致します。私の一生の師として、良き祖父として、心に深くとめ、鎌吉翁の教訓を座右の銘としてこれからの人生を過ごしていくことを決意しています。

鎌吉翁、本当に有難うございました。心から翁のご冥福をお祈り申し上げます。

(大平養護学校校長)

“巨星墜つ”を実感

嘉数 栄吉

私が大城鎌吉氏を知ったのは、第二次大戦真っ盛りの小学校時代でありました。とは言ってもただお名前を知っていただけのことです。鎌吉氏の八男英紀君と同期だったこともあり、また、氏は当時から教育には大変熱心で、父兄会には必ず出席され、学校へも高額の寄付をしておられたので（これは私の父の話による）、氏の名前は学校ではよく知られていた様に思います。聞くとところによると、鎌吉氏は幼少の頃貧しいが故に学校にも行けず、不遇の時代を過ごされたとの事。氏としては御子息達には是非十分な教育を、と考えられたのは当然の事だと思えます。また、御自分はその悔しさをバネに大工の棟梁から身を起し、戦前旧美栄橋町に大城組を創設、信用第一をモットーに仕事に専念され、今日の大城組の基礎を築かれたのであります。

あの頃の美栄橋町界限は大変騒々しく電気会社の発電機の音、大城組、國場組、久高木材の製材の音等で、今でいう騒音公害の元祖みたいな所でした。久茂地川沿いにあった二階建ての会社兼住宅には二、三度御邪魔したことがありましたが、鎌吉氏の御顔を拝見したことはついぞあり

ませんでした。会社の前にはいつもダイハツの三輪車（パター・パター）が止まっていて、当時としては三輪車といえども自家用車は大変珍しく川沿いを通る時はいつも興味深く眺めていたものです。

それから今でも語り草になっている事の一つは、戦時中私の住む牧志（現在の三越前）に広大な土地を購入され、迷路のような防空壕を作られたことでした。空襲の時には大勢の人の避難に役立ち、大いに感謝されたことと思います。戦争が終わるといち早くその場所に瓦工場を創設され、戦後の復興に多大な貢献をされたことは皆様の記憶に新しいところであります。今にして思えば、先見の明があったというか、幸運というか、大成される方はやはり並の人間とは違うということを痛感しました。その後その場所は大宝館から大越、三越となり、沖縄の一等地として現在に至っております。また、牧志が戦後那覇の中心として発展し現在も繁栄の一途を辿^{たど}っているのは、鎌吉氏の力によるところが大きいのではないのでしょうか。

私が鎌吉氏に初めてお会いしたのは戦後のことであります。ハロー帽がとてもよく似合っていて、ハンサムで立派な体格の方というのが第一印象でした。戦後のこととて、衣料品も貧しく皆がブカブカのアメリカ服を着て街を歩いていた時代に、いつもパリッとした軍服や背広を着ておられたのが強く印象に残って居ります。沖縄の復興も順調に進み、教育も新制度が導入され、私達も新制高校を受験することになりました。英紀君と一緒に受験勉強をする^{ため}に、牧志の住宅に度々

お邪魔するようになり、鎌吉氏から初めて言葉をかけて頂いた時には、大変緊張していたことを憶えております。何しろすでに実業界の重鎮としてその名を知られ、私にとつては雲の上のような存在でありましたから、尚更なほさらであります。英紀君と一緒に医者いしやの道を志して大学に進学してからも休みの度ごとにお宅に出入りするようになり、当時としては珍しい冷房の効いた応接間で一日中過ごすこともしばしばでした。そうこうしているうちに、長男・毅、六男・康秀、七男・武男の三兄とも親しくさせて頂くようになり、今でもよき先輩として御指導を賜っていることに大変感激して居ります。そんな兄弟達がよく言っておられたことは、

「君達はいよいよな医者になって……。たまには親父から笑顔もやさしい言葉もあるのだろう。僕達にはただの一度だつてないんだよ」。

確かに仕事に厳しく、御自分にも厳しい分、御家族にもそうであったのかもしれない。ただ私には酒、煙草は慎むよという注意はありましたが、全体としていつもやさしく、温かい言葉をかけて頂いた記憶しかありません。いつだったか、鎌吉氏が社用で上京された折、築地の旅館に呼ばれ、老舗の寿司を御馳走になったことがありました。驚いたことに、ネタの大きかったこと、おいしかったこと。貧乏学生でろくな物を食べていなかった私にはあの味は今でも忘れられません。経済的に成功を収めた鎌吉氏ですが、日常生活は質素でつましいものでした。健康管理にも大いに注意を払われ、規則正しい生活を送っておられました。朝は五時に起床、ラジオ

体操の後、散歩、入浴、朝食、そして朝七時半には出社。朝食は軽く麺類。又、夕食も定時にとられ、七時のニュースを見ながら奥様と談笑、入浴、日記を書いて午後九時就寝、という毎日、余程の事がない限りきちつと守られていたようです。お酒は少々、煙草はやらず、食生活にも十分留意、私達も出来る限りの注意を払っておりましたので、日頃は何の不安もなく過ごして居られたようです。

ある時、私が「会長は今の調子なら百歳位までは大丈夫ですよ」と申し上げたことがあります。普通の人なら大いに喜んで「有難う」というところですが、少し不満そうな顔をしておられました。世界一の長寿者・泉重千代氏が百二十歳まで元気で、テレビや新聞で騒がれている時でしたので、きつと御自分もその位は生きたいと願っておられたからではないでしょうか。それからは私も「会長は百二十歳位まで十分頑張れると思います」と申し上げることにしました。その時の嬉しそうな顔は今でも忘れることはできません。いつまでも長生きしてほしいかったです、全く予期せぬ病で九十五歳で亡くなりました。「巨星墜つ」という言葉がよく使われますが、鎌吉氏の場合、まさしくその通りで残念でなりません。世の中広しといえども、私の知る限りにおいてあの方程立派な人を見ることがありません。私生活に於いて一点の曇りもなく、人格高潔で人望があり、人間的にも魅力のある方でした。「あなたの尊敬する人は？」と聞かれて、大抵の人はすぐには答えられないと思います。しかし私の場合、即座に「大城鎌吉氏」と答えること

が出来ます。申すまでもなく、世の中には立派な仕事をされた方、地位の高い方、経済的に成功した方等偉い人は大勢いると思います。しかし尊敬に値するかどうかは別の問題であります。鎌吉氏は老若男女を問わず、またいかなる地位の人でも分け隔てなく接し、誰の言葉にも真剣に耳を傾け、決して見下したりすることはありませんでした。また、はじめて会った人の名前や顔を憶えるという気配りをわすれませんでした。

毎年暮れの十二月二十日には鎌吉氏の誕生日の宴がグランドキャッスルで催されてきました。私の家内もたまたま誕生日が同じということで何度か招待をうけたことがございましたが、大扇会の幹部の方達の中に、毎回余り見なれない方々がありました。戦前の棟梁時代の仲間であるということを知り、さすが鎌吉氏だと感服したものです。また、八十五歳の生年祝いも二つの大宴会場で催されましたが、戦後の瓦工場時代の従業員を大勢招待されました。私の従兄もその一人でしたが、「私達のような者までよく忘れずに招待下さるなんて・・・」と大感激しておりました。そのような話は枚挙にいとまがない程です。

その時、友人代表として献盃の大役を仰せつかり、感激で足が震えていましたが、金の盃のずつしりした重みは今でも忘れられません。

話は前後してしまいましたが、幼い頃から仲が良く、いつも一緒に行動していた英紀君と私に對し、鎌吉氏は「君達は兄弟以上に仲がいいね。将来一緒に仕事をするときとうまくいくと思

うよ」とおっしゃって下さいました。

後に二人で医院を開業する為、御相談に伺いました所、大変によろこばれて「安謝の土地は君達がいい様に使いなさい」と快く土地を提供して下さいました。お陰様で安謝医院を共同で開業することが出来ました。二十九年前のことでございます。誠に有り難く感謝に堪えません。その御恩の万分の一も御返しできないうちに御他界され、本当に残念でなりません。今となつてはただ御冥福をお祈りし、大城家の益々の御発展を願うばかりです。

(安謝医院・医師)



マンゴ賞味会 嘉数氏

第三章

企業人として学んだもの

企業経営に確固たる信念

田場典正

大城鎌吉さんに初めてお会いしたのは、確か私が琉球銀行の貸付課長をしていた頃だった。もう四十年以上も前のことだ。

当時、大城組は今の沖縄三越のところにあつた。具体的な内容は、もう忘れてしまったが、何か新しい事業を始めたい。ついては融資をお願いしたいとのことだったので、私は出かけていった。通常、あれだけの方であれば、そういう相談は担当の部長さんがやりそうなものだが、鎌吉さんは、例えば什器のひとつひとつの細かいところまでご自分で計算してみせた。

また、現役の時、毎日系列会社を視て廻ることも有名だった。それで、おそらく他の方もそうだったのかも知れないが、お会いした時には、次はどこそこだろうから、その時間を頂こうなどというようなことをよくやった。

私は、だいたい十一時頃、空港ターミナル会社でお目にかかった。そしてお昼時間になると近くの食堂からそばを取り寄せて、「このそばは沖縄一だよ」とおっしゃりながらご馳走してくだ

さったりした。

当然のことながら、企業経営や社会活動に確固たる信念をお持ちで、大扇会の会長に就かれてからは、グループ各社の経営権はそれぞれの社長さんに任せて、ご自身は大所高所からみて居られた。優れた経営者としての風格、度量とでも言おうか、とにかく抱擁力の大きな方で、私など経済界の一人として尊敬の念を禁じ得なかった。また、商工会議所活動もよくご一緒にやらせて頂いた。私の記憶では会議などへの出席率も群を抜いていた。

沖繩が今日あるのは、鎌吉さんのような先輩があつたればこそということの後世の人も決して忘れることはないだろう。

貧しい環境にあつて、苦労しながら大扇会という県内でも有数の企業グループを築き上げた立志伝中の人でありながら、そういうことを微塵も感じさせない方でもあつた。

いつも穏やかで、温かみがあつて、そしてダンディーだったあのお姿が今も偲ばれてならない。心よりご冥福をお祈り致します。

(那覇商工会議所会頭)

中琉協会で見たお人柄

有村 喬

大城鎌吉さんといえば、國場幸太郎さんと双璧を成し、沖縄の戦後復興の時代から復帰後の地域産業の振興開発に多大なご功績のあった方で、長く沖縄産業界の重鎮として不動の地位を築きご活躍された方であったと、強く印象に残っています。明治時代生まれ特有の、若かりし頃から艱難辛苦を物ともせず乗り越え、自らを鍛えぬいた人のみが持つ、骨太で風格のある立派な生涯を全うされました。

経済界の大先輩である鎌吉さんに初めてお目にかかったのは、今を去る四十年以上も前、異民族支配下の多難な時代でしたが戦後復興もようやく緒についた一九五〇年代の琉球商工会議所時代です。私とはおよそ三十歳も年が離れている大先輩でありましたので、個人的なお付き合いは残念乍らなかつたわけですが、商工会議所や他の公的活動の場で、度々接する機会がありました。当時の氏の朴訥で飾らないお人柄が懐かしく偲ばれます。自然流、郷土を愛し郷土に誇りを持つ土着性、物事をやり遂げる強い責任感、忍耐強さ、温厚、実直、誠実、謙虚さ、経営者としての

先見性、決断と実行力等、多くの徳性を備え後進の範とすべきそのお姿は生涯変わらなかつたように思います。

一九七二年日本との国交が断絶した台湾に対する琉球側交流窓口として、大きな役割を果たした中琉協会（歴史的に一衣帯水の関係にある隣国中華民国との、貿易促進や中琉文化経済交流発展を意図して、昭和四十年に沖繩経済人有志で結成）の活動においても、また商工会議所活動においても、日頃は多言を弄せず寡黙な方でありましたが、ここぞという時にはちゃんとリーダーシップを取られ、正式な国交なき台湾との交流促進の架け橋となりました。蒋介石総統への表敬ミッションに氏と同行させていただいたことも、今は良い思い出となっています。

公的接触を通じて感じましたことは、鎌吉さんが決してしゃべることなく、実に細やかな後輩に対する思いやりのある方であり、約束はきちんと守り、己に厳しく他には温情のある敬愛すべき先輩であったなあということです。十数年前、蒋介石総統命日参列の目的で訪台中の折、旅行社の手違いにより、鎌吉氏と私は台北市街の炎天下を三十分以上徒歩でホテルに戻るはめになりました。その時大先輩の鎌吉さん、他人のミスに対する文句、愚痴一つ零さずに後輩の私にばかりと一言「すまん、じゃ行くか」と声をかけられ、ご高齢にもかかわらず何事もなかつたように歩き出しました。氏の傍らにいて私は、大人の貫禄がこんなところにも自然流に垣間見えるものだなあと感心したこともあります。

大城鎌吉さんを始め、國場幸太郎さん、中琉文化経済協会初代理事長方治先生、我々と親しくしていた先輩方が皆故人となりましたが、彼等の残した業績は中華民国と琉球、ひいては国交断絶後の日本と台湾との人々の心の交流と安らぎの場を作った民間大使といっても決して過言ではない方々ばかりです。中琉の深い絆を大事にされた故方治先生のご遺志により、恩納村に建立された方治先生の墓所には、琉球の友として大城鎌吉、國場幸太郎、稲嶺一郎、國場幸昌、竹内和三郎、尚詮、山里永吉、仲田睦男、宮城仁四郎、西銘順治、増茂昌夫、有村喬、十二名の名前が刻まれており、貴重な歴史の証明として長く後世に伝えられることでしょう。

鎌吉さんは自らの事業においても偉大な足跡を残し、携わった事業全てに盤石の基盤を築かれました。その洞察力に甚だ感服する次第です。

今は亡き氏のご冥福を心からお祈り致します。

(有村産業株式会社 代表取締役会長)



恩納村に建立された方治先生の墓所

深い友情と責任感

呉屋 秀信

私が大城会長にお目にかかったのは一九四九年で、西原町で鉄工所を開業して二年目頃のことと記憶している。

当時は学校建築が盛んに行なわれており、建築用資材としてアンカーボルト、締め付けボルト等の需要が多くあり、私の工場もその製作に日夜追われて休む暇もないくらいであった。

その頃大城組さんの事務所は現在のデパート三越の所にあり、木造二階建ての当時としては立派な事務所を構えていた。

私はボルト類の販売のため飛び込みで大城会長に初めてお目にかかり、サンプルを出してご説明申し上げた。そうすると、遠い西原からよく来たねと言われ、製品を手にして検査をされ、見事な製品だと言われた。そして、これからどんどん買うから納品しなさい、とかなりの注文を頂き感激した。もちろん意気揚揚自転車のペダルも軽く西原に帰った。

大城会長のご芳情とお人柄に心服の念を深めたのが出会いの初印象で、以来、公私共にご指導

を仰ぐようになった。

ところで、多くの思い出の中で大城会長の印象が深く心に残っているのは、中城村在の沖繩成田山の建立の歴史である。

この計画は戦後の荒廃した世情の中で、特に人心の荒廃を立直すのが県発展の原点であるという考えから、県民の心の拠点となる沖繩成田山の建立を、沖繩タイムス社長の上地一史さんと大城会長のお二人が中心になられて進めた。

一九七一年（昭和四十六年）十一月十八日、ハーバービュークラブで成田山福泉寺奉賛会が結成された。ところが一九七四年（昭和四十九年）九月八日、上地一史社長がイタリア沖の海上で飛行機事故のため亡くなられた。大惨事が突発したときの大城会長の悲痛落胆は例えようがなかった。盟友を失った悲しみと、沖繩成田山建立に付き纏う不安などで日夜悩まれたことに違いない。

上地さんの四十九日の法事が終えた頃、奉賛会の理事会が大城会長の元で開かれた。大城会長はその席で、上地一史社長の事故の報告をされ、成田山建立の事業は是非実現して故人のご冥福を祈りたいので、理事会各位の特段のご協力をお願いしたい、と目に涙を浮かべて話しておられた。私自身、この時、大城会長の友情の深さに目頭を熱くしたのが昨日のこのように思い出される。そして、一時中断していた工事はやがて新体制で再開されたのである。

当時の陣容を記しておくことも決して無駄ではないと思い、ここに残しておく。

沖繩成田山奉賛会・会長に大城会長、副会長に佐辺良夫さん、財務部長に又吉康栄さん、信徒部長に比嘉松栄さん、総務部長に金城栄秀さん、建設部長に不肖呉屋、事務局長に野村健さんがそれぞれ選出された。

ところが県経済界からご志納は予定通りには集まらず、大城会長は大変ご苦労された。やがて理事会が開かれ、二億一千万円余りの工事金の捻出が議題として提案された。席上、大城会長が、私が二千万円を出すから役員の皆様にもご協力を得たいと話された。しかし、役員一同の懸命の努力にもかかわらず海洋博後の県経済は沈滞しており、思い通りの志納は集まらない。ところが、工事は順調に進んでおり、支払いは待ったなしの状況にあった。役員会が開かれるたびに暗い話題ばかりで、どうなることかと皆心配をした。ようやく一億円余りを会長はじめ役員、そして財界からのご協力で集めることができた。それでもあと一億円余りの資金の目処がたらず崖淵にたされた。その時、大城会長は、自分が個人保証で銀行から借入をしたいと提案され、役員の下承をえられた。その時、大城会長の腹の中では全額負担を決意されたと思うと、明治生まれの責任の強さに心打たれた。おかげで無事落慶式ができたのである。

沖繩成田山は予想以上の出来栄えで見事に建立されたのであるが、その裏には中城村の地主組合組合長安里盛重氏はじめ、二十七名の方々のご協力も忘れてはならない。敷地六千坪の賃貸契

約が行なわれた。また、大城会長に心底から心服しておられた事務局長の野村健氏のご活躍も忘れてはならない。大城会長と野村事務局長のコンビが人々の心を動かし、今日の成田山の発展につながったと思う。

地主会の方々も野村事務局長も、そして、その他多くの方々も、大城会長を心から信頼していたからこそ協力を惜しまなかったし、大城会長に寄せられた信頼が、困難な事業であった沖縄成田山の建立を実現したのである。

大城会長は、落慶式のご挨拶の中で、これで上地一史社長の夢を実現することができ肩の荷が降りた、と話しておられた。友情を大切になさる責任感の深さにただ頭が下がる思いがしたのである。

大城鎌吉会長にはもっと長生きされ、県経済界と私ども後輩のご指導をして頂きたかった。これは私ひとりではなく、大城会長に接した総ての人々の共通の思いであろう。大城会長、どうか安らかにお休みください。

(金秀グループ会長)

御遺徳を偲ぶ

知花成昇

光陰矢の如しと申しますが、(社) 沖縄県建設業協会顧問大城鎌吉様がお亡くなりになられてから、はや一年余りの月日が流れ、時のたつのが早いのに驚くばかりです。

この度『大城鎌吉追想集』の発刊に当たり、追想の拙文を寄せさせて戴きましたことに対し、生前特別な御交誼を賜わった者の一人として、衷心ちゆうしんから感謝申し上げます。

故大城鎌吉顧問は、(株)大城組社長会長、大扇会会長、(社) 沖縄県建設業協会会長・顧問として戦前戦後の長年にわたり、御活躍されました。特に戦後の荒廃した産業界、経済界の復興発展に尽くされ大きな功績を残されました。

本県の経済界、建設業界の重鎮として仰がれ、そのご逝去は本県経済界の大きな損失として惜しまれて九十四歳の天寿を全うされました。私は、三十年の永きに亘りわた、建設業協会の組織の下で、常に親身のご指導激励を戴き、数々の教訓を賜わり、生涯大きな感化を受けました。

大城鎌吉顧問は、誠実一路、温和で几帳面きちょうめんなお方でした。協会の諸々の行事にも文字どおり

万障繰り合せて御出席され、常に本音の議論をなさいました、総会後の建設懇親会等、晩の集いにも欠席されるときは、必ずご丁寧な電報を以て祝詞を送られ、会員を激励され、会員は勿論、来賓の皆様からも感謝敬服されました。

大城鎌吉顧問は、二十三歳の時、那覇市において大城組を設立、以来七十年に亘り、建設関連事業をはじめ、数多くの企業を創立経営に当られ、特に建設業経営の困難さを人一倍に実体験され、卓越した識見と経営手腕を磨かれ、努力を重ねられ、県内有数の企業集団大扇会の今日を築かれました。本県の経済界、建設業界をご指導され、その高潔円満なご人格は広く深く企業人、経済人から尊敬された偉大なお方でした。

戦前、昭和十四年に新案特許のS型鎌吉瓦を考案され、県下広く使用された事は有名であります。戦時中の昭和十九年の頃、国家総動員法に基づく企業統合、物資統制令に従って、県下十七社の請負業を合併し、「沖縄土木建築工業株式会社」を設立し社長に就任。軍の監督の下で、仲泊や与那原等の軍事物資陸揚場や壕の構築に奔走、大変な苦勞をされたお話、終戦後まもなく米軍の要請をうけて、那覇復帰一号の先遣隊として牧志に瓦製作工場を建て、いち早く戦後復興に貢献されたお話など、数々の尊い体験談を拝聴し、感銘、感動したあの頃の元気なお姿が脳裡に蘇よみがえって参ります。

昭和二十四年五月、各地区の工作隊が解散されたのを機に、宮里安光氏、金城田助氏、國場幸

太郎氏、山城思太郎氏、金城賢勇氏、大城秀二氏等と図り、戦後の建設業者の団体「沖繩土木建築請負組合」を設立、更に昭和二十七年四月、琉球政府の創設に伴い、工務交通局が設置され、公共工事が一段と増加してきたので、時代の情勢に対応できるように請負業組合を「琉球土木建築請負業協会」として発展改組し、宮古、八重山を含め、沖繩本島の北部、中部、南部に協会支部を設置、名実ともに全琉球組織の建設業協会を設立、初代協会長に大城鎌吉様が推挙され就任、その会長時代に、大城龍太郎氏の設計、金城組（金城田助氏）が施工して、コンクリート造り三階建ての土建ビルを新築されました。当時としては目をみはる堂々たる殿堂でした。現在の安里三差路、市外線下りバス停留所の伊集洋服店ビルが当時の土建ビルで、懐かしい建物として現存しています。

協会長時代には、会員のため、資材の共同購入や米軍工事への進出、請負制度の推進、会員の協調融和など会員企業の経営の健全化に配慮され、厳しい時代の建設業界をリードしてこられました。

沖繩の祖国復帰直前の昭和四十六年九月、西村建設大臣、坂野建設技監（元自治大臣、現参議院議員）等の沖繩視察団を、建設中の福地ダム工事現場に迎えられ、社長自ら陣頭に立って案内説明しておられた元気なお姿が思い出されます。

福地ダムは、復帰前の昭和四十五年に起工し昭和五十年まで五カ年にわたる超大型プロジェクト

トで、総工費約五十億円を越え、最初は米国陸軍工兵隊（D E）が発注し、途中復帰によって日本政府に引き継がれ、施工中に石油ショックを受け、資材費その他建設諸費が急高騰し、工事完成まで、大城組にとって大変厳しい時代であった事、その難関を克服、進んで来られた当時を偲び、その偉大さに経済界、建設業界は深く敬服させられました。

昭和四十九年の建設業協会二十五周年記念の建設座談会の席で、大城顧問がああ優しい瞳、温和で明るい笑顔でお話された事を私は今でもはつきりと覚えています。その一つは「世の中には数多くの産業があるが、建設業ほど経営が難しい仕事はない。建設業を成功させ得る人なら、他に何をさせても、大丈夫と太鼓判がおせる」。

二つには、「建設業者過当競争、赤字覚悟の受注はしてはならない。業界は譲り合い、相互に助け合い、共存共栄の精神が大切だ。そのために建設業協会の指導責任は大きい」。

三つは、「信頼は建設業者にとって最大の財産である」という趣旨のお話をされ、協会会員を教え、導びいて下さいました。

ここに大城鎌吉顧問の著書『回想八十五年』の中の一節を転載させていただきます。

「人間が世の中に出て成功するための条件というか要諦は、まず、健康、次に勉強、そして努力と信用であり、さらには計算したことに對する実行力であると思う。一般論的な言い方かも知れないが、逆境にある時は自分だけが苦しいのではなく、よその人もそうであることをまず念頭

に置き、この要件が備わるよう絶えず前向きに努力することである」と論とされておられます。私は建設業協会主催の「新規入職者研修会」にこの事を引用させていただいています。大城鎌吉顧問は、自らこの事を実践され、立派な後継者を数多くお育てになりました。

最近のいわゆるゼネコン汚職、業界の談合摘発など忌わしい事件等が発生し、建設業界は世論の批判の対象となり、厳しい時代を迎えております。しかし、私はこのような時にこそ、大城鎌吉顧問のご生前の教訓を想起し、建設業界は力を合わせて、この苦難を克服し、速やかな秩序回復に奮起一番、頑張り、大城鎌吉顧問のご遺志に報いる様に努力しなければならぬと決意を新たにしています。拙筆びつご容赦ようしや下さい。有難うございました。

(社)沖建協相設役



沖縄県建設業協会の総会にて右が知花氏

部下に対する見事な御薫陶

石 黒 茂 松

あの姿勢を正しく訥訥と語る元気な頃のお姿を今はうかがう事は出来ない。

私が初めて鎌吉会長に御目にかかる事が出来たのは、復帰直前の福地ダム建設の頃であった。大型ロックフィルダムで米軍により建設が始まった工事で、大城組が受注し施行中であつたのが復帰を機に米軍管理から日本政府に移管された最初の大型ダムであり、本土側でその指揮をとられた初代開発庁沖繩総合事務局次長野島虎治さんの紹介であり、南部国道初代所長の千葉さんも一緒だった。

復帰と共に、沖縄電力株式会社の初代社長とられた松岡政保（元琉球政府行政主席）さんから仕事上大変懇切な御指導を受ける様になった時、松岡社長が私に申された一言「石黒君、大城鎌吉さんは非常に実直で然も真面目で嘘をいわない極めて信頼出来る人であるから良くお付き合ひをして仕事の励みとする様に」と御話し下さつた事は、未だに私の耳に強く残つて居り生涯忘れる事はない。

斯くして沖繩電力さんの仕事を通じ、大城組の絶大な協力により、国道58号六万ボルトOF地中線管路、宮城線海中並路六万ボルトOF地中線工事、豊見城、六万ボルト二回線架空工事等々を無事完成する事が出来た。

またこれが縁で、ナイジェリア通信工事に役務提供の御願いをした私の懇請に対し、M・S・C・Eの世界の土木界で通じるタイトルを持つ、細川副会長をリーダーとする百数十人の作業部隊を巡遣して下さり、赤道直下の酷暑の地、木麻黄（クマノエ）の木やハイビスカスなど沖繩と同じ花と緑が目をなごますとはいえ、ハマターンの下、大変な頑張りで工期を全うし工事を成功に導いて下さった事は、全て日頃の会長の部下に対する御薫陶（ゴクンタウ）の賜物と深く感謝に堪えない。

こうした御付き合ひのある日、栄亭の夕食に招かれ御馳走になった、食事半ばで突然、琉歌を一曲と、声は低いがサビのある声で一ふし歌われた。鎌吉会長の歌を聞いた方は、大城組の人達でも極めてまれであると伺い感激したものである。

グランドキャッスル建設当時の事であったが、日本航空の松尾社長（マツオ）の招きで上京した際、習志野カントリークラブでゴルフを楽しまれ、その時のパートナーに尾崎将司プロが一緒にお供したとの事、沖繩でも多数のゴルフを楽しまれる方が多いと思いますが、尾崎プロとラウンドした人は恐らくいいのではないかと思う。私も両三度ゴルフの御供をした事があるが、力強いボールを飛ばしておられた。さすがに九十歳に近く、カートを使われる事が多かったが、ダイキンの第

一回女子プロ、オーキッドのプロ、アマの競技に出場した時は、小林法子プロがパートナーで、鎌吉会長にどうぞ、リプレイスして打つ様にとすすめたが、ノータッチのプレーでリプレイスは出来ない、最後まで、あるがままのボールを打たれた事は誠に御見事と云わざるを得ない。想い出はつきないが、グラントキャッスルの住友のパーティーで、電力の松岡政保社長、総合事務局の野島虎治さん達と欲談されていたのが昨日の様に思われる。

今頃は、松岡さん、野島さんと、我々の今の沖縄における様々な動きを天国で眺め乍らしつかりやれよと励ましておられる事と思われる。

(住友電気工業株式会社参与)



ゴルフを楽しむ石黒氏と大城



福地ダム建設現場

点から線へ、線から面へ

松井 裕

昭和四十一年八月下旬のある朝、私は(株)沖縄電子計算センター(現OCC)設立の暁には社長をお願いすることになっていた故上地一史沖縄タイムス社長(当時)の意を受けて、那覇港運の会長室ではなかったかと思うが、故大城謙吉会長にOCCへの出資のお願いのためお目に掛かっていました。沖縄で初めてのコンピュータサービスの事業、そしてやがてこの沖縄にも訪れるであろう社会について、当時三十四歳の若造であった私のつたない説明に熱心に耳を傾けて頂いた時から会長から親しくご指導を頂くようになった。会長は上地さんの会社におけるお立場などについてちょっとお尋ねになられた後、一言「判りました。しっかりがんばってください」とおっしゃって下さった。それから間もなく大扇会各社の名義で合計五千ドルが株式振込金として振り込まれた。来る日も来る日も足を棒のようにして飛び回り、出資のお願いのため実に多くの経営者の方々にお目にかかったが、会長は私にとっては今なお忘れることのできない素晴らしい対応をして頂いた方のお一人であった。

創立当時の事務所は今、パレットくもじの出現によって影も形もなくなってしまった赤十字病院の隣にあった旭堂ビルの四階に置いていた。事務室の一角に設けた六畳ほどの小さな部屋で役員会をしばしば開催したが、九名の役員全員が揃うと狭くて隣と膝がくっついてしまう窮屈な所だった。会長は非常にご多忙なお体にも関わらず、いつもきちんと開会の十分ほど前においでになり、ただ一人の常勤役員であった若い私に何かとお話くださったものだった。銀行借入れ、コンピュータの輸入などについてご審議頂いたが、始めのうちは、会議が終わると会長はそつと私に「上地社長に恥をかかせることがないようにしっかりとお願いしますよ。」と声をかけられてからお帰りになっておられた。今にして思えば、十五万ドルという資本金の二倍もの大金をヤマト出身の若造に任せておいて大丈夫なのだろうかときっと心配されておられたのだろう。でもそれから一二年もすると会長なりの厳しいご評価の基準をクリヤーしたのか、和やかな眼差しで眼鏡越しに私をご覧になり「資料がとても良くできていますね」とおっしゃって頂けるようになった。会社が軌道に乗り始めてからは、非常勤の方々に猛烈にお忙しい方々が多かったこともあって、余り大きな声では言えないが、役員会は総会の前にお集まり願ひ、バタバタとご承認を頂くことも多かった。役員会では私が議案のご説明を申し上げて、そして会長のコメントを待つという形で行なわれていた。会長はじつと資料に目を通してから「立派な決算です。こんな時期にご苦勞様です」とおっしゃる。これで取締役会は幕。時にはその後、皆で幕の内弁当等を囲んで

ユンタクをして閉会というのがいつの間にか慣例になっていたようだ。

そもそも、私が初めて会長にお目にかかったのは昭和三十六年頃だったと思う。当時私は米空軍において従業員教育に従事していたが、ときどき経営者協会等の依頼を受けて民間でも社員教育のお手伝いをしていた。当時はもちろん復帰前。県内では「企業内教育」という言葉はまったく耳新しく、銀行や一部の大手企業が導入し始めたばかり。こんな折りに大越百貨店にある時招かれ、店員のサービス訓練をお手伝いしたことがあった。当時大越の社長をされていた方が鎌吉会長。そんなご縁で会長にご挨拶をさせて頂いたことがあった。もちろん一介の講師による儀礼的な表敬のご挨拶であったので、会長は覚えておられる筈がないと思っていたが、後日、その旨をお話申し上げたらちゃんと思いついて頂いたので非常に驚かされた記憶がある。そのときにはまさか、後日こんな形で会長のご薫陶を仰ぐことになるとは想像もしなかったが、でも会長に親しくご指導を仰ぐようになったのはあくまでもOCCの役員をお願いしてからであった。役員や株主総会。また印鑑を頂戴しに伺ったり、お目にかかる機会が増えれば増えるほど、会長のお人柄、そして暖かい大きな包容力とでもいうのだろうか。会長のとてつもない偉大さに心を打たれること多く、会長への尊敬の念も次第に深まっていった。

晩年の鎌吉会長は、よく「最近はその忘れが多いし、昔のこともよく覚えていないが・・・」とおっしゃることもあったが、どうしてどうしてそれはまったくお言葉だけ。家内が竹富の生まれ

ということもあって何かの拍子に八重山の話などになると、黒島の小学校を建てた時にはこうだった。竹富はあであった・・・などと次から次へと微に入り細に入り色々お話しして下さって、会長ご自身のお言葉とは裏腹にその記憶力の確かさには本当にいつも驚かされることばかりであった。

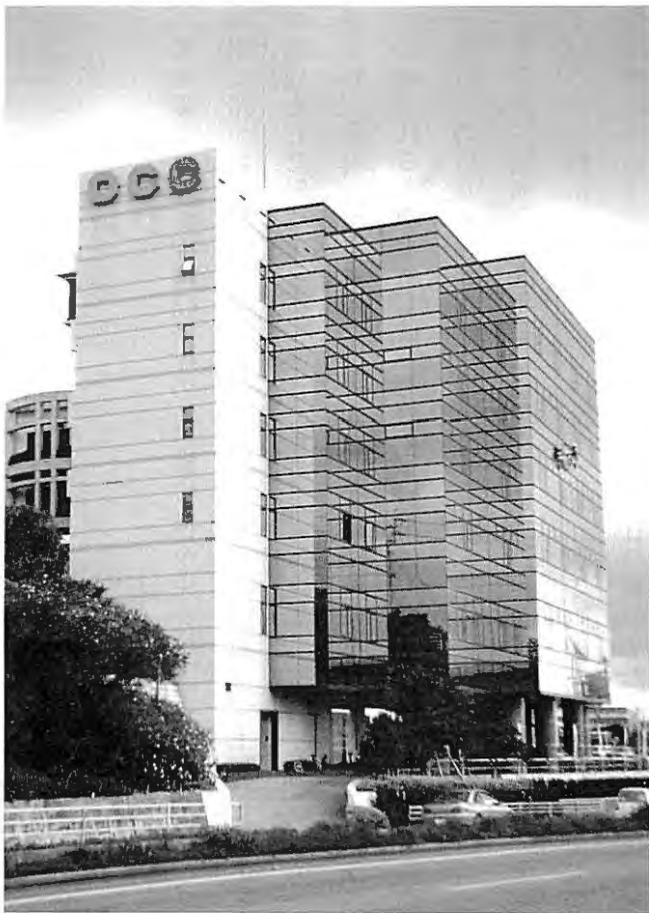
昭和六十一年十月、沖縄グランドキャッスルで西銘知事（当時）を始めとする県内外のお客様をお招きして当社の創立二十周年謝恩式典を開催した時「光と音とのページェント」と題してレーザー光線とコンピュータを使い、お客様にお楽しみ頂くアトラクションを企画したが、問題は暗闇の中、「銀河鉄道」「炎のランナー」の音楽をボリウムをアップしレーザー光線を首里の間一杯に走らせるものであったため、ご年配のお客様の中にはご気分の悪くなる方も出るのではと・・・多少不安もあったが、幸い何事もなくお客様には大変お楽しみ頂いたことがあった。この式典では、ご自分がご高齢であったにも関わらず、主催者側役員の一員としてお客様と和やかにご挨拶を交わされておられたこと。また問題の「音と光」の十七分間を含み、始めから終わりまでずっとお立ち頂いたことなど、今でもその元気なお姿が浮かんでくる。非常に責任感のお強い方であった。どちらかと言えば当社は、会長のご関係になられた多くの会社の中では後発であり、またある意味では遠縁とでも言える存在ではあったが会長には本当に一生懸命ご指導頂いたものだと思う。

平成四年十一月末、大城組さんをお願いしていた当社の新本社ビルがお陰様で無事竣工した。建設中会長にはお加減が優れず、直接ごらん頂けなかったが、ビルの建設の進捗状況については地鎮祭が終わった、上棟式が無事終わったなどと、会長のご気分が良い時を見はからってご報告申し上げて頂きたいと、大城武男社長をお願い申し上げたことなどを今でもよく思い出す。

私どもの会社がここまで伸びてこられたのは、多くの人々に敬愛された会長の優れた先見性、深い洞察力のたまものであると思わずにはいられない。換言すれば、会長の先見性、深い洞察力の中に芽生えた一粒のコンピュータの種が、点から線へ、そして今、面へと大きくはばたきはじめたのだ。

大城謙吉会長はわが沖縄にとって実にかけてがえのない偉大な存在であった。私自身が漸く六十路を歩み始め、今なお惑うこと多き今日この頃、親しく警咳に接したいいつも心から願う方のお一人である。

（株式会社OCC代表取締役会長）



OCC本社ビル

沖繩の「松下幸之助翁」

金城秀徹

大城鎌吉さんが沖繩経済界の重鎮じゅうちんであることは、昭和三十一年に私が琉球新報かけ出し記者の頃に知った。取材で何回かお会いしたときの印象は、土建業界の実力者というより、大和人の風貌ふうぼうをした銀行マンか、商社の重役といった感じを受けた。語調も一言一言かみしめるように話され、余計な前置きのない表現は、実に明確に取材している者に伝っていた。企業経営のトップにおられる方のお話しは、そのまま記事にもなり、絵にもなるもんだと痛感してから、もう四十年近くの歳月が経った。

その後、昭和三十九年に私は現在の琉球港運社に転職し、そこで大城会長に直接、企業経営のイロハをご教示頂くことになった。新米記者の頃から尊敬していた大経営者からじかに会社操作の妙味についてご指導受けたことは、今日の私の企業経営に大きな役割を果たしている。

大城会長が謹厳実直なお人柄であることは申すまでもないが、反面、私みたいに親子程の年の違う者とも、くだけた世間話をなんのためらいもなく、お話ししていたご様子が忘れがたい。琉

球港湾社の初代会長の平敷慶久氏とは、昵懇じつこんの間柄で役員会での余談で、お二人のお話しは録音にでも取っておきたい位の奇智とユーモアに富んだ内容で、私たち後輩への貴重な人生メッセーヂだった。私は大城さん、平敷さんという立派な人格者によって「企業と人生の営み方」をご指導頂いて、どうにか還暦は無事過ごすことができたが、お二人のような明治人の気骨というか、包容力とでもいうか、あのしたたかな生きざまは、昭和生まれの私には、とうてい真似のできないものがある。その一例をご紹介します。

昭和四十年の初め頃、私はお二人のお供をして（カバン持ちで）よく台湾旅行をした。当時、男が台湾への旅をする目的は色街を徘徊ほろまわするのも楽しみの一つだった。「遊びの心を知らぬ者には、会社経営はまかされない」ということもお二人の持論だった。北投べいとうの繁華街をぶらつき、お目当ての館ゑんに入ってあれこれと綺麗どころの品定めをしていた最中に全く予期せぬことが起きた。玄関先で大勢の人が中国語でなにやら話し合っているかと気づくや、いきなり私たちがいる部屋に五、六名の者が入ってきて、なにやら取調べをしようという様子。私はなんのことか理解に苦しんでいたが、平敷さんが「これは臨検だ」と言われた。そこに居合わせた客一人一人に名前と住所の聞き取りを始めた。その時、台湾官憲への大城、平敷ひらご両人のおたがいの紹介の仕方を聞いて、私はふき出してしまった。

「この方は、沖縄の松下幸之助と言われている方です。多くの有名会社の最高経営者で人格者

です。」と大城さんのことを平敷さんが申し述べると、大城さんも平敷さんのことを「この方は明治生まれの人で東京の早稲田大学を卒業した学者経営者です。決して悪事をする人ではない・・・」云々とすらすらと台湾官憲に対し、見事な陳述ちんじつをされた。勿論もちろん、中国語の達者な通訳を通じてである。その時、通訳をした方は頼文宗さんといって、私は今日でもいいおつき合いをしている。その名陳述のせいかどうかは、はっきりしないがとにかく、大城、平敷の両大御所は無罪放免むじはうめんとなつてホテルに帰された。私や他の方はその場から台北警察(?)へ連行されることになつた。お二人が、その場を去るときに平敷会長が私に言われたことは「錢(ジン)ノ、ネーレエ。錢(ジン)ムタンアレー、女(イナグ)コイヤナランクト直(シグ)、婦(ケエ)サリーサ。ヌーン、シワーネンサ。(お金をこちらによこしなさい。お金をもっていなければすぐに帰してもらえらるから心配するな)」と言われたので、持っていた金子きんずを全部、平敷会長へそつと手渡した。

お二人の高いご識見に基づく企業経営の手腕は、常日頃から尊敬していたが、旅先での全く予期せぬ出来事に遭遇しても、少しも慌あわてず、臨機応変りんきおうへんに言葉の通じない人たちをも、上手に説得されたお二人の力量には、ただただ敬服するのみであつた。

お二人が、もつとお元気でいてほしかったと願うのは私だけではあるまい。

(琉球港運(株)社長)



趣味の銃をみがく

大宝証券創業のご苦労

金城弘征

当社には二人の創業者がいる。大城鎌吉氏と波平仁吉氏である。この二人の、偶然ともいえる出会いがなければ、現在の大宝証券は存在しなかったかも知れない。

那覇の街のあちこちに、まだ硝煙が立ちこめていた一九四五年十一月、米軍の命を受けた鎌吉氏は、北部の疎開先で復興先遣隊せんけんたいを編成、那覇へ向った。先遣隊員は瓦工、れんが工、大工に限定され、家族さえ同行を許されなかった。この復興先遣隊の噂を聞いた波平氏は、那覇へ行きたい一念に駆られて直接、面識のない鎌吉氏に掛け合いに行くのである。その熱意にほだされて鎌吉氏は、税務畑の経験しかない波平氏を偽装れんが工に仕立てあげ、隊にもぐりこませてくれた。これが二人の最初の出会いだった。鎌吉氏のところの深さを偲ばせるようなエピソードである。その後、二人は異なった道を歩みながらも親交を重ね、十数年後に地場証券会社の設立をめぐつて再び手を組むことになる。

一九五七年、琉球立法院による証券取引法の制定を契機に、県内に地場証券会社を興こす機運

が出てきた。日本本土ではそのころ、戦後の第一期証券ブームが起きており、株式や投資信託が急速に庶民レベルにまで浸透しだしていた。また沖縄でも、一九五八年九月、ドル通貨への切り替えを契機に对外取引が自由化され、住民の目がいつせいに外へ向けられた時代だった。証券会社を興こす内外の条件がようやく熟成してきた時期であったと言えよう。

当時、大衆金融公庫副総裁の要職にあった波平氏も、証券業務の将来性に関心を寄せる数少ない先駆者の一人だった。証券会社設立を思い立った氏が、まっ先に相談に行つたのがほかならぬ鎌吉氏のもどだったのである。鎌吉氏は、資本と人材の面で波平氏の計画をバックアップした。かくして、大宝証券の設立発起人や株式引受人には、鎌吉氏ゆかりの人脈がずらりと名前を連ねることになった。

初代会長、大城鎌吉氏、社長、波平仁吉氏の布陣で一九六一年十一月、無事スタートを切つた大宝証券だったが、その後、本土復帰までの道のりは、まさに苦難の連続だった。当時はまだドル優位の時代であり、沖縄でドルから日本円に切替えて对外投资をするには、絶えず心理的な抵抗がつきまとつた。加えて、本土との通信手段の不便さ、本土株式市場に関する情報の不足、地場証券会社自体の社会的認知度の低さなどが重なって、沖縄の証券人口の開拓は遅々として進まなかつたのである。創業期の十年ばかり、当社はいつ閉業してもおかしくない綱渡りの経営を余儀なくされていたと言える。そのような逆風にじつと耐えてこれたのは、一に二にも鎌吉氏のふ

ところの深さと大扇会グループの大きな支えがあったからにはかならない。

本土復帰に際し、大蔵省免許を取得するため、経営体制の抜本的刷新が要求されたときも、鎌吉氏は柔軟に時流への理解を示し、琉球銀行と勸角証券の経営参加を歓迎された。創業者が示したこの機敏な対応がなければ、現在の大宝証券は存在しえなかったのである。沖繩にはいま、二つの地場証券会社があつて、全国二百数十社の業界の中で、それぞれ中堅的位置づけを得て奮闘している。それを見るにつけても、創業者たちのご苦勞の重みに思いを至さざるをえない。

鎌吉氏は病に臥される直前まで当社の役員会に、まめに出席された。人生のあらゆる辛酸をなめ尽くし、一代で偉大な事業を成し遂げた人とは思えない柔和な笑顔で私たち後輩と接して下さった。「晩年は頑固でわがままだった」と言われるお年寄りが多い中で、鎌吉氏は最後まで大らかさや奥行ききの深さを失わなかった数少ない人ではなかっただろうか。「皆さんのやり易いようにやって下さいよ。私はもう年寄りですから」と言うのが役員会での氏の口ぐせだった。健康の秘訣をお聞きすると、後輩にさすように懇々と、早起き体操の功徳を説かれていた。

身近かに鎌吉氏と接するにつれ、私は松下幸之助翁のイメージとダブらせて氏を見るようになっていた。ほっそりとした、一見、頼りなげな体軀の内に秘められた高い志、観音菩薩のような柔和な顔立ち、そこはかとなく漂う人徳の香気、明治が生んだ二つのキャラクターの間に私はそのような共通点を見たのである。

(大宝証券社長)



大宝証券本社

常に県民全体のため心を砕く

川田 潤

莊嚴な鐘の音がいつまでも余韻を残すように、故大城鎌吉会長の風韻は、いまなお私の胸の内に響いています。私が会長に初めてお目にかかったのは今から丁度四十年前も前の一九五四年（昭和二十九年）頃でした。

蔡温橋際にあつた沖繩貿易(株)の二階で、当時社長をされていた平田忠義氏と会長、それに宮島健次氏にお会いしたのが最初でした。その頃の私は、外人商社バークレーの一介の営業セールスマンに過ぎませんでしたので、当時の私の上司スタン・フィールドも一緒でした。話は貿易のことでしたが、その時は会長の端正な目鼻立ちと血色のよい豊かな頬、それにとっても几帳面なお人だという印象が深かったように覚えています。会長とスタン・フィールドとのこの出会いは、やがて会長がお作りになられた、多くの関連事業の一角を形造るまでになりました。

それはとも角、会長とスタン・フィールドとはハンティングでもとてもウマが合いました。スタン・フィールドは元軍人（中佐）で射撃はお手のものでしたが、会長もかなりハンティングは

好きのようで、腕前は相当のものでした。会長は暇を見つけては運転手を仕立て、弁当ご持参でスタン・フィールドと私をハンティングに誘って下さいました。お陰さまで私達は沖縄本島の南部・北部の山野を隈なく鳥撃ちに駆け巡ったものです。いま想えば余暇を心底十二分に楽しんだ。ピクニックみたいなもので、私にとりましては古き良き時代の懐かしい思い出です。

その後、故具志堅宗精氏、故宮島健次氏や故高良一氏、それに故平田忠義氏の皆さんとご一緒に、旧琉球ホテルで屢々会長にお会いし、時の経つのも忘れて会長のお話しに耳を傾けたこともありましたがこれも今は懐かしい思い出で、私は終生忘れることはありません。

そんな多くの思い出の中でいちばん私の印象に残っていますことは、米軍基地内のクラブでの出来ごとです。私は幾度となく会長を米軍クラブにご案内してご一緒にお食事をいたしました。が、会長が行く先々の米軍クラブでクラブのマネージャーに、「多くの県民を雇って頂き大変有難うございます」と丁寧なお礼を申していたことです。ご自分のことのみで専念されるのではなくて、常に高い次元で県民全体の利益のために心を砕いておられた会長の面目躍如たるものを垣間見る思いでした。

常に誠実一路で、嘘かくしのないまっ直ぐな会長は、人間誠意を尽くせば何事もなるとの信念をお持ちになり、またそれを実際に貫き通された正に言行一致のお人でした。幼い頃の多くの艱難が会長を珠玉のような風格と強靱な意志の持ち主に磨き上げ、また利を見ては義を思い、どん

な逆境にあつても決して悲観されない巨星のようなお人に育て上げたのでございましょう。膝下しつかに多くの優れた人材を集め、文字通り北辰その処に居て衆星これを巡る、との文言を地で行かれた会長を失いましたことは、いま更ながら悔やんでも悔み足りないものがございます。

筆舌に尽くし難き多くの薫陶を授けて下さいました会長は、いまなお私達の心琴を弾ませて止みません。ここに改めまして会長のご冥福を心からお祈り申し上げる次第でございます。

(クラウン商事株式会社 代表取締役)



左端が川田氏

大城鎌吉さんへ

波、千、佐、美

大城鎌吉さんと私との出会いは、遠く昭和二十年（一九四五年）に遡る。当時、大城鎌吉さんは辺土名に、私は隣字の奥間に疎開していた。たまたま大城鎌吉さんが米軍の国頭地区隊長の特別許可を受けて、沖縄の戦後復興の魁として那覇に先遣隊を組織して行かれるのことに聞いていたので、是非、私も隊員に加えて頂きたいとお願ひした。米軍隊長からの隊組織の許可条件が瓦工と煉瓦工と大工に限られているということであったが、瓦工として隊員名簿に登録して頂いた。大工として組み込まれた中には、現沖縄三越社長の大城康彦さんと大城組社長の大城武男さんが居たが、当時は何れも十四、五歳の紅顔の美少年であった。

辺土名を出発したときには、確か十四、五名だったのが、途中の大宜味村や羽地村あたりから続々と大工や瓦工の方々が馳せ参じて、那覇に到着したときには三十三名に膨れ上がった。先遣隊の居所は牧志（今の三越あたり一帯）に限定されていて、そこから一步でも外に出ると越境ということ、空地に鉄線を張り巡らした留置場（？）に放り込まれるという厳重な監視の下で、

常時、MPがジープで巡回していた。先遣隊の仕事は、まず、衣服や食糧料品の調達であるが、幸いにして今のショッピングセンターから壺屋小学校にかけて米軍の広大な地域に衣料・食糧の倉庫群があり、英語の達者な知花親明さん（知花ブロック初代社長）が交渉係となって多数の衣料・食糧を買い受けることができた。

それから後はお決まりの戦果という言葉で、毎晩のように米軍倉庫から若い隊員が運びだしたものである。鉄砲を構えて巡視している兵隊は見てみぬ振りで黙認していたようである。大城隊長も誠実温厚な性格からしてしきりに大丈夫か、大丈夫かと、はらはらしながら眺めて居られたが、隊員を養って行くための必要悪とでも思っけて割り切っけて居られたものと推察される。

さて、肝心の建設事業であるが、瓦と煉瓦は戦前の窓を修理して一応、作業はできたが、建築関係の方は肝心の資材がなく、大城隊長自ら知花親明さんとともに米軍駐屯地に出掛けて資材の調達に走り廻る毎日であった。

そうこうしているうちに、当時石川の東恩納にあった沖繩諮詢会（沖繩民政府の前身）の前上門司法部長と松田副部長が大城隊長に面会に見えた。その時、事務所に居た私を見付けて、大城隊長に人手不足で困っているので波平を司法部にくれるようにとの申し出を大城隊長も納得された。そこで大城鎌吉さんとは仕事上は離れたが、私的には住まいが近くだったこともあって交流は続いていた。

ここで特に記しておきたいことは、大城鎌吉さんを隊長とする先遣隊の牧志駐留によって徐々に住民が疎開先から入域を許されて帰ってきたが、当時の住居は牧志と壺屋に限られていたので、止むなく従来は低地で水浸しの箇所も多かった今の平和通り周辺にまで住まなければならず、雨が降ると水浸しとなり、店の商品が台無しになることも再三であった。この一帯が戦後那覇の中心地になることは思いも及ばぬことであったが、前述のような牧志と壺屋以外は立ち入り禁止であったのと、戦後復興を願う大城鎌吉さんがその拠点に定めたからであり、那覇市復興の発祥の地として、その基礎を築かれた功績は、実に大であり、後世に語り継がれることと思う。今一つ付け加えておきたいのは、先遣隊として来た人々からは隊長だとか、社長などとは呼ばれない。オヤジ、オヤジと呼ばれ慕われていた。それほど気取らず、誰とでも気安く話し合える温もりのある親しみやすい性格の人であった。

現在でも、大城鎌吉さんをはじめ物故された先遣隊の皆様を偲び、五十年と云う歳月を振り返りながら、毎年十一月には先遣隊として来た日を記念して「那覇草分会」という名の会合を持って

いる。

先遣隊以来、お別れしてから二十数年が経って大室証券設立と云うことで、再度、繋がりを持つことになったのである。証券事業という分野は当時（一九六一年）の沖縄の経済、財政、金融のどの分野から見ても時期早々の感があり、加えて沖縄の人々の株に対する認識の希薄さからし



豊かな自然の山原

でも未だの感じであり、草創期の苦難を味わった。それでも大城鎌吉さんの誠意ある励ましと温情を受けながら、何とか後進に引き継ぐことが出来た。

どうか大城鎌吉さんには、九十有余年のお疲れを解して、安らかにお休み下さい。謹んで合掌。

(元大宝証券社長)

J T A (南西航空) の生みの親

大城 判

私が大城会長を存じあげるきっかけとなったのは、今から四十余年前に遡る。当時、沖縄は米
国軍政府の統治下であり、確かシーツ少将が直接の最高責任者として色々な改革を断行していた
時代であった。その中で人材育成にも非常に力をいれていた。その一環として米国ガリオア援助
資金による米国留学制度の創設があった。私はたまたまそれに受験し合格したので沖縄から初の
米国留学生として一九四九年米国オハイオ州のウイルミントン大学で勉強した。翌一九五〇年沖
縄から二人目の留学生が同大学へ入学したが、その人が大城会長のご長男毅氏であった。私は一
九五〇年朝鮮戦争が勃発したので学業半ばにして同大学を離れ帰沖したが、毅氏とわずか一年足
らずの期間ではあったが、寮生活をしながら共に沖縄の将来を語り楽しく過ごした日々が懐かし
く思い出される。父君に当たる会長については、大城組の総帥として又沖縄経済界の重鎮として
活躍中である事を毅氏から耳にしていた関係で、米留から帰沖したらいずれご指導を仰ぎお世話
になりたいと強く胸に秘めるようになっていた。

帰沖後数年たって、米民政府肝入りで那覇空港内に純民間国際空港ターミナルを建設する事となり、沖縄経済界のお歴々が発起人として名を連ねたが、その空港ビル会社は設立後まもなく解散の憂き日にあった。私は当時琉球政府立法院で勤務していたが事業の性格上米民政府との折衝が多く、私も本職のかたわら英語人としてお手伝いする機会もあったので、会社解散返す返すも残念で沖縄のために空港ターミナルビル会社の再建が是非とも必要だと思い、大城鎌吉氏にお会いして尽力方を懇願した。

旧空港ビル会社が設立後間もなく解散に追い込まれた数年後に再度空港ビル会社の設立の話が持ち上がり、その関係会社の設立計画は慎重にすめられ、当時の米民政府から絶大な信望のあった大城鎌吉氏を中心として経営陣の布陣がなされた事は当然であった。大城鎌吉氏が社長となり渡嘉敷真睦氏、宮城仁四郎氏、新垣碧也氏、平田忠義氏、仲村清栄氏、竹内和三郎氏等そうそうたる沖縄経済界の方々が役員となり再建会社がスタートした。私も事の成り行き上専務として新会社の経営に参加させて頂く事になった。設立直後解散した前者の轍を踏まない様に米民政府は関係先^{よすが}則ち那覇航空隊米軍基地との折衝を活発に展開し、空港ビルの建設場所の選定、米軍基地からの電気水道の供給、民間航空機駐機場の設定等、時間はかかったが着実に民間国際空港ビル建設に向けて基本的な懸案事項^{けんあん}が次々と解決されていった。同ビルの建設に必要な資金も復興金融公庫と銀行からの協調融資を仰がねばならなかったが、これらの融資は米民政府の決裁

が必要であり、空港ビルの機能が全て米軍基地と密接な関係があり、米琉両政府の絶対的な信望を得ていた大城鎌吉氏の存在を今更ながら強く感じた事であった。空港ビルの建設用地は那覇空軍基地に隣接した干潟を米民政府の許可の下に空港ビル会社が埋め立て、社有地として登録が許され、その上に空港ビルが建設されたわけで、社有地に民間国際空港ビルが建設され米軍基地から電気・水道の供給を受け、然も民間航空機駐機場も空港ビル会社の管理下におかれた例は恐らく前代未聞であつたろう。

大城鎌吉氏を社長とする那覇空港ターミナル株式会社は米民政府の承認の下、琉球政府当間重剛行政主席の許可により、国際空港ターミナル事業を運営することになったのである。

空港ターミナルビル事業は航空会社及び関連企業が航空旅客、貨物を取り扱うのに必要な施設を建設し提供し若しくは便宜を供給するいわゆる貸室業が主体で、一部物品販売業を行なう事になっていった。大城鎌吉会長が手懸けた構想は、まず営業収入を伸ばして採算性を高めて行くためには貸室料だけにたよるのでなくビル会社直営による物品販売を実施する。それも物品税の高率課税になっている品目について免税販売することに着目し、空港ビル内の旅客出発ゲートの制限区域内に保税地域を設定し、その中で免税販売店を設置し洋酒、外国製たばこに限ってしかも通過客に限定して販売するという画期的な試みであつた。

当時琉球税関長であつた城間榮保さんや琉球政府の内政局長であつた山内康司さんらの並々な

らぬご尽力により沖縄で初めて、否日本でもめずらしい免税販売店が那覇空港ターミナル内に設置された。対象客はその後出發客にまで通用され、ターミナルビル運営上欠く事の出来ない主たる収入源になった。その免税販売制度はやがて沖縄の本土復帰後の戻し税制度への展開のきつかけとなつていった。

次に大城鎌吉社長の業績として特筆したいのは沖縄における航空事業の育成、発展である。空港ビル会社が供用開始されたのは一九五九年（昭和三十四年）であるが、その前年に琉球航空運輸株式会社（儀間光裕氏）が設立されCAT航空からDC3型機1機をチャーターベースで那覇―先島間の運航に乗り出したが、うまく行かず赤字幅が増大し会社の存続も危ぶまれる状態に追い込まれた。

この窮状を見るに見かねて米民政府運輸課長のクック氏（Mr. James M. Cook）が琉球政府外関係者と相談の上、大城鎌吉氏が社長であった那覇空港ターミナルビル株式会社との合併によつてしか琉球航空運輸（株）の救済、^{すなわ}即ち、沖縄における航空事業の再建は出来ないだろうという結論に達し、米琉両政府による大城鎌吉社長への異例の勧告がなされ、それに基づき那覇空港ターミナル社に琉球航空運輸（株）が吸収合併されたのは一九六一年（昭和三十六年）であった。以後那覇空港ターミナル（株）が琉球航空の名前で先島航空便をチャーターベースで運航継続する事になったのである。大城鎌吉氏が清廉潔白な方で事業を起す場合非常に慎重に事を運び

一旦引き受けた以上は何が何でも成功に導く人という事は、沖縄経済界ではすでに常識となっていた。

当時、大城鎌吉氏を頂点とする大扇会のメンバー会社は各社共順調に事業が運営され、堅実な経営が各社モットーであった。また社長以下の経営陣は同族会社又は個人商店的色彩を完全に払拭し、人物本位で配置したのが特徴として挙げられる。大城鎌吉氏が手掛けた事業の殆どが成功した背景には、氏の情実を排して適材を適所に配置する経営哲学に徹した確固たる信念が存在していたのは見逃せない。こういう氏の経営姿勢、経営実績が買われて米琉両政府の強い奨めにより航空事業に進出することになったわけである。

那覇空港ターミナル社（NATCO）の琉球航空として再出発した航空事業は、早速大城鎌吉社長の思い切った方針の基に航空運賃の大幅値下げと便数の飛躍的な増加を断行、またたく間に客数が圧倒的に増加の一途を辿り、二―三年で黒字を計上し過去数年の累計赤字を解消することが出来た。しかしながら運輸形態は旧態依然としてCAT航空から機材、乗員をチャーターしての変則運輸だったので、大城社長はそれに満足せずあくまでも自前の機材、乗員を使つての自主運輸体制を目指すべく、当初から正式に航空路権益を取得するために琉球政府を經由して米民政府に申請をしていた。米民政府から大城社長は「米本国政府において沖縄企業に対し許認可を与える行政管轄権がどの行政機関にあるかきまわっていないので航空路権益申請は残念ながら手がつ

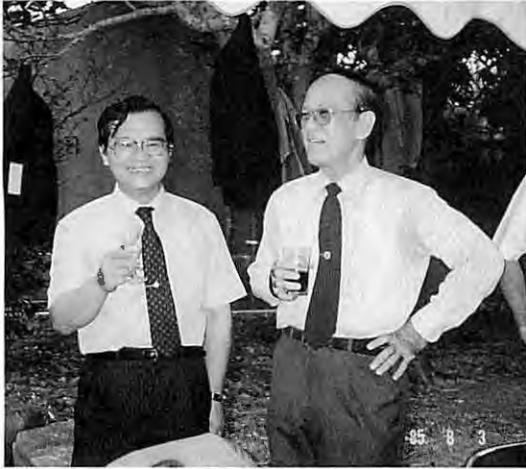
けられない。しかし申請の趣旨は理解しているのでワシントンで早期解決を図るべく高等弁務官は最善をつくしている」旨の前向きな発言を引き出した。また自主運航体制が整い次第外国人による航空事業への介入を排除する措置を講じる事を明示した文書を頂くなど、大城社長の自主運航体制整備に向けたひた向きの努力が米琉両政府による熱心な指導、支援とあいまって着々と進められていった。

ところがどういふ風の吹き回しか、キャラウェイ高等弁務官の気まぐれな政策の急変により、突如として米民政府はエア・アメリカに外資導入の免許を与え、航空事業の運営を許し、琉球航空事業閉鎖のやむなきに至った。大城社長の怒り心頭に発したのは言うまでもない。実直な方だから余計米民政府に裏切られた気持ちで一杯だったと思う。大城社長自ら先頭に立って立法院を始め経済諸団体に会って実情を説明し、現状打開を強く訴えた。マスコミは一斉にこれを取りあげ高等弁務官の不当性を報じて政治問題化し、先島離島をまきこんで沖縄全体が一時騒然とした雰囲気にも包まれた。

琉球航空に代わって先島離島の運航を継続したエア・アメリカは三年後に赤字経営を理由に撤退する事になった。米民政府はエア・アメリカ撤退後、後続会社の選定に手間取った。当初米国の航空会社数社が希望したが、最終的には日本航空、アロハ航空が競合する事になった。米国民政府は当然の事ながら米国籍のアロハ航空を半ば公然と推していた。私は当時NATCO専務の職

にあつて大城社長のお供をして数多く米民政府と折衝を続けたが、米民政府の方針はエア・アメリカの後続会社選定にあつては、少なくともNATCOを中心とする沖繩側の企業と提携することを条件としている事で、担当官だつた公益事業局（Public Works Dept）のカクラン大佐（Col Cochran）は大城会長に対し会う度に「日本航空は国営企業だから日本政府みたいなもので、沖繩側は日本政府と結婚（提携の意）できないよ」と言つて暗に米国籍のアロハ航空との提携をすすめた。三年前に琉球航空を潰して強引にエア・アメリカを許可した米民政府が方針を一八〇度転換して沖繩側の民意を尊重する態度をとつたのは、さすがアメリカは民主主義の国だけあつて誠に天晴れという外なく、キャラウェイ高等弁務官の強権発動に敢然と挑んだ大城会長の面目躍如たるものがあつた。当時の琉球政府行政主席は大城謙吉氏と常日頃、肝胆相照らす仲であつた松岡氏だつた事も幸いな事だつた。松岡主席は内々に大城社長と意を通じ合つていたと思われ、沖繩側の提携先は日本航空でなければならぬと固く心に決めておられた様で、当然の事ながら大城社長も松岡主席の意を汲んで水面下で日本航空と予備折衝を行なつていた。私も専務の立場から大城社長のお供をして何度か日本航空を訪れた。アロハ航空も米国の政治家を通じて強力に米民政府に働きかけていたが、最終的には松岡主席が高等弁務官に対し日本航空を推薦した事により日本航空で決着がつく事になつた。

日本航空は米民政府の示した条件通りNATCOを中心とした沖繩側企業と合弁契約を結んで



右端が大城判氏

南西航空が誕生し一九六七年（昭和四十二年）六月二十日設立登記を済まし、七月一日から営業開始する事になった。NATCO及び南西航空の生みの親として、そして平成四年十月他界されるまでの三十六年間両社の社長・会長の要職にあつて沖縄の航空業界においてご活躍なされた大城会長の輝かしいご功績を讃え、会長から生前賜ったご指導・ご薫陶に対し深甚なる感謝を申しあげると共に心からご冥福をお祈りしながら筆を擱きます。

（日本トランスオーシャン航空株式会社 代表取締役副社長）

「城は人だよ」の垂訓

宝 城 和 市

それは、戦後三十年に垂んとする歳月を経た一九六六年の春斗時のことだった……。

当時の港湾労働組合は、全沖縄港湾運輸労働組合（委員長・赤嶺宗一、副委員長・仲宗根秀光、書記長・島袋用康）と呼称し、傘下組合員は、琉球海運（株）、沖縄汽船（株）の陸上勤務者及び那覇港運（株）、沖縄通運（株）、沖縄検数協会の従業員で構成、各企業の組合は支部としての連合体組織だった。そして組合と各企業間ではユニオンショップ制の協定が取り交わされていたが、所謂尻抜けで、総務・経理の係長、電話交換手、重役運転手、監視員を非組員とした。

一方、那覇港運（株）（大城鎌吉社長、赤嶺忠彦専務、親川光繁常務）は社屋の建設工事中で事務所を沖縄泡盛産業（株）社屋二階に間借りして業務を進めていた。

さて、春斗の話に戻すが、要求が盛り澤山で賃上げも高額要求だったので中々話が纏らず難渋していた。組合は船社や荷主の圧力を期待して拠点斗争を組んでくるが、企業としては「支払能力」の範囲での回答で理解を得ようとつとめる。船社や荷主としては、金額までタッチ出来る

ワケがないので迷惑この上なしの立場だったのである。

交渉を委ねられていた私は、春斗中、常時「辞表」を懐中にし、船社や荷主に極力迷惑をかけぬよう勘案して組合と折衝するが、費やすエネルギーに比し効果のないに徒労感を覚えることもしばしばだった。その折「城は人だよ」の社長の言葉が頭をよぎり挫折感から救われることも再三あった。

私が、大城鎌吉会長の聲咳こゑがきに接する機会を初めて得たのは、那覇市役所勤務の二十五、六歳の頃である。会長は、市議会議員もつとめて居られ、私は議会書記も兼務してた関係で、度々お宅を訪問しよく世間話をお聞きした。その中の一つに「城は人だよ」と企業運営において人の和の大切さを御自分の経験を通じて得た結論としてのお話があったのである。

そうこうするうちに、組合の斗争のやり方に批判的な社員が出て別組織をつくろうと市内安里にある旅館で会合をもったのである。三十名位の集まりだったようだが、すぐにそのことが幹部に知られ、ユ、シ（ユニオンショップ）条項を楯にリーダー的存在だった係長の新垣宗信君（故人）、井口善清君の「首切り」と、協力者として與那嶺光男君の「停職処分」を要求し、無期限スト突入を通告してきたのである。

私は、埠頭内倉庫に全社員を集め、組合の拙速つたすみな処置とその非を職場仲間意識に強く訴えた。話しているうちに胸中こみ上げてくるものがあったのを憶えている。「首切り」という重大で且

つ初の事例なので、社内役員会の形をとり、沖縄サントリービルの会議室で善後策の協議をもった。社長は厳しい面持ちで「会社のためによかれと思つてやった人を罷めさせるわけにはいかない。」と強い口調で言われた。協議を重ねていくうちに「一応、組合の要求をのみストを解かしめ、後に三人の救済について考える」ことに決した。社に帰つてきてから、「三人を東京辺り本土に旅行させるなりして、二、三ヵ月でもいいから遊ばせなさい。各地巡りも勉強になるから、はとけ熱りの冷めるまで会社で面倒をみなさい」とおっしゃった。まさにその言葉こそ「城は人だよ」の核心なのだと思います、本人達に社長の御意志を伝えたところ大変感激して喜んだが、本土旅行は遠慮して家でゆっくり骨休めするという事になり、許しを得て夫々有給の「休暇」処置をとつたのである。春斗終了後一ヵ月程して、復職にこぎつけ新しく管理職に昇格させることが出来た。解決には、烏袋用康書記長と中村光男総務課長の間で絶え間ない話し合いがあつたことを誇りをもって附記しておきたい。

以来、那覇港湾(株)には、拠点ストをうたれるおそれなしの労従関係が確立されていき、組合本部も認める程になつたのである。これも三人の「処分」についての社長の温情が全従業員に深い感銘を与えた結果だつた。

従業員を大切に思い「城は人なり」つまり会社は、従業員同志が助け合つて一生懸命働ける雰囲気をつくつていくことが大切で、管理職は従業員の意志を尊重し、部下が目的遂行に邁進する



泊港荷揚げ場視察

よう心のつながりを強めていくことが肝心だということ^をを自ら全従業員に垂訓されたわけである。

そのことをみんな心に強く芽生えさせ、その後の夫々^{それぞれ}生き方に大きな燈火^{ともしび}をともしているだろうことを信じ、会長と宗信君の御冥福をお祈りしつつ在りし日の事を偲ぶよすがにしている次第である。

（追記）琉海の倒産を救う為に那覇港運株の全財産を処分されたことは、役員会の決議だったとはいえ、非常に悔しく誠に残念に思いつつペンをおく。）

（元那覇港運社長）

企業精神の先見性を学ぶ

小 埜 平 馬

私が大城会長より公私にわたりご指導を受けたのは、昭和五十三年一月から、平成四年の十月までの約十五年間であります。

この間、会長のもとで企業経営の基礎から始まり、沖縄の歴史文化、豊富な人生経験まであらゆる面にわたり、懇切丁寧にあの渋い笑顔で話して下さい下さった事が、強烈な印象として私の脳裏に焼付いております。

また、会長のもとで企業経営の苦楽を共にさせて頂き、感じた会長の人柄は、男らしくきびしい反面、やさしさがあり、その上、威圧感を感じさせる不思議な神通力を持った方でした。

この会長との出会いによって、裸一貫で叩き上げた企業精神の先見性を習得し、地域社会に貢献すべく決意を新たにし、事業に挑戦致しました。

大阪の空港騒音の問題がほぼ解決し、周辺住民の方々の御理解もあり、ほっとする暇もなく沖縄に転勤して参りました。着任した当時は、海洋博の後、客足が急激に落ち込み、沖縄全体が不

況のどん底で資金繰りに困り、倒産に追い込まれる企業が多発、当社も最悪の状態からはまぬがれましたが、減資、そして増資、再建計画案の作成、資金の調達という激務の日々が続き、対策について御指導を仰ぎ、リストラの実施に踏み切ったのです。その中で、いつも心を痛められていたのは、減資した株主の皆様に対し、心から申し訳ないとの気持ちで、会社再建を至上命令として達成すべく努力してほしいと云われました。会社一丸となって取り組み、会長が他界された翌年は、当社の創立二十周年に当り、返済もすべて完了し、企業として株主の皆様さしやうに些少なりとも配当する企業に成長した事に対し、会長は喜んでおられる事でしょう。

ゴルフ談義についてですが、大宮会の幹部が集い、懇親を深める意味で三ヶ月に一度、琉球ゴルフ場で定例のゴルフコンペを開催しており、会長もこの日を待ち望んでおられ、楽しみにして毎回出席していました。仕事の都合で欠席でもすると、名指しで次回は出席する様に注意を与えており、全員出席する事がグループの結束力につながると思っておられた様です。

表彰式には、最高の笑顔で両グループの健闘を称えておられました。

会長は、堅実なプレーで、時々「OB」が出ると、必ず球を探し、他の球が三個見つかり、ここにこ顔で次のホールに進む、まあ、徹底した儉約家であった様です。

会長の事業展開は、常に長期的視野に立って計画し、実行に移され、企業に対して先見の明がありました。沖繩の将来を考え、国際的な観光地にする手で、空の玄関口として国際路線の拡充、

空港の整備、日本航空との協力態勢による南西航空（現在はJTA）と共同運航等、会長の功績は、時代を先取りした実に偉大な計画でありました。

会議に、会長が出席されますと、緊張した雰囲気にかわり、決算書類にはじっくり日を通し、的確な決断を下されました。

会議が終わって食事を御一緒にすると、いつもきちんと食べ、残した事など一度もありませんでした。幼少の頃から苦勞なされた経験から、その様な事が身についていたのでしょうか。又、それが健康の秘訣でもあるとっておられました。会長の偉大なる人格と人間性については、敬服するばかりであります。

会長の生前の御苦勞と努力と数々の御功績に対し、心から感謝の意を捧げると共に私達一同、会長の意志を受け継ぎ、沖縄発展に盡力致す覚悟であります。

（元沖縄グランドキャッスル副会長）



左が小嶋氏



ボクシングの平仲選手と共に

思いやりのある大きな器

宮島健次

私が大城鎌吉氏と出会ったのは三十五年前である。当時私は、琉球政府の臨時業務部長をしていた。局内ではあったが軍事物資も扱っていた。ある時、アメリカ軍から職員を減らせと指令がきており、どうしたものかと思案中であった。先頃、お亡くなりになった高良一さんと付き合いがあり、お正月に出掛けていったら「実は会社をつくろうと計画している。米人のベグマンという人が鉄くずを私に払い下げるからそれを取り扱う会社をつくれといっている。今迄は資材はすべて軍持ちでやっていたが今後は資材も民間で取り扱うようになる。鉄筋も港から工事現場にすぐ運んだら二割あげるといっている」。なんだかかなりできすぎた話ではあった。私は軍から自分の部の職員を減らせという指令がきていたのでこの大変な時期に部下を路頭に迷わすわけにもいかず、自分が辞めることにした。そして高良さんの話に一口のせてもらうこととなり、その会社は当時の沖繩の実業人十人が共同で平等出資して興すこととなった。その時、初めて大城鎌吉氏にお会いしたのだ。設立した会社は国際物産で社長に大城鎌吉氏、専務に私が就任すること

となった。

【国際通りの牧志（現大川家巷）に社屋を構えてのスタートだった。会社をつくれと焚き付けていたベグマンは、私達が会社をつくり、外国から鉄筋を買って手元にあるにもかかわらず、買ってくれなかったのだ。仕入れた鉄筋は港にそのままになっていた。これでは困るということで大城鎌吉氏が調べてもらったところによると、ベグマンはジャパンシュガーに入社していて、実のところは、国際物産に鉄筋を高い値段で売り付けていたのだった。CIAにそのことを話すと、ベグマンは本国に強制送還された。しかし、大量の鉄筋は山積みで港にあり、時間が経てば痛んでしまう。頭を抱え込んだときに時代は味方した。鉄が値上がりしたのに加えて、私達の鉄は、米軍のお墨付きの品質だということで本土の業者に結構な値段で売れたのだ。（しかし、実際は外に放置していたのでさびがでているものもあった）設立してから半年後のことであった。

このようにスタートから国際物産は障害があったのだが、どうにか新しい機運によって好転していった。

まもなく、大城鎌吉氏の同郷であるという真喜屋ケイギという人と香港人がやってきてウイスキーを取り扱ってみないかという。V O 5という沖繩では通称「地図ぐわー」を輸入しないかということらしかった。鉄筋をあてにしていたのははずれたので、米軍も在沖していることだし、泡盛は当時、品質がよくなかった。飲酒の習慣があるのに敗戦後ということもあって良い酒がな

かったから、引き受けることにした。まず、千ヶース輸入して民間と町のクラブにどんどん流した。やはりニーズは多く、飛ぶように売れていった。

クリスマスともなると嘉手納からマダム達がやってきて洋酒をどんどん買っていった。本当に座っているだけで商売ができる時代だった。

大城鎌吉氏には、ご自分のやっていらっしゃる大城組があったので国際物産に付きつきりというわけにはいかなかったが、常に顔を見せ、社員を励ましていた。会社の運営も部下に大体はまかせていたが重要なポイントは握っていたのだった。

三年後に業務拡大のために別の種類の洋酒を輸入しようと朝日物産を設立した。一社で一種類の酒しか代理店契約ができなかった。今日では、洋酒は下火で地元の泡盛が伸びてきている。しかし、昭和三十年頃、洋酒を扱ったのは、やはり、時代に敏感だったというか、世の中の動きを見る目が大城鎌吉氏にはあったということ。大城鎌吉氏の戦後の成功の秘訣を私なりに考えてみると、世間が貧乏のどん底だった時代、変革期に大城鎌吉氏は少しの貯えがあった。それで商売を興し、発展させていった。ラッキーといえばラッキーな人だが、時代を見る確かな目と幸運がやってきたときに大城鎌吉氏は資金面でなく、ブレンや信用、また頑張りぬく体力や気力という備えや貯えをもっていたことだ。だからこそ、つぎつぎといろいろなことをやってのけてこられたのだ。

氏は非常に生真面目だと私は感じていた。起床は七時で三十分散歩して七時半には食事を摂った。そして八時には出社という具合に、時間には几帳面でもとにかく狂いがなかった。時間厳守は徹底しておられた。

時間といえば、こんなことがあった。太田主席がお昼に大扇会と国和会の幹部を招待してくれたときがあった。主席は、両グループが仲良くして沖繩のために尽くしてほしいということだった。食事が済んで國場幸太郎氏と大城鎌吉氏が碁を打つことになった。お二方は、同じ大宜味村の出身である。大城鎌吉氏は國場幸太郎氏のワラビナー（童名）を呼びながら「へーく、へーく（早く、早く）」と碁石を手に握ってせかしていた。意外な一面を垣間見た気がして忘れることができない。結構せっかちでもあった。

大扇会はいつの頃からか、月例会といって砂辺のゴルフ場でゴルフをやっていた。当時、三越の前身で大越おおこという百貨店を経営しており、そこではゴルフ用品を販売していた。ゴルフは高級なスポーツでなかなかやる機会がなかった。それでゴルフの普及のためか、大扇会各社がゴルフ用品一セットずつ購入させられ、それを使って砂辺のゴルフ場でゴルフをやるようになった。大城氏の長男で今は亡き毅氏がよく知っていたので、みんなを手取り足取り教えてくれたのである。月例会はそんなところから始まった。そして大扇会の仕事を離れての親睦の場所ともなったのである。大城鎌吉氏は、殊の外この月例会を大切にされた。大扇会の心の結束を強める唯一の機会で

あると思っていたようだ。実際かなり役に立った。

大城鎌吉氏と一緒に出張に出掛けると、どんなに強行スケジュールでも昼食は、必ずそば屋に行つてそばを食べた。そばが大好きな方であった。特に個人的なお付き合いはなかったが、業務でのやりとりの毎日が本当に教訓になったといつても過言でないだろう。どんな人に対しても思いやりのある人であった。まさにオヤジという器の大きな人であったといまさらながらに偲ばれる。

(前朝日物産株式会社会長)

※宮島氏は、この話をされてから急逝されました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。



朝日物産国際通り店

教えられた経営の基本

真喜志 一朗 太

私は琉球電信電話公社の保全課長から沖繩ビーエスタイヤ販売株式会社の専務に迎えられたが中村弘社長は東京で別に事業をしておられ、会社の運営は殆ど私と我部存君に任されておりました。メーカーのブリヂストンタイヤ本社では業務連絡など仕事の運営上なにかと差し支えがあるとの事で、海外営業本部沖繩担当の伊藤正之氏がお見えになり、大城鎌吉氏に対し沖繩でのタイヤ類の販売を引き受けるよう打診して来ました。それで色々検討の結果引き受けることになり、昭和三十八年二月二十八日に株主総会を開催、三月三日現在の会社組織がスタートし大城鎌吉社長、真喜志専務というコンビで運営を開始しました。

大城鎌吉会長とお付き合いはこの様な経緯から約三〇年になりますが、私の最も敬慕する偉大な大先輩であり、私の師匠であり、私の今日あるのは大城鎌吉会長のお陰であります。

大城鎌吉会長はいつも朝は午前五時に起床、早く起きると家族やお手伝いの睡眠を妨げ、迷惑をかけるというので暫くの間はじつとしていて五時四十五分に静かに床を離れる。そして朝食

前のひと時、永いあいだの経験から生みだした、大城式健康体操を汗が出る迄続け実行しておられる。私は良く会長のお供をしてあっちこっち旅行した事がありますが、ホテルや旅館でも、雨が降ろうが、暑かろうが、寒かろうが、お構いなし、健康体操をしておられる。この様な事は我々が真似の出来ない根気のいる事であります。

常日頃、健康には非常に気を遣い、靴にはいつも常備薬や冷やした日薬を携行し愛用しておられた、また奄美・徳之島に我々大扇会の面々を引き連れ、泉重千代さんをあやかりにお供した事もありました。

この様に大城式健康法で汗を流した後、乾布摩擦をされ、亡くなられたおばあさんや子供達の御霊前に香を焚き、御冥福を祈り、今日も皆さんの御加護により平安、無事、息災あれかしと祈っておられたのが思い出されます。

その後朝食を軽くお取りになり、朝のTVニュースを御覧になって、自宅を早い場合には午前七時二十三分、遅くても七時三十分には出られ、関係会社を時間通り回られるのが会長の毎日のスケジュールでありました。

牧港の弊社には午前八時頃時間通りお見えになり、玄関でお迎えして二階の会長室で毎日の業績について報告し、支払い決裁日には支払伝票について詳しく御説明の上、伝票と小切手に印鑑を戴き、その後時間の許す範囲内で会長の過去の思い出や苦勞談を拝聴する事が日課でありま

した。時には売上の落ち込みまたは交際接待費の使い過ぎ、在庫管理の不適正等お叱りを受ける事もしばしばで、公務員とは違い会社を経営するものは「入りを図り出ざるを制す」、如何にして売り上げを伸ばし利潤を上げ、株主の皆さんの御期待にお応出来るか。又支払決裁日には支払を受ける方々には御迷惑をお掛けしない様に銀行から借りてでも期限通り必ずお支払する様に指導され、躰られたのも立派な教訓であります。

ある時は君の着けている背広は色艶もなく古くなっているし、きちんとした背広と取り替える様にと暖かく細かいところにも気を配られる等立派な指導者でありました。

御本人は背広を何十着かお持ちでいつも新調に見える背広をお着けになり、高級の腕時計や時には懐中時計も沢山持つておられ、かわるがわるお取り替えになり、いつも身だしなみのよいオシャレな大先輩でありました。

尚感心させられる事は毎日時間通り大扇会十社を巡回されるが、各社それぞれ会長の決断を仰がねばならない懸案事項や又解決すべき諸問題については車中で解決策を練り、適時適切に指示し、決断を下す等、記憶力旺盛で頭の切り換え回転の早さにびっくりさせられたものであります。永年に培われた経験と大城式健康法のいたす処でありましょうか。

恩義に報いる・報恩の念に厚い事

これは大城会長の若かりし頃の逸話です。

那覇市で有名なカニコーのタンメー新里康正さんは酒屋、砂糖委託商、米問屋を営み、土地や貸家を沢山持っておられた資産家でした。或る日、新里さんが辻（遊郭街）に呼んで「おいウフグシク、君は年が若いのに相当な仕事をしている様だが金はあるか」と聞かれました。実は材料の仕入れも掛けて、資金に困っている事を話したら、それでは貸そう、借用証は要らないから通い帖式に必要なだけ必要な分だけ遣いなさいと言われ、貸した金の利息も銀行のそれよりも安くし、税金もださない様に密かに配慮して貰ったと。

今度は大城会長が住んでいた家主であり、米穀商を営み資産家である嶺井吉常さんが、大城会長が金を借りて仕事をしているという事を何処からか聞きつけて、「同じ屋根の下に住んでいるのに余所から借用するとは他人行儀ではないか、けしからん。自分が融資するから新里さんから借りた金は返しなさい」と言われたので新里さんの方はお礼を申し上げてお断りし、その後は家主から借用する様になった。本土の建築業者等は「大城はいい金主を持って幸せ者だ」とうらやましがっていたということです。

この様な人間関係の出合い、縁というのは不思議なもので、一方、人間は、健康であればおのずから支援者が出てくるものだとか大城会長は折りにふれお話をしておられました。

ブリヂストンタイヤの用務で会長のお供をして福岡に行った折りに嶺井医院を開業しておられる

嶺井吉常氏さんの御子息・嶺井達生氏の御案内でお墓参りをし御冥福をお祈り申し上げました。大城会長は恩義のある方々の正命日には焼香を欠かした事がなく報恩の念に厚く中々真似の出来ない事で反省するものであります。

以上偉大なる指導者であり我々に日常数限り無い教訓をお与え下さった大城会長の追想談を書くに当たって限られた紙数では意を尽せない事を惜しむばかりです。

ここに大城会長の御冥福を祈り心から哀悼の誠を捧げるものであります。

(ブリヂストンタイヤ沖縄販売 相談役)



ブリヂストンタイヤ 右が真喜志専務当時

感銘をうけた公平無私

宜保悠夫

故・大城鎌吉会長の顕彰録を発行するに当たり、何か一文をとの依頼があつて、生前会長の許で働いて来た輩下の一人として、色々にご教示を戴いた事、日常の人となり、会社に対して並々ならぬ情熱をもつて業務を統括してこられた事、数々の思い出が浮び上がって来た。然し、どれもこれも、多くの方々がすでに別文に述べられている事と思ひ、何を書こうかと迷つたが、私は私なりの遺徳を偲んで書いてみたい。

会長は色々な業績を残されたが最も氣にかけておられた事は人材の育成という事であろう。大扇会の会議の中でも皆の意見をよく聴いておられたが、全く公平無私で、我が子と雖も峻烈な態度で臨み、周囲の者に改めて畏敬の念を抱かせた事は枚挙に暇がない。然し、親子の情は測りしれないもので、長男毅氏が急逝された時は、傍目でも氣の毒なくらい、歎かれ、長らく喪に服しておられた姿が生々しい。長男という事もあつたらうが、毅氏も弁護士という仕事柄、中々の逸材で、私より先輩であつたが、似た年頃でよく議論を戦わし、色々とお教へて貰う事も多かつた。

心中を分かち合つて話し合つた仲と云える。決して他の子が劣るという事ではないが、私の日から見ても本当によき話し相手であつたと今でもご逝去が悔やまれてならない。この様な会長ご自身の分身を見たような長子に対して会長としても期待する処が多かつたであろう。

然し、元々、豪毅な気性の人であるから、その後は総ての点においても微動だにする事はなかつた。

健康には人一倍留意され、規則正しい生活を崩さず、老齡にも拘らず、ゴルフを楽しんで居られた様だが、これも健康を慮つての運動であつたと思う。

会食の際に、他の者はすでに終り、中には喰い残しもあつたが、会長はよく咀嚼され、あの年であんなに食べられてもよいかと思う位、出された物は何一つ残さず召し上がられていたが、これは昔から食事に対する感謝の念と、食物を無駄にしてはならぬという我々に対しての教えを含んだものであろう。兎に角、悠然とした食事の様子を思い出して懐かしい。

特に私が感銘を受けた事は、毎日克明に日記をつけて居られた事、それも幼時に家業の都合で充分に学業に就けなかつた事もあつたようだが、人知れず独学で漢字を覚えられたのであろうか、成るべく漢字を使って一寸した暇を見ては丁寧を書いて居られた。備忘録というよりも、ありのままの事を書いて居られたに違いない。人知れず学ばれた事といえば咄嗟の場合のスピーチにおいても臆する事なく、堂々と無難に纏め上げる洗練された頭のよさには皆、感心していた。これ

も並々ならぬ、隠れた努力の賜物だと思われる。この様な事からこの人の生き様が窺える。

このように書けば、如何にも硬い事ばかりの人と思われるかも知れないが、機嫌よく、辻の話をなさったりする洒脱な面もあった。

次に忘れられない思い出としては、沖縄が日本復帰した直後、会長は軽度の痔疾を患って居られて、東京からの帰りにわざわざ鹿児島に廻って行った。それは当時沖縄では鹿児島市の川内市には一回の注射で治す有名な医者が居り、多くの人が快癒したという噂が高かったためだが、その所在は鹿児島市の荷役会社・共進組の方々にも川内市の地元の方々にも聞いてもわからない。地元では余り知られていない治療法だったのである。然し、川内市へ行き、薬屋が教えてくれたので行って見た処、病院らしい構えでなく、農家の離れで治療して居た。全然病院らしくないので幾分躊躇して居られたが折角来たのだからと、私が受け付けて順番札を貰っている間に、控え室で四、五人の患者に色々聞かれていた様子でその中で一度で治らず、二度目だとウンウン唸っている人を見て、会長も不安を覚えられたのであろう、帰ろうかと思われている様子であったが、それでも言い出せずに、私に「大丈夫かな」と言われ、私はその手の病気でもないのに「君、先に試しにやって見たら」と言われたのには吃驚した。そこで私が、この治療はやめた方がよいのではないですかと申し上げた処、そうしようと、丁度折りよく来ていたタクシーに乗り、早々に逃げるようにして鹿児島市に帰った。後で沖縄でも多くの人がこの治療で失敗して再治療をした



琉映賢 奥の右端が宜保氏

という話を聞いて、この医者にかからずに帰ったのは正解であったと思う。

(琉映会長)

私の人生の師

佐々本尚哉

この度、私が最も尊敬し人生の師表として仰ぎ永年仕えて参りました故大城鎌吉会長の追想集を刊行しようと企画され多くの方々賛同を得て発刊の準備に至りました事は、衷心より喜びに堪えません。私は追想の一端として、会長の御指導を受け乍ら琉球酒造(株)を設立したその経過について書かせてもらいます。

昭和三十三年頃の沖縄の酒造業界は焼酎甲類（連続式蒸留機に依って製造された焼酎）の全盛時代で僅か二工場での造石が百軒以上もある泡盛工場の造石数を上回る勢いでした。

私も泡盛業者の一人として佐久本製酒工場を営んでいましたが、何とか株式にしても工場規模を大きく出来ぬものかと思ひ、郷里の先輩で当時琉球政府の主税局長、山内康司氏へ相談に行きました所、山内氏の話しによれば、国際物産の大城鎌吉氏からウイスキー製造免許は貰えないかと申請があるが、新免許の交付は無理なので、君の免許を生かして新会社を設立して発足したらと思うが話し合ってみないかと打診されました。早速国際物産を訪ね大城鎌吉氏にお会いしま

した。結論から言つて一日惚れと申しましようか、初対面乍ら事業的感覚は勿論の事、真先に人間の魅力にとりつかれました。大城社長は国際物産ではウイスキーを外国から輸入販売しているが、沖繩の将来を考えると現地で製造しなければ沖繩の発展には繋がらないと、切々と製造業の大切さを説かれ、又私みたいな若輩（当時は三十四歳）にも慇懃に丁寧な御自分の事業理念を話されました。人間は色々の辛苦に会い乍ら成長を続けるのだと自分の少年時代から現在迄の歩み、尚自分は教育は多く受けていないが常に努力し事業を通して少しでも世の為に盡せたらと考えているのでどんな些細な事でも常に真剣に立ち向つて来た、その上信頼信用の大切さを説かれ、その為何事にも誠実に対処する事だと言われました。後の私の人生に大いに勉強になりました。

さて私は「沖繩の酒造業の現況としてウイスキー製造だけで会社を維持するのは難しいと思うので当初、焼酎の製造販売で、基盤を造り、時期をみて洋酒製造に挑んだらと考えますが」と具体的に数字をあげて話しますと、「よし解つた。君がそう思うならその様に進めよう」と速決、その理解、決断の早さ、経営者としての大城社長への敬服の念は更なるものです。「君が良ければ早速具体的な事業計画をして見なさい、但し事業もするなら将来必ず沖繩一になれる様に、立派な設備と優秀な技術者を得る様配慮しなさい」と言われました。

当初、私の免許で初めますので佐久本酒造工場のあった那覇市寄宮一二二番地に資本金六万ドルで琉球酒造(株)として設立発足し、株主は会長推薦で国際物産、琉映貿、那覇港運の三社と、個

人株主大城鎌吉氏、宮島健次氏、中本正二氏、宜保俊夫氏、松川国春氏、赤嶺忠彦氏、親川光繁氏、饒平名長栄氏、呉屋良向氏、楠見長栄氏、宇地原朝正氏、山里将宝氏、佐久本尚哉の十三名でスタートしました。工場を那覇市繁多川三七五の八番地、敷地面積約八千三百平方米で、当時世界的に有名なフランスが特許をもつスーパーアロスパス連続式蒸留機、醪処理能力百石を備えていよいよ昭和三十四年十二月より操業開始となり、同時に私は社長を辞任し大城鎌吉氏に社長に就任して貰い、専務に佐久本、常務に山里氏が就任し、本日も繁多川に移して、昭和三十五年五月に焼酎「新世紀」を新販売、翌年三月には雑酒製造免許を取得して大城社長待望のローカル「ゴールデンウイスキー」が誕生発売されました。

当製品は全琉各地にある飲食店街で好評を得て順調な売れ行きを示し、尚焼酎新世紀の販売も益々好調で会社の成績も上昇の一途でした。当時、大城鎌吉社長は御自分の社長をなさっている各社を毎日廻って指導をなさっていました。琉球酒造も建設中は勿論のこと毎日来られて日々の報告をうけ、細かいアドバイスを几帳面になさって私達を指導激励され、お陰で会社も飛躍的伸びを見せ、昭和三十六年十二月に沖縄サントリー、琉球ニッカウイスキーに原料用アルコールを出荷するに至り、焼酎が月に十万八千の出荷、ウイスキーの伸び等で創業以来僅か四年で製造能力が一杯になり、早速醪処理能力を今迄の三倍の三百石蒸留機に増設しました。大城社長の日頃の叱咤激励は絶大な効果を發揮したものだと思えます。

さて会長は常に成功の条件として健康の大切さをとかれ、健康こそが全活力の根源だと教え、又常に努力し学び続ける事、人間の頭は井戸水の様なもので使えば使う程新しい着想が湧いてくる、使わねば自然に涸れてしまうと話された。又他人に対しては部下を褒め「私の部下は皆自分より学校教育を多くうけ皆優秀で私は大変助かっている」と紹介される。部下はこの様な社長の言葉に大変恐縮すると共に、それこそ社長の期待を裏切らぬ様努力して一歩でも半歩でも社長の域に近づこうと頑張ります。実に見事な教育、いや後継者育成だと思えます。それで時期が来たら惜しげもなく部下に社長職を譲る。非常に無欲な太っ腹で抱擁力のある方でした。

そこでエピソードを二、三話します。健康体力について、確かに幼少の頃から苦勞し労働によって鍛えられ、更まにずっと毎朝健康保持のため鎌吉式体操を続けられた事は衆知の事ではあります。が、会長六十八歳位の頃、泡瀬のゴルフ場へお供しまして2ラウンド廻りました。私は仄はかな疲れを覚え終ろうとしましたが、会長はまだ明るいので、後ハーフは廻ろうと言われて、とうとう四十五ホール廻りました。なる程会長は並外れた体力を持っておられると今更い乍しら驚嘆しました。またある時会社の前の道路工事で工場迄の二百米位はでこぼこ道で、工事が遅々として進まぬ中、会長の車はベンツの新車でしたが、車の腹部が路面に擦った様です。私は呼ばれて「一体この道路工事はこんなに時間がかっているが何時完成するんだ、此の車は大扇会より送られたもので大切に乘らねばならぬ、車の腹をつく様な道には入って来れぬから明日から此の会社には来ないの

で君の責任において勝手にしなさい」と怒られた。私も驚きと共に何せ若輩者ですから心の中で私が道路工事をしている訳でもないし、何で工事が遅い責任を私がとらねばならないのかと少々ムツとしました。が併し大城社長が見えなかつたら、決裁や仕事のアドバイスも貰えないし大変だ、と私は翌日から市役所に日参して工事を急がせしました。お陰で早々に立派なアスファルト道が完成しました。その後、琉球酒造はウイスキー主体にする為ゴールデンに社名変更し、更に昭和四十年十二月に日本における一部上場会社三楽オーシャンと資本提携し、社名を沖繩オーシャンに変更。誠実な会長は提携した以上、相手にメリットがある様に尚一層頑張ってオーシャンウイスキー、メルシャンワインの販売上昇に努力する様にと強く指示しました。その後、沖繩での洋酒製造業の見通し、対輸入洋酒との関係、景気の見通し等を考えて三楽オーシャンに特ち株を譲渡し、平成三年七月にメルシャン（旧三楽オーシャン）と沖繩オーシャンとが合併致しました。

私の人生で大城鎌吉会長とお会い出来、共に仕事をさせて貰った三十有余年は大変幸福で私にとって充実した年月だったと思います。会長が倒れた時は、筆舌に盡し難い程の大きなショックを受けました。会長は大変丈夫な体力を持って居られるので一日も早い再起を心から祈っていました。しかし、これも運命かと思いますがとうとう治癒出来ぬままなくなられ誠に残念でなりません。



琉球酒造の貯蔵庫にて

思うに会長は人情味豊かな方で誰とでも柔和で温厚な態度で接する人だったので経済界、政界、其の他各界の多くの方々から立派な頼りになる先輩を失ったと惜しむ声をよく耳にします。私の忘れえぬ思い出として会長八十五歳の生年祝いの御慶事に際して誠に光栄^{なご}乍ら会長八十五年の歩みの御紹介をさせて戴きましたが、その波乱の生涯は唯^た感動する計^{ばか}りで敬服あるのみです。私はこれからも会長を師表として過^かぎて行きたいと思えます。大城会長大変有難うございました。心から御礼を申し上げ会長の御冥福をお祈り致しまして追想の思いとさせていただきます。

(元沖縄オーシャン社長・メルシャン株式会社顧問)

“沖繩の宝”を失う

中 本 正 二

大城謙吉氏には、永い間会社の社長、或は会長として、また関係企業グループ大扇会の会長として、常時身近でお仕えし、日頃会長または親爺とお呼びしていたので、ここでも会長と呼ばせてもらうことにする。

会長に私が初めてお会いしたのは、国際物産株式会社が創立された一九五四年一月のことであつた。その後一九八八年十二月に病で入院されるまでの間、三十五年の永きに亘^{わた}って、公私ともに深い薫陶を受けることができたことは、まことに幸せなことであつた。そして亡き後の今日も「我が人生の師表」として、深く敬慕申し上げているところだ。

国際物産の設立については、当時米軍のDE（地区工兵隊）の倉庫長をしていた米人が、当地に信用のおけるしっかりした建設資材取り扱い会社が出来れば、そこを通じて資材の購入をしてもよいとの意向を伝えて来たので、先日亡くなられた高良一氏が経済界の有力メンバー十名に呼びかけて、株主即役員として参加してもらい、社長に大城謙吉氏、専務に宮島健次氏を選任して

発足した。資本金五〇〇万B円で半額払込みの二五〇万B円（為替レートドルは一二〇B円）が、僅か一日で完納されたことは当時としては特異なことであったと思う。これも会長のお人柄と、大きな信用に依るものであった。

当時私は高良一氏が経営しておられた、株式会社ホテル琉球（現那覇東急ホテルの前身）に勤務していたが、同氏からこんど新しい会社が出来ることが、そこへ行ったらどうか、との勧めがあったので、それをお受けすることにして、国際物産に入社することになった。

会社の事務所を、当時那覇市内の蔡温橋際に在って、当社の役員でもある平田忠義氏が社長をしておられた沖縄貿易株式会社（現大川家具店の場所）の社内に設け、先ず手始めに、ルクセンブルグから鉄筋一〇〇〇トン、西ドイツから水道用鋼管五〇〇トン、米国から床用アスファルトタイル等を輸入して営業を開始した。

資材が入荷してよいよDEへの納入交渉を始めたが、なかなかOKを出してくれない、日数をかけて再三再四、話し合いを持ったが埒があかず、その内、例の倉庫長も職をやめて本国へ帰ったので、とうとう会社設立のポイントであった、DEへの納入の夢は破れてしまった。民間に販売するにしても、当時としてはあまりにも大量であったので、完売するのに何年かかるのか見当もつかなかった。そして在庫資材の保管は、倉庫会社の屋外蔵置ヤードに野積されていたので、雨風によって鉄筋には赤錆も徐々に進行し、気が気でなかった。

このようにして会社の存続さえもどうなるか、見当もつかない中であっても、会長はグループ各社の中で毎朝真先に、当社へ出社されて状況報告を受け、あれこれと必要な指示を与え、ややもすれば意気消沈に陥りがちな私共社員を、自信に満ちた言葉で励ましておられた。銀行からは多額の営業資金を借り入れていたが、期日になっても返済することは出来なかった。しかし、手形期日の延長書き替えを、快くその都度させてもらっていた。会社の運営状況は最悪であったにもかかわらず、資金繰りには苦勞すること無く、社業を継続して行くことが出来た。これは偏ひとえに、銀行に対する会長の信用の賜物であった。

会長は日頃私共に対して、事業を行う者にとって、他所様の信用が何よりも大事であることを説いておられたが、そのことをご自身が、身を以て教えておられるように思われた。

また経済の安定なしには個人、家庭、企業、地域社会や国家にとっても、その幸せと、発展は有り得ないとの固い信念を持しておられたので、外部から事業への出資協力の要望があった場合にも、その事業が地域経済の発展に寄与出来ると判断されたら、協力を惜しむことはなかった。一方、ご自身が主宰する事業に対しても、外部からの出資希望者に対しては広く門戸を開放し、共に協力して事業を行うという、心の広い姿勢をとっておられたことは、衆目の認めるところである。

会長の生い立ちについて、自叙伝『回想八十五年』の中に詳しく記しておられるが、幼少の頃

家計が苦しい為に、年季奉公に出され、両親を助ける等、我々の想像に絶する苦難の中から、普通言われる零からの出発でさえなく、もっと条件の悪い負からのスタートであった。逆境は最高の教育であると言われることもあるが、逆境の中に在って、不屈の負けじ魂と、強靱な意志を養い、知識と技術を身につけることを覚え、健康とお金の大事さを体得し、人の義理人情と恩義や信用に感動したことが、後年に大成された基になったように思う。そしてこれ等のことは我々後輩に対して、大きな勇氣と自信を与えてくれている。

会長はまた、事を行うに当たっては、縁起を大事にしておられた。開業、起工、落慶や、旅立ちの日選びには、曆の六輝の大安の日を、当てておられたし、物事を決めるに当たっては、積極的に明るい方向を示す、前へ、上へ、広く、昇る、大きい、進む等を、信条としておられた。家紋が昇り藤に大の字をあしらっているのに、それが良く表われている。また国際物産の子会社の朝日物産設立の際、社名を定めるに当たって、私共は二つ程の案を準備していたが、会長が即座に「朝日物産がいいよ」と言われたので、考えてみるとこれは縁起の良い、いい社名だということとで決まった経緯がある。尚、電話帖や会社名簿等は、五十音順に記載されることが多いので、その場合、前部の目のつきやすい位置に記載されるおまけまでついているではないか。その後、同社は年々社業も発展し、今日に至っていることは、社名にそむかず、誠に喜ばしい限りである。会長は、健康について、人間にとって健康は何物にも代え難い大切なものであると、常々言っ

ておられ、ご自信の健康管理には、充分に気を配っておられた。常に胸を張って正しい姿勢を保ち、居眠りなさる時でさえ、それは変わらなかった。我々がたまにやる、顎を掌にのせる格好など、一度も見たことがなかった。また服装は何時でもきちんとされていて、沖縄経済界ナンバーワンの、スタイリストではなかったかと思う。

日常生活においては、過飲過食や夜更しを避け、人間時計と言われる程、規律正しく行動され、関連各社への出社時刻も、ほぼ一定しておられたし、整髪の日時も、毎週土曜日の午後一時に沖縄三越の理容室と定まっていた程だった。

毎年定期に人間ドックに入られ、精密検査を受けておられたが、八十歳台の頃、担当の医師から六十歳台の身体だと診断されたということを、誇らしげに語っておられ、ご自身では、百二十五歳迄生きるんだとの、固い信念を持っておられた。それで他所様から「会長はお元気でいらっしやるから、百歳まで長寿なさいますよ」とほめられても、いい顔をなさらなかったのを覚えている。

それが一九八八年十二月十日に沖縄赤十字病院に入院されたと聞いても、大したことではないだろうと思いつつ、翌日病院へ行ってみると、看護婦さんから絶対安静で面会謝絶だときかさされてびっくりした。控え室に安謝病院の嘉数先生が来ておられたので、病状をお聞きしたところ脳内出血とのことだったので、これはたいへんなことになったと思いい、後遺症が残らないように

と、祈らずにはおれなかった。

それにしてもつい先日、十二月六日と七日の国際物産と朝日物産の株主総会には、いつもの通りの元気なお姿で出席なされ、私に「来年四月頃、また皆で一緒に旅行に行こうよ、計画をしてくれ」と言っておられたばかりだったのに。会長は旅行がお好きだったので、私もそれまでに十回程お供をして、楽しい思い出を沢山持っているが、その後と言われた「先週の鹿児島行き旅行は一寸疲れたなあ」との言葉が、私にとって最後のものになろうとは、思いもよらないことであった。それは同地で開催された全国空港ビル協会の会議の際、寒い天候の中で島津家の磯庭園や、桜島の溶岩台地見学での疲労のことを指しているものであった。

入院後四カ年にも亘る苦しい闘病と、家族、医師や看護婦の皆様の精一杯の治療の甲斐もなく一九九二年十月十八日に遂に帰らぬ人となられた。

顧みて大城謙吉会長が、沖縄経済発展に尽された偉大なご功績と、社会の木鐸として多くの人々に敬慕されていることを思う時、ほんとに沖縄の宝であったと思わずにはいられない。

私共は会長から受け継いだ企業を守り、更に発展させていくことが、最大の供養になると思っている。

我が人生の師表を失った今、只ひたすらに、ご冥福をお祈り申し上げるのみである。

(国際物産株式会社)

感銘深い人生談

上原和雄

「歳月は流るる水の如し」といわれますように、時の経つのは実に早く、大城鎌吉会長が身罷みまかられてからはや、一年余の月日が過ぎ去りました。あらためて在りし日の大城会長の面影を偲おもぶとき、寂寥せきりょうの感が心の底に重く広がってくるのは如何いかんとも仕方がない。

私が十八歳の夏、死別した厳しくもまた優しくかった父の面影を会長の日々の言動のなかに見出し、出していたからであろうか。

無事、会長の一年忌も終えられ、年もあらたまりました今、会長ご在任のころを思いおこし、色々ご薫陶くんとうを戴いたいてまいりました数々の想い出の一端を申し述べたいと思う。

会長は若い者たちとの会話を楽しんでおられたように思われます。ときたま若い者を集められてはよく、ご自身の歩んでこられた人生談を聞かせ、それらの話しを通じて人間形成に必要な教育を施されておられた。

例えば木材を仕入れるには、良質の材料を自分の目で確かめてから購入するために、自ら遠く

鹿児島県や宮崎県の産地の問屋^{とんや}まで出向き、また安価に買付けるために支払いは即金で決済をし、取引が終わるとすぐ次の問屋に走り、他の木材の買付けを進めたものだ。これが質の良い材料をどうやって安く仕入れるかの方法で、こういう事の積み重ねが会社に利益をもたらすのだと話をされた。

また昭和十年頃のこと、請け負った宜野湾小学校の建設工事で八十%も完成していた校舎が、天災で一夜にして三十メートルも吹き飛ばされ全壊した。しかし、原因が不明のため補償も受けられずに借金して完成させた事があった。建設業ほど因果な職業はなく、この様に何時もリスクと背中合わせなので、現場を担当するものは充分に気を付けて施工に当たってもらいたい。更に同期頃、嵐山のハンセン氏病棟の工事では、手ひどく人災にあい、身にしみて事業の厳しさを知り、如何^{いかに}にこの様な苦境に対処して切り抜ける根性が大切かということを感じ^さつたと、聞かせて戴いたものだ。

海洋博の建設ブームの最中のある日、会長は若い技術者たちに「現場を担当する責任者の頭の中には常にその時点の現場の正確な損益の数値が入っていないようでは責任者としての資格がない」と言われてから「君たちに私の宝物を見せてあげよう」と、机の引出しから黒光りする皮ケースに入った、古びた小型の携帯用の算盤を取り出され「この算盤は私が若い時から愛用してきた物で、私は今迄これを身邊から片時も手放したことはなく、夜寝るときにもこれを枕元にお

いて休んだものだ。そして気になる現場があったりすると、夜中にでも起き出してこの算盤でパチパチと原価を弾き出し、実行予算と対比して方策を練り、翌日の朝一番には、その現場に向向いて手当てをほどこして問題の解決を果たしたものだ。また、私は、いくら数多くの現場を持つていても、全現場の進捗状況を常に、確実に把握して不安や問題のある現場に対しては、早め早めに状況に應じた手を打って来たので、これまで引き受けた工事は全て立派に完成させたばかりでなく、利益を揚げる事が出来た」と話しをされ、如何に実行予算並びに原価の管理が工事を施工する上で大切かと云う事を説明されていた。それから些か日時を要したが、私共会長のお諭しにそい、原価管理の強化に勤めてまいった結果、今日では工事の品質の高さにおいても利益を揚げる会社としても、一應、世間の定評を戴く所まで成長してきた。

或る日、会長室で若い者たちに「人間、成功する上で大切な事が三つある。その第一番目は『健康』だ。人は病気になるると気力が失せて、感覚が鈍り、時として判断を誤ったり、問題が起きても躊躇して迅速な行動をおこしきれずに、時期を失って度々損害を招くことがある。昔の諺にも『健全なる肉体に健全なる精神は宿る』というが正にその通りだ。第二番目は『信用』が大切だ。他人から信用を得るには、自我が強く、私利私欲に走るような者は駄目だ。人格が高潔で誠実な者でなければ世間は決して信用しない。然し世間から信用されるようになれば、どんな事業をしてもきつと成功する。私がこれまで人並みに仕事が出来たのも多くの人々から厚い信用を得

たお陰だと肝に銘じている。第三番目は「努力」だ。「努力は天才に優り、点滴は岩をも穿つ」といわれるように、楽をしていては、目的は成就されない。努力をする者は報われ、やがてそれが自分のため、家族のためになり、また会社や社会に寄与することになる。以上の三つの事柄を守る者が人生での成功を修めるのだ」とのお話しを戴いた。

会長がご逝去されてから一年を経過した現在、会長には、関係された各企業の大勢の立派な後継者がおられ、会長亡きあとも、故会長のご意志を守って努力をされ、各社とも私業は一段と隆盛を続けている。誠に喜ばしいことだ。

何卒、今後とも広大無辺の会長のご親族の方々が末長く引継がれ、守っていかれるよう、衷心よりお祈りする次第である。

(大城組専務)

大
城
鎌
吉
年
表

大城鎌吉年表

西曆	和曆	大城鎌吉の主な出来事	社会の出来事 (県内・国内・世界)
一八九七年	明治三〇年	十二月二十日沖縄県大宜味村謝名城にて父・代吉、母・カマドとの間に次男として生まれる。	
一八九八年	明治三一年		七月十四日「臨時沖縄県土地整理事務局官制」公布 (三〇県庁内健徳館に設置)
一八九九年	明治三二年		六月大隅板垣内閣 (憲政党) 成立
一九〇〇年	明治三三年		十一月日本勸業銀行那覇支店設立。一、二、三年米金融ひっぱくほぼ絶頂に達する。
一九〇一年	明治三四年		十一月六日このころ国頭郡内で各間切長の弾圧ふんだんになる。県下の人口は四十六万五千四百七十人。この年オーストラリア連邦が組織される。
一九〇二年	明治三五年	火事で家を全焼、一家全員無事。しばらくして弟と妹を死す。(三五年) 確認	田山花袋著「琉球名勝地誌」刊行される。
一九〇三年	明治三六年		九月(中国) 辛亥条約
一九〇四年	明治三七年		五月この頃国頭郡を中心に各地に飢饉がおこる。
一九〇六年	明治三九年		一月日英同盟条約調印
			三月大阪第五回勸業博覧会会場周辺で本県婦人陳列され、県世論沸騰(人類館事件) 四月硫黄島噴火 五月三十一日明治橋(南北二橋) 完成、翌日から有料渡橋
			二月日露戦争はじまる。
			四月琉球新報日刊となる十月十六日沖縄最初へのルー移民三十六人、横浜出港

一九〇七年	明治四〇年	一〇歳 家族で国頭村辺土名に移り住む。父が半身不随のため、鎌吉は宇良家に二〇円で年奉公に出される、しばらくして母の具合が悪くなり、同じ部落の宮城栄輝という人に三〇円で身売りされる。	六月前年二回の暴風により与那国島に飢饉がおこる。
一九〇八年	明治四一年	一二歳 母・カマド死亡する。	九月二十七日沖縄県泡盛製造組合設立。この年、渡地・仲島の遊廓を廃止して辻遊廓に合併する。
一九〇九年	明治四二年	一四歳 大宜味村喜如嘉のモトブヤーに大工見習い。	四月十三日鼠と蛇の駆除のためインド産マンガースを移入。八月日韓併合、朝鮮総督府設置
一九一〇年	明治四三年	一五歳 辺野喜の山城伸太郎さんのところへ住み込む。(六〇円前借り) 父・代吉死亡する。	十月辛亥革命起こる
一九一一年	明治四四年	一七歳 辺土名の村役場の小使いになる。銀行から七〇円借入して三百坪の畑を購入する。	一月中華民國成立。七月明治天皇死去、大正天皇即位。
一九一二年	大正二年	一九歳 国頭村浜の出身・梁棟仲原親高へ大工弟子入り	二月この頃ユタ取締り強化される。
一九一三年	大正三年		三月末日辻遊廓内の娼妓酌婦数一〇一九人を数える。六月サラエボ事件勃発、七月第一次世界大戦勃発。十一月二十九日那覇ー与那原間に沖縄県営鉄道開通
一九一四年	大正四年		三月十二日伊波普猷、真境名安興らと沖縄演劇協会設立。五月この月沖縄へ自動車をはじめて輸入
一九一六年	大正五年		

一九一七年	大正六年	(二年半) 二〇歳 徴兵検査を受けるが乙種で兵役免除になる。	され大坪商店パレードを行う。 六月一中で方言札使用される。十一月ソビエト政 権成立。十二月歌劇上演禁止事件おこる。
一九一八年	大正七年	二一歳 仲原さんのところを辞め、那覇で大工の勉強する。	四月九日那覇港内埋立地竣工西表島に沖縄炭坑 (株)設立 八月米騒動おこる十一月第一次世界大戦終結
一九一九年	大正八年		十月辻町大火(住宅等六〇〇戸焼失)この年宮 古・八重山郡にコレラ流行し患者二〇〇〇余人死 亡者九〇〇余人である。この年、平和館(映画館) 設立。
一九二〇年	大正九年	二三歳 七月・大城組を那覇で設立。	一月国際連盟設立。十月初めて国勢調査を行う (人口五十九万一千五百七十二人)。十二月に西表 島に先島炭坑(株)を設立。
一九二二年	大正一〇年	十二月一日・長男・毅生まれる。(昭和五二年八月 弁護士として活躍中死去)	一月五日柳田国男民俗調査のために来県。五月二 十日那覇・首里に市政を施行(那覇市長宮間重慎、 首里市高嶺朝教)。七月折口信夫民俗調査のために 来県。九月八重山にマラリア予防班設置。この年 城間恒有、県ではじめてレコードの吹き込みをお こなう。
一九三三年	大正十二年	二五歳 同郷の饒波清子と結婚。	三月二十八日県鉄嘉手納線開通する。この年那覇 劇場(新天地劇場)ができる。
一九三三年	大正十三年		九月関東大震災(朝鮮人迫害、数千人殺される)。 この年那覇に無線電信局設置される。この頃県外

一九四四年	大正十三年	官庁工事の請負資格を取る。 四月土木建築請負ならびに土木建築資材販売業を営む。七月二十五日・次男・幸雄生まれる（沖繩戦で戦死）	出稼ぎ多くなる。 ソテツ地獄はじまる。
一九三五年	大正十四年		二月那覇市立浴場設置。三月十七日那覇東町で大火災一〇〇戸余焼失。九月十七日沖繩銀行・沖繩産業銀行・那覇商業銀行合併して沖繩興業銀行設立。十月一日国勢調査（人口五十五万七千九百九十三人）。十二月六日那覇東町で大火災・一八〇戸焼失、約一〇〇万円の損害
一九二六年	大正十五年・ 昭和元年	八月十五日・三男・安夫生まれる（沖繩戦で戦死）	二月五日旭町で大火災（焼失家屋四〇戸・損害十七万四〇〇〇円）。三月十四日沖繩青年同盟結成され、広津和郎（「さまよへる琉球人」へ「中央公論」大正十五年三月号所収）に抗議書を送る。
一九一七年	昭和二年		五月五日首里大工組合結成。六月二六日糸満建築士組合結成、八月沖繩県工業指導所設置・首里城正殿解体復元工事始まる九月九日首里市石工組合結成四月那覇大工組合・那覇左官組合・旭町樽工組合結成
一九一八年	昭和三年	十月三十日・四男・喜幸生まれる（沖繩戦で戦死） 十一月三日・五男・金次郎生まれる（現俗大城物産相談役）	
一九一九年	昭和四年		一月新垣バス、首里―那覇間運行開始十二月製糸会社の待遇悪く、県出身の女工続々帰郷

一九三〇年	昭和五年	一月五日・六男・康秀生まれる（株沖繩三越元社長、平成七年三月死去）	四月那覇市立職業紹介所設立。六月小学生の欠席や欠食および人身売買さかんとなる。この年「蚤糸業法」施行、業界不況で紡績女工の帰郷ふえる。昭和恐慌激化
一九三二年	昭和六年	十月三日・七男・武男が生まれる（現大城組社長）	八月九日宮古に六十五mの暴風襲来（民家七〇〇〇戸倒壊）九月満州事変おこる。
一九三三年	昭和七年	北部の嵐山に県発注の、らい病療養所建設を請け負い、工事の準備にはいるが地元住民の反対運動がおき、さらに暴動にまで発展・工事を中止し、これまでの蓄財をすべて失う。	五月四日平和館にトキー映画機を据える。この年新垣バス、平尾バス、那覇一名護間を運行。羽地で瀬保養院設置反対運動激化し、一〇〇人が検挙され、十五人起訴（嵐山事件）
一九三三年	昭和八年		一月二十三日首里城の歓会門・瑞泉門・白銀門・守礼門、国宝に指定される。三月二十一日首里一那覇間の電車廃止。この年日本海軍、小禄飛行場建設
一九三四年 一九三五年	昭和九年 昭和一〇年	二月九日・八男・英紀生まれる。 らい病療養所の場所を屋我地に変更し、あらためて大城組が工事を請け負う。	十月二十八日那覇商工会、商工会議所に昇格 八月二十一日知事・市町村長会で女兒売買の禁止を訓示。十月八日内台航空路（福岡ー那覇ー台湾）

一九三六年	昭和二年	五月二十三日・長女・菊江生まれる。 十一月国室・守礼之門の修復工事を請け負う。	開設、翌年ダグラス機就航し、運航本格化。この年、沖繩県土木建設請負工業組合設立 十二月沖繩―鹿児島間無線電話開通。内台航空路開設にともない小禄海軍飛行場を那覇飛行場に改称。
一九三七年	昭和二年		七月蘆溝橋事件（日中戦争勃発）。十一月日独伊防共協定成立。
一九三八年	昭和三年	国家総動員法が制定される。	七月ユタ三五〇人検挙。八月一日人身売買を厳禁する。
一九三九年	昭和四年	新型S型瓦を考案。	二月改姓改名届け出多数。八月二十四日弁ヶ岳獄行門、国室指定。
一九四〇年	昭和五年	次女・育子生まれる（戦後まもなく病死） 諸物資統制うけ、企業合併により沖繩製瓦株式会社を設立。	一月柳宗悦ら日本民芸協会同人、県当局の標準語励行のいきすぎを批判（方言論争おこる）。九月日独伊三国同盟締結。十一月一日県令で裸足を禁止する。
一九四一年	昭和六年		十月ゾルゲ事件。十二月十日真珠湾攻撃（太平洋戦争勃発）
一九四二年	昭和七年		八月十二日南明治橋竣工。九月一日家庭用物資の総合配給帳制を実施。
一九四三年	昭和八年	五月 沖繩土木建築工業株式会社社長就任	一月二日那覇・大城・首里の無尽会社合併、南和無尽会社となる。

一九四六年	昭和二一年	<p>三月 大城組はじめ県内、一七社により、沖繩土木建築工業株式会社を設立、社長に就任。(資本金一六万円。)</p> <p>軍仕事が主力としておこなう。</p> <p>四月四日・九男・秀男が生まれる。</p> <p>十月十日の一〇・一〇空襲による火災で住居・事務所・倉庫を失う。一時、牧志につくつておいた壕のなかで暮らす。</p> <p>三月末 米軍が慶良間諸島に上陸。辺土名に避難する。</p> <p>米軍地区隊長から瓦を造つてほしいと頼まれる。辺土名にはよい土がなく、那覇のかわら工場で作ることになる。</p> <p>八月・那覇復婦第一号、復興隊長となる。</p> <p>一〇月米軍から那覇市復興建設隊長を命ぜられる。</p>
一九四五年	昭和二〇年	<p>二月二十五日政府「決戦非常措置要綱」を決定。この月、県庁職員家族の本土引き上げ開始。八月学童疎開実施。十月十日那覇を中心に大空襲をうける(十・十空襲)罹災戸数二万二〇〇〇余戸)</p> <p>八月六日広島に原爆投下。八月九日長崎に原爆投下。八月十四日ポツダム宣言受諾(無条件降伏)。八月十五日終戦。十一月六日財閥解体。十二月九日GHQ、農地改革指令。</p> <p>一月二十九日GHQ、日本と南西諸島の行政分離を宣言する。一月天皇人件宣言・安保理成立。 この年土地所有権認定事業おこなわれる(一九七二)</p>

一九四七年	昭和二年	沖繩復興木材(株)取締役就任	五月三日日本国憲法を施行。五月沖繩建設懇談会開催される。六月十五日沖繩民主同盟結成。八月十六日民政府、公営バス創立。十一月この月、配給食の値上げ那覇市開南バス停付近に闇市場発生。戦後ベビーブーム始まる。
一九四八年	昭和三年	<p>大洋林産(株)取締役就任 沖繩海軍協会理事 琉球日産(株)監査役就任 那覇市会議員(一九四八年～一九五〇年)</p>	<p>七月一日「沖繩タイムス」創刊。七月二十一日「市町村制」公布される。十二月国連総会にて世界人権宣言採択。平和通り(那覇市)にテント小屋の市場たつ。</p>
一九四九年	昭和四年	<p>個人的組織として大城組を再興する。 第一相互銀行取締役就任 沖繩資材建築(株)取締役就任</p>	<p>三月二十九日日本政府、本土から沖繩への旅券発行を開始。五月六日米国、沖繩の長期保有を決定。七月二十五日民政府、知念村より那覇市に移転。この月本土と沖繩間の渡航が許可制として制度化される。十月中華人民共和国成立。十一月湯川秀樹に日本人初のノーベル賞。</p>

一九五〇年	昭和二十五年	<p>一月 沖縄民政府の指導によつて琉球海運(株)が発足、理事に就任。琉球サルページ(株)取締役就任 沖縄貿易(株)取締役就任 沖縄自動車協会理事就任 琉球映画貿易(株)社長就任 三月・琉球商工会議所理事就任(三八年八月まで)</p>	<p>一月二十一日米国民政府管理下で琉球放送(AKAR)放送開始。四月十日琉球復興金融基金(一億円)創設。六月朝鮮戦争おこる。 十一月四日沖縄群島政府発足。</p>
一九五一年	昭和二十六年	<p>大城組を(有)大城組に法人化する。 三月・沖縄食料(株)取締役就任 七月・沖縄配電(株)取締役就任 沖縄製瓦工業組合長就任 琉球肥料(株)取締役就任</p>	<p>二月民間貿易始まる。同月琉球大学開学。四月一日琉球臨時中央政府発足。同二十九日日本復帰促進期成会結成。六月八日琉球商工会議所発足。八月民間放送開始(本土)。九月サンフランシスコ対日講和条約、日米安保保障条約調印。</p>
一九五二年	昭和二十七年	<p>沖繩港灣運送(株)社長就任 沖繩建設業協会会長就任</p>	<p>四月一日琉球政府発足(米民政府、初代行政主席に比嘉周平を任命)。四月二十九日の丸限定掲揚許可。五月那覇に公設市場建設。七月一日日本政府、那覇に南方連絡事務所を開設。このころ親子ラジオが普及し始める。</p>
一九五三年	昭和二十八年		<p>二月NHK、テレビ放送開始。五月二十一日琉球工業連合会発足。十月一日真和志市誕生。十月、</p>

一九五四年	昭和二十九年	国際物産(株)取締役社長就任 琉球放送(株)取締役就任 南西火災海上保険(株)取締役就任 沖繩製粉(株)取締役就任 沖繩砂糖産業(株)取締役就任 那覇埠頭倉庫(株)取締役就任	明治橋コンクリート造りに改修される。 この年、愛隣園開園。 四月一日琉球放送局(KSAR)発足。十月一日琉球放送(株)による民放開始。 一月、沖繩木材貿易協会設立。四月十九日沖繩の総人口七十八万七六七八人(統計部)。十月二十二日建設業協会発足。十一月十八日日航の福岡ー沖繩間の航路許可。十二月、石垣空港開港。
一九五六年	昭和三十一年	那覇空港ターミナル(株)社長就任 琉球肥料(株)取締役会長就任 沖繩罐詰(株)会長就任 沖繩纖維工業(株)取締役会長就任 沖繩製罐(株)取締役就任 月の浜海水浴場(株)取締役就任	五月十二日先島航路開設。この年、(株)那覇空港ターミナル設立。十一月一日当間重剛二代目主席に任命。 七月十九日日琉合弁沖繩纖維工業(株)設立。十二月、極東放送を開局。
一九五七年	昭和三十一年	琉球肥料(株)取締役会長就任 沖繩罐詰(株)会長就任 沖繩纖維工業(株)取締役会長就任 沖繩製罐(株)取締役就任 月の浜海水浴場(株)取締役就任	

一九六二年	昭和三十六年	<p>第一製糖(株)取締役就任 久米島製糖(株)取締役就任</p>	<p>六月二十四日高等弁務官、祝祭日に公共建物に国旗掲揚を許可。</p>
一九六〇年	昭和三十五年	<p>南西火災海上保険(株)会長就任</p>	<p>九月一日東京―沖縄間にジェット旅客機就航。</p>
一九五九年	昭和三十四年	<p>沖縄テレビ(株)監査役就任 ゴールデン(株)取締役社長就任 沖縄ライオンズクラブ入会財務委員長就任 (ライオンズクラブチャーターメンバー) 沖縄県ユネスコ協会特別会員</p>	<p>四月九日那覇国際空港ターミナルビル落成。六月三十日石川市宮森小学校に米軍機墜落(死者十七人、負傷者二十一人、校舎、公民館、民家を焼く)。十月二十一日大田政作三代目主席に任命。十一月一日沖縄テレビ開局。</p>
一九五八年	昭和三十三年	<p>沖縄県経営者協会顧問(平成二年まで)</p>	<p>一月十二日那覇市長選、兼次佐一当選、民連ブーム起る。七月十八日沖縄経営者協会発足。十月十五日守礼門復元完成。</p>
		<p>(株)大越百貨店社長就任 琉陽産業(株)取締役就任 オリオンビール(株)取締役就任 六月(株)大越百貨店社長に就任 十一月朝日物産(株)取締役社長就任</p>	

<p>一九六九年</p>	<p>昭和四〇年</p>	<p>一九六三年</p>	<p>一九六二年</p>	
<p>昭和四〇年</p>	<p>昭和四〇年</p>	<p>昭和三八年</p>	<p>昭和三七年</p>	
<p>琉球経営者協会顧問就任 琉球商工会議所第三号議員選任 沖繩ライオンズクラブ会長就任</p>		<p>北部製糖(株)取締役就任 琉球セメント(株)取締役就任 大宝証券(株)会長就任 大世商會会長就任 与那国製糖(株)取締役就任 大豊不動産(株)社長就任</p> <p>沖繩ビーエスタイヤ販売(株)社長就任 琉球石油(株)取締役就任 新沖繩観光開発(株)取締役就任 ブリヂストンタイヤ沖繩販売(株)社長就任 世界各国の産業界を視察し見聞を広める。</p>		<p>三月六日国際大学(四年制)設立許可。</p>
<p>二月二十三日エア・アメリカ、石垣と与那国諸島間運航開始。八月十九日佐藤首相、沖繩を訪問。那覇空港で「沖繩の祖国復帰が実現しないかぎり、日本にとって戦後は終わらない」と声明。十月朝</p>		<p>四月二十八日祖国復帰県民総決起大会(北緯二十七度線で本土・沖繩が初の洋上交歓)八月十七日久米島航路定期貨客船「みどり丸」沈没(死者一三〇人・行方不明十六人)。</p> <p>七月一日離島航路、米民政府の指示で米資本会社の運航に切替えられる(エア・アメリカ)。十月東京オリピック。十月三十一日松岡政保立法院で主席指名。</p>		<p>三月六日国際大学(四年制)設立許可。</p>

一九六九年	昭和四四年	<p>二月・沖繩電子計算センター(株)(現(株)OCC)取締役就任</p>	<p>永振一郎ノーベル物理学賞受賞。この年イリオモテヤマネコ発見。</p>
一九六七年	昭和四二年	<p>七月・南西航空(株)取締役会長就任 七月・琉球経営振興協会顧問就任 七月・沖繩県護国神社理事会副会長就任</p>	<p>七月大城立裕「カクテルパーティー」で沖繩初の芥川賞受賞。同七月那覇―久米・宮古・石垣・南大東・宮古―石垣間に南西航空運航開始。十月二日沖繩放送協会(OHK)発足。十二月二十二日宮古にテレビ局開局。同二十三日八重山にテレビ局開局。</p>
一九六八年	昭和四三年	<p>七月・東洋石油精製(株)取締役就任 叙勲・勲三等瑞宝賞受章</p>	<p>一月一日琉球高等裁判所設置。十一月十一日初の公選主席に屋良朝苗就任。</p>
一九六九年	昭和四四年	<p>国際物産(株)代表取締役会長就任 那覇港運(株)代表取締役会長就任 沖繩オーシャン(株)代表取締役会長就任 ブリヂストンタイヤ沖繩販売(株)代表取締役会長就任</p>	<p>七月米宇宙船アポロ十一号月面に着陸する。十一月二十二日沖繩返還、佐藤・ニクソン会談、七十二年返還で合意。福地ダム着工(七四年完成)。</p>

一九七〇年	昭和四五年	<p>琉球映画貿易(株)代表取締役会長就任 大豊不動産(株)代表取締役会長就任 (株)沖繩三越社長就任 (株)大城組社長就任 沖繩谷茶観光(株)(沖繩グランドパーク)取締役就任</p>
一九七一年	昭和四六年	<p>七月・光南薬品(株)(現ダイコウ薬品)取締役会長就任 十月・那覇市大綱挽保存会顧問就任 十一月・社会福祉法人基督教児福祉会愛隣園後援 会会長就任 十一月・宗教法法人沖繩成田山奉賛会会長就任</p>
一九七二年	昭和四七年	<p>五月・ゼネラル石油沖繩販売(株)取締役就任 七月・沖繩県生コン協同組合理事就任</p> <p>三月万国国際開催(大阪)。十一月十五日戦後初の 国会議員選挙実施。十一月三十日行政府、沖繩の 総人口を九四万五四六五人と発表。十二月二十日 深夜、コザで反米暴動発生。</p> <p>六月十七日沖繩返還協定、日米で同時に調印。十 月八日日本政府、一ドル＝三六〇円補償決定。十 月二十二日日本政府、七五年沖繩で海洋博開催を 決定。十二月二十日ドル＝三〇八円換算。</p> <p>一月東峰夫「オキナワの少年」で第六十六回芥川 賞受賞。五月十五日施政権が日本政府へ返還され</p>

一九七五年	昭和五〇年	<p>琉球生コン(株)取締役就任 (株)玉城園地(琉球ゴルフ倶楽部)取締役就任</p>	<p>七月十七日皇太子夫妻南部戦跡参拝。七月二十日海洋博開催。</p>
一九七四年	昭和四九年	<p>五月・財団法人日本ボーイスカウト沖繩連盟理事就任</p>	<p>県と那覇市、モノレール路線について協議、奥武山―石嶺線を了解。</p>
一九七三年	昭和四八年	<p>六月・(株)サンホーム取締役就任 十二月・沖繩電波協力会理事</p>	<p>八月金大中事件。 十月中東戦争勃発。十一月物不足、買いだめ騒ぎおこる。</p>
		<p>七月・首里観光(株)(沖繩グランドキャッスル)会長就任 十二月・日産ディーゼル沖繩販売(株)取締役就任</p>	<p>〈沖繩県〉となる。通貨交換はじまる。同二十五日知事・県議員選、新知事に屋良朝苗。十二月八日日独の動物学者によるイリオモテヤマネコの生息調査はじまる。</p>

一九七七年	一九七七年	一九七六年
昭和五十二年	昭和五十二年	昭和五十二年
<p>沖繩県功勞賞（産業経済功勞）受賞 琉球新報産業経済功勞賞受賞</p>		
<p>三月十六日伊佐千尋「逆転」大宅荘一賞受賞。同 三十日那覇―北大東島間（南西航空現JTA）航空 路開設。七月七日安波ダム起工式。七日三十日交</p>	<p>十一月十八日第一回沖繩の産業まつり開催。</p>	<p>一月十八日海洋博閉幕。二月七日県内配電五社合 併決定。六月三日、五月の県内企業倒産八件、負 債二四億八〇〇〇万円と発表（東京商工リサーチ）。 十二月琉球海運に「会社更生法」適用。</p>

一九七九年	昭和五十四年	九月・沖縄マネージメントサービス(株)取締役就任	通方法変更が全県的に実施されへ人は右、車は左の制度が発足せざる。八月日中平和有効条約、北京で調印。
一九八〇年	昭和五十五年		五月十四日那覇―石垣間に一三〇人乗りのジェット機就航。八月十日南西航空、沖永良部線を開設。
一九八一年	昭和五十六年	八月一日・沖縄県観光振興公社の功績により観光功労賞受賞	十月福井健一教授にノーベル賞。 ケラマ飛行場開設。
一九八二年	昭和五十七年	七月十日・那覇商工会議所、永年勤続役員として表彰を受ける。	
一九八三年	昭和五十八年	九月五日・社団法人内外情勢調査会より感謝状受賞	

一九八八年	昭和三十二年	<p>財団法人沖繩県人材育成財団より感謝状受賞 大宜味村育英会より感謝状受賞 八月七日・那覇市観光功労者表彰 九月二十日・運輸大臣表彰</p>
一九八七年	昭和三十一年	<p>四月十七日沖繩国際センター開所。十一月一日、日銀、新札発行、一万円(福沢諭吉)、五千円(新渡戸稲造)、千円(夏目漱石)。</p>
一九八五年	昭和六〇年	<p>五月七日陶器の金城次郎氏が人間国宝に決定。 二月一日熱帯ドリムセンターが本部にオープン。</p>
一九八八年	昭和三十二年	<p>七月一日・沖繩タイムス賞(産業賞)受賞</p>
		<p>九月、沖繩コンベンションセンター開所。同二十日第四十二回国体夏季大会開催。十月八日沖繩自動車道(石川・那覇間、南仲道)開通。利根川進、ノーベル医学生理学賞受賞決定。十月二十五日第四十二回国民体育大会(海邦国体)秋季大会開催。十一月十四日第十四回かりゆし国体開催。</p>

一九九二年	平成四年	
一九九一年	平成三年	<p>昭和三十四年 平成元年</p>
<p>九月二十一日・民間航空四十周年感謝状受賞 十月十八日大城鎌吉死去（九十四歳）</p>		<p>九月二十日・財団法人日本航空協会航空亀齡賞受賞</p>
<p>九月十二日米、スペースシャトル「エンデバー」打ち上げ、日本人初の毛利衛搭乗。</p>	<p>一月十六日米を中心とする「多国籍軍」、イラク空爆開始。四月二十二日芦屋市に全国初の女性市長誕生。</p>	<p>一月七日昭和天皇崩御。同八日平成と改元、施行。 八月二十三日世界のウチナーンチュ大会開催。十月、県新庁舎完成。</p>

賞
罰

昭和四三年十一月三日

勲三等瑞宝章

昭和五三年三月十二日

沖縄県功労賞（産業経済功労）

昭和五三年九月十五日

琉球新報賞（産業経済功労）

昭和五六年八月一日

沖縄県視光功労賞

昭和五七年七月十日

那覇商工会議所永年勤続役員表彰

昭和五八年九月五日

社団法人内外情勢調査会感謝状

昭和五九年五月一日

財団法人沖縄県人育成財団感謝状受賞

昭和五九年七月三十日

大宜味村育英会より感謝状

昭和五九年八月七日

那覇市視光功労者表彰

昭和五九年九月二十日

運輸大臣表彰

昭和六三年七月二日

沖縄タイムス賞（産業賞）

平成元年九月二十日

財団法人日本航空協会（会長 荒木久）航空亀齡賞

平成四年九月二二日

民間航空四十周年感謝状

編集後記

大城鎌吉前会長が物故されてから、はや、三年になろうとしております。二年ほどまえでしようか、生前にご交誼をいただいた方々から、折りに触れて前会長の事績や交友に関する興味深いお話を伺うにつけ、その方々だけが知っているエピソードをとどめておく手立てはないものかと、よく話しておりました。

前会長は、自分自身の人生を綴った『回想八十五年』という自叙伝を著しております。親しくしておられた方々のお話をとどめておくことで別の大城鎌吉像が見えてくるのではと、この追想集発刊の運びとなりました。

平成五年十二月に百人余の方々に原稿をお願いいたしました、五十四人の方々が寄稿して下さいました。國場幸吉氏、長嶺秋夫氏、新垣義徳氏より病氣療養中で、執筆ができないとのご返事をいただき残念に思います。

大扇会の編集委員会では、その都度、会議をもち、作業を進めてきました。時間がかかり、寄稿された方々はさぞかし、いつできるのかと気がかりにされていたことでしょう。また、せっかく、お寄せ下さった写真を紙面の都合で掲載できなかったことをおわび申し上げます。

予定より発刊が遅れましたが責を果たすことができ、ほっとしております。

原稿をお寄せ下さった皆様をはじめ、多方面の方々にとお世話になり、お礼申しあげます。

それから、発刊を見ることなく他界されました宮島健次氏、平田忠義氏、そして子息の康秀氏、三氏のご冥福をお祈り致します。

多くの方々がこの本に目を通されることを切に望みます。

平成七年七月吉日

追想 大城鎌吉刊行準備会

宮島健次・真喜志一朗太・冨保俊夫・中本正二・大城信男・堀田恵彦・我部存・上原和雄・徳田安
佑・糸数惇由・冨保勝・石川弘雅

編集委員会

親川光繁・池原厚志・上原幸雄・仲地博巳・平敷好一・大見謝武彦・佐伯万喜夫・玉城優子

監修

又吉稔

参考資料

回想八十五年・大扇会各社会社案内・沖縄大
百科事典・日本史年表・那覇百年のあゆみ・
国会十年の歩み・私の半生記

写真提供

沖縄グラフ社・沖縄タイムス社・琉球新報
社・サザンプレス・石黒茂松・野村健・松川
久仁男・徳元葉子

追想 大城 謙吉

一九九五年十月三十日第一刷

発行者 追想 大城謙吉編集委員会

発行所 大扇会事務局

沖縄県那覇市前島二一九―一三

合資会社 大城物産内

千九〇〇

電話 ○九八（八六九）〇一五一

編集協力 (株) サザンプレス

印刷所 (協) 丸正印刷

製本所 仲本製本

非売品

